赤ひげ王弟と凍漣の雪姫

kutai

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バラベザ海戦から１０年が過ぎ、王弟クレイシュは数々の軍功を重ねていたが、ムオジネルの北隣ジスタートの七公国でも世代交代が進んでいた。ムオジネルと国境を接するオルミュッツ公国では、当時六歳の女児だった青い髪の少女が母から竜具を受け継いでオルミュッツの公主となり二年目になったとき、ブリューヌとジスタートの国境付近でのディナント平原で、二万五千のブリューヌ軍がライトメリッツ公主エレオノーラ率いる五千に敗北した。これを契機に、ブリューヌ国内のみならず隣国も激動に見舞われようとしていた。

※ミラが出てこないのは第１話と第１１話、第１２話のみです。どうかとばさずにオルメア会戦参戦前のミラの動きをお楽しみください。

目次

0話前編　陰謀 ―― 1
0話後編　陰謀その2 ―― 11
第1話　ムオジネル軍動く！ ―― 19
第2話　アニエスの奇襲戦（その1） ―― 26
第3話　アニエスの奇襲戦（その2） ―― 35
第4話　アニエスの奇襲戦（その3） ―― 44
第5話　凍漣の雪姫参戦 ―― 52
第6話　軍議 ―― 61
第7話　オルメア会戦（1）『銀の流星軍』オルミュッツ軍の攻勢
70
第8話　援軍要請 ―― 79
第9話　騎士団集結、オルメア会戦（2）ムオジネル反撃 ―― 87
第10話　オルメア会戦（3）騎士団参戦、戦局二転三転 ―― 95
第11話　レパティウムの海戦前編 ―― 104
第12話　レパティウムの海戦後編 ―― 111
第13話　オルメア会戦集結その後 ―― 118
エピローグ前編　新たなる戦いの序曲（1） ―― 124
エピローグ後編　新たなる戦いの序曲（2） ―― 132

0話前編　陰謀

「七鎖(セラシュ)か。」
「・・・。」
　大柄でかつ鍛え上げられた体躯、険しい目にひげ面の精悍な男が豪奢な屋敷の一角の陰に向かって声をかけているように見える。
「この者たちの顔を覚えておけ。赤い髪の男はティグルブルムド＝ヴォルン、白髪で赤い瞳の女は、ジスタートの戦姫エレオノーラ＝ヴィルターリア。ブリューヌの地をふみにじる国賊だ。こやつらを暗殺するのだ。」
「・・・・。」
「近くに誰かいた場合はどうするか？か。仕方ないな。事故ということだ。」
　テナルディエは笑みを浮かべる。
「・・・。」
　刺客もにやりと微笑む。無言はすなわち承諾だった。
「よし。いけ。」
　刺客は姿を消した。
　刺客たちはライトメリッツとブリューヌの国境に近いエレンの別荘キキーモラの館にしのびこむ。
（いたぞ。）
（そうだな。）
（あれが白銀の髪の女、赤い髪の男もいるな。）
　なにやら白銀の髪の女は吐き捨てるように話す。
「口を開けばやれ礼儀だの品性だのやかましいくせに、自分がジャムをぶら下げて歩くのを嗜みだとぬかす、・・・　なんというか・・・　芽の伸びきったジャガイモのような女だ。」
（かなりひどいな。ククク。）
　バターーーン。
　ドアが勢いよく開く。
「――黙って聞いていれば・・・　だれがジャガイモですって！」

青い絹服を着た青い髪の少女が怒鳴り込むようにして部屋に入ってくる。
（・・・）ニヤリ
（もう一人来たな。）
「リム!!」
白銀の長髪の女は部下と思われるつやのない金髪の青い瞳をした女を怒気を帯びた口調で呼ぶ。
「なぜ私の館にそいつが足を踏み入れるのを許した？」
「戦姫たる方を追いかえすわけにはまいりません。」
それからは、二人の戦姫同士の罵倒の応酬。
刺客たちもあきれていた。
（どうする？）
（ここでは無理だな。警戒される。）
「ついてらっしゃい。ティグルヴルムド＝ヴォルン伯爵。」
「お・・・ お前何のつもりだ？」
「私がここにきたのは彼に会うため。ここに、あなたの別荘があることを思い出して念のために寄ってみたの。ここへ来てみて正解だったわ。」
「俺に何の用だ。」
「少し話をしたいだけ。嫌かしら？」
「ご免だな。」
ティグル本人ではなくエレンが返事をして言い争いが再開される。
「場所を変えよう。予定より少し早いがロドニークへ行くぞ。」
（どうやら場所を変えるようだな。）
屋敷を出て、エレンとリムが馬を並べ、その後にミラとティグルが並んでついていく。
ロドニークの町へ入ると小麦の粥の食欲をそそる香りがただよってくる。
「ちょっと食べていかないか。」ティグルが話すと
「うん。そうだな。お前が言うならそうしよう。」とエレンは同意する。

「わたしはいらないわ！。戦姫が露店でものを食べるなんて・・・ それに空腹というわけでも・・・。」
リュドミラは強い口調でいうものの、彼女のお腹が、くぅぅぅぅという小さな音をたてる。
ティグルとリムはなにも聞いてないように装うが、エレンだけは肩を小刻みに震わせ、笑いを抑えるような表情である。
「そーかそーかw。誇り高い戦姫であるリュドミラさまは、露店の麦粥ごときは食えないかぁ～。」
エレンは、わざとミラの近くに来て、スプーンで粥をこれ見よがしに口に入れてみせる。
(((((・・・ 大人気ない・・・・)))) ティグルと気配を悟られぬよう遠くからみている刺客たちは同じ感想を抱いた。
ミラは、目を細めて、唇をとがらせ、あさってのほうを向いてみせる。その表情はかすかな羨望とそれについての恥ずかしさと大部分の怒りを押し隠して平静を装おうとするものだったが隠しきれていない。
「エレオノーラ様！」
リムが眉をひそめて諌めるが、エレンはそっぽを向いて耳を貸さない。
「俺も腹が減ったから買ってきていいか？」
エレンがうなづいて承諾を示すと、自分とリムの分をよそってもらい、
「よかったら、すこしどうです？男だからか多めに盛ってもらえたので。」
「・・・ それなら、いただくわ。」
ミラは椀を受け取り、粥に封ふぅふぅと息をふきかけて、一口スプーンですくって口に運ぶ。素朴であるがなんともいえない木の実と鶏肉と旨みが口いっぱいにひろがる。
「・・・ 悪くないわね。」
ミラの顔がぱあっと明るくなる。
「そいつはよかった。」

ミラは微笑をうかべ
「今度、わたしの紅茶をご馳走してあげる。」
するとむんずとエレンがティグルの襟首をつかみひきずっていく。
「お前！なんであんなことをする！」
「それはこっちのセリフだ。」
「お前はわたしのものだろう。だったらあのくらい・・・。」
露店で麦粥を食べて言い争っている若い男女をみて隣国のやんごとなき戦姫とか貴族だとかみなさない。
（痴話げんか？よくやるわね。）
（三角関係？）
（痴情のもつれかしら？）
ぼそぼそと小声のうわさ声が聞こえてエレンは赤くなってうつむき黙り込む。
「どうしても好きになれなかったり、嫌いなやつがいるのはわかる。でも角突き合わせてばかりだと疲れないか？」
「・・・・ もうちょっと大人になれといいたいのか？」
「・・・ もうちょっと気楽にいかないか。怒っている時間よりも笑っている時間が多いほうがいいと思うんだが。」
「・・・ わかった。」
エレンはため息といっしょに吐きだすようにつぶやいてから、笑みをうかべる。
「笑っている時間が多いほうがいいというのは賛成だ。お前やリムに心労かけさせるのも本意じゃないしな。だが。」
いきなりティグルの鼻をかるくつまんで引っ張った。
「あの女に粥をくれてやったのはやっぱり気に入らない。このくらいは許せ。」
しかし、「これくらい」ではすまなかった。
四人は宿にとまることにして、ティグルはエレンに教えてもらった浴室へはいろうとすると、青い髪の少女が浴室からあがろうとするところだった。
ティグルは驚きのあまりかたまってしまう。青い髪の少女―ミラ

―も一瞬固まるが、我に帰るのは早く、ラヴィアスを握るとティグルに突きつける。
「身体を隠してくれ。恥ずかしくないのか。」
「犬や猫に身体を見られて恥ずかしいと思うの？」
「・・・・。」
「その様子だと私を辱めにきたわけじゃなさそうね。」
「偶然だよ。誰かが入っていると思わなかったのはこちらの落ち度だ。」
「何かもうひとつ忘れてない？」
「申し訳ありません。」
次の瞬間ティグルは槍で頭を痛打されたのだった。
翌朝、四人はロドニークを出る。
ミラは、冷ややかな怒りで押し黙る。エレンは苦笑している。ティグルはばつが悪くて押し黙っている。リムはティグルに同情の視線を向けるもののわずかに呆れや軽蔑が含まれている。
（ククク・・・）
（面白いが任務を忘れるな。）
（うむ・・・）
（ライトメリッツの公宮に行く道はここだろうとおもってわなをはっておいた。）
（なるほどな）ニヤリ
標的を含む四人は荒野を通過し、周囲は草原になり、細い街道になる。前方に森が見え、それを通過すると公宮に通じる街道につながるように思われた。
（そろそろ来るな。）
銀髪の娘から笑みが消える。彼女の武器が反応しているようにも見える。
（気づかれたか。さすがにするどいが・・・ ここでやめるわけにいかん。）
銀髪の娘の部下であるつやのない金髪の娘も気配を感づいたようだ。

青い髪の娘と赤い髪の青年も警戒しはじめる。
「・・・ 囲まれたな。」
銀髪の娘がつぶやく。
「暗殺者ですか。」
つやのない金髪の娘が問いかえす。
「野盗にしては出てくるのが遅すぎるな。だれが狙われているものやら。」
「わたしかあなたのどちらかでしょう。」
青い髪の娘が銀髪の娘に答えるように話すが、銀髪の娘は笑顔で首を振る。
「ティグルだっていまでは立派な標的だ。ティグルを殺せればテナルディエ公爵あたりは小躍りして喜ぶだろう。私をブリューヌから追いはらえるしな。」
「いくつもの意味でありがたくない話だな・・・。」
「引き返しましょうか？エレオノーラ様。」
（ククク・・・ 一見賢明そうな選択だがそんなことは織り込み済みよ）
ニヤリ
（そうだ。そうしろ）ニヤリ（ククク・・・）
「こんな細くて荒れた道でか？馬首をひるがえした瞬間にやつらは襲ってくるぞ。」
「矢を一本くれ。」
赤い髪の青年が銀髪の娘の意図が読めずに矢を一本手わたす。
銀髪の娘が放り投げた矢がたくみにしかけた鋼糸にあたってあたかも空中でいきなり裂けたように真っ二つになる。
「やはりな。」
「何だ？今のは？」
「鋼糸って言って糸状のよく研いだものだ。足元に張れば脚が切れる。首に当たれば首が落ちる。これ一本だけじゃないだろうな。」
「そういうことね・・・ この連中、先回りして前方に張っていたってわけね。道理でここまで接近を許したはずだわ。」
「すぐにしかけてこないのは、わたしたちがやつらを振り切ろうと馬

を飛ばすのを待っていたってことだろう。かなり前からこちらの様子を探っていたと見える。」
「エレオノーラ。あなたの「竜技」でまとめて吹き飛ばしなさいな。」
「地面がえぐれて馬で進めなくなるぞ。回りの木も巻き込むしな。」
赤い髪の青年は「竜技」とはなにか聞きたそうにつやのない金髪の娘に視線を向けると、金髪の娘は「竜技」について説明する。銀髪の娘が赤い髪の青年に話しかける。
「ティグル、何か案はないか。この女は面倒くさくて働きたくないとぬかした。」
青い髪の娘は反論する。
「捏造はやめなさい。捏造は！まずはあなたが力を尽くすようにいっただけでしょう。」
ティグルはあきれを取り越して感心してしまう。暗殺者がすぐそばにいるというのに平気でにらみ合いなんかしている。
ティグルは水筒をとりだして、中の水をぶちまけるように振りまく。
ぱしゃり、という音がして地面に黒いしみができるが、空中でいくつもの直線に無数の水滴がならんで日に照らされてきらきらと光る。
「明かりがあれば、それに反射してもっと見やすくなる。ところでこれを切ったらまた別のわなが・・・ なんてことはないよな？」
「さすがにそんな余裕は向こうにもないだろう。今日ロドニークを発って、この街道を通ることがわかってから仕掛けただろうからな。」
（死ね！）
赤い髪の青年は矢を番おうとするが
（おそいわ！）
間に合わないことをさとる。
直感的に足を鐙からはずして馬上から転げ落ちる。
（よくさけたな）ニヤリ
太矢が馬上を通過して木の幹に刺さる。
太矢が飛んできた方向へ。ティグルは矢の狙いをさだめようとする。

（今度こそ、死ね！）
指くらいの細さの筒をくわえて吹き矢を放つ。
（!!）
そのときティグルを正確に狙ったはずの吹き矢は地面をすべるように吹いた風にあおられて全く何もない地面に落ちる。
（ぐつ・・・）
ティグルの放った矢は、眉間に突き刺さる。
（やられた・・・）
銀髪の娘が赤い髪の青年に笑顔で話しかける。
「安心しろ。大岩でもない限り針だろうが矢だろうがわたしたちには当たらない。」
「助かる。冗談抜きで。」
「この連中・・・。」
冷然と暗殺者の死体をみていたミラがつぶやく。
「七鎖（セラシュ）ね。」
「七鎖？」
リムが問いかえすと
「必ず七人で行動するという名うての暗殺者集団よ。遭遇するのははじめてだけど。」
暗殺者の左腕をラヴィアスで指し示す。
「ここに鎖の刺青があるでしょう。これがやつらの証とされているわ。」
「ずいぶん詳しいな。おまえは。」
「当然でしょう。わがルリエ家には代々の積み重ねがあるもの。ぽっと出のあなたとちがって。」
銀色の髪の娘はむっとしたようだった。
（あのじゃまな金髪の娘を殺ってやる。）
毒を塗った短剣を真上の死角からリムにつきたてようとする。
しかし、リムは真上から襲いかかる暗殺者に感づくと、短剣をなぎはらい、返す刀で暗殺者の首を切り落とす。
（ふつ。死ね。）

毒蛇が降ってきてリムの胸にかみつく。
「リム！」
蛇は銀色の髪の娘の娘が振るった剣の一閃で切断されるものの、リムの額と顔は毒で蒼白になり、汗がにじむ。
ティグルは、リムの右胸に咬まれた牙のあとを見つけ、リムの服の胸の部分を引き裂き、口で毒の入った血を吸い出して吐く。
（ふふ・・・　終わりだ）ニヤリ
暗殺者たちは四人いっぺんに襲いかかる。ティグルとリムは身動きできない。エレンはリムの負傷で動揺していて反応がにぶい。冷静なのはミラだけだった。
ミラは
「ラヴィアス。」
と彼女の竜具の名をつぶやく。
槍の柄はぐぐっと伸びる。そしてミラは
「空さえ穿ち凍てつかせよ（シエロ・ザム・カファ）」
とつぶやいて、槍を垂直に地面に突き立てた。
（!!）
すると冷気が爆発するようにわき起こり、たけのこ状の無数の氷の槍が放射状に生み出される。
（くっ・・・。）（ぐはっ・・・。）
たけのこのような氷の槍はぐんぐん伸びて暗殺者たちをあっという間に串刺しにした。
ミラは槍を地面から引き抜くと氷の槍もあっというまに崩れ去って消える。
たった一人生き残った暗殺者はその姿を現さないまま行方をくらました。
「エレオノーラ。あなたは戦姫失格よ。部下一人のことでここまで取り乱だすなんてね。」
ミラは、吐き捨てるようにいうと、馬にまたがり、はっ、と叫んで鞭をくれて走り去っていった。
オルミュッツの公宮に戻ってミラはしばらく考え込んでいた。

（あの男のどこに価値を見出したのかしら・・・　もし情だの恋だのという理由だったら困ったものね。己の感情を国事より優先させるようならやはりあなたは戦姫失格よ。エレオノーラ。）
　どのくらい時間がたったであろうか。コンコンと扉をノックする音がしてミラは我に返った。
　上品な白磁のカップに残っていた紅茶はすっかり冷めていた。
「入りなさい。」
　初老の侍従が告げる。
「テナルディエ公爵の使者が参っております。」
　ミラは眉をひそめた。正直あまり会いたくない相手である。ミラはエレンなどから見れば「傲慢ではなもちならない態度がでかくて恩着せがましい箱入り娘」だったが、言い換えれば、それだけの努力に裏付けられた自信と誇りからくるものと彼女なりの善意から来るもので決して悪意があったわけではなかった。戦姫は、名君であり、優れた交渉者であり、名将でなければならない。だからこそ真摯に戦姫としてのつとめを果たそうとするミラにとっては、民をしいたげて外面だけはよく武力と陰謀ですべてを解決しようとするテナルディエ公爵は内心で嫌悪感を抱かざるを得ない。
（このあいだは、テリトリアールで野盗にオルミュッツ製の甲冑を着せてたって話もあったわね。ほんとにふざけてる。まだ、エレオノーラのほうが礼儀知らずで不愉快な相手だけど陰湿さや狡猾さがないだけ嫌悪感がすくないわ。）
　ため息をはきすてると
「謁見の間へ通しなさい。」
　ミラは侍従に命じて、椅子から立ち上がった。

0話後編　陰謀その2

使者が持ってきた手紙は、形式が整えられて社交辞令と美辞麗句がつくされていたが、要点としては、
（エレオノーラを牽制し、自領を空けてブリューヌに来るようであれば、ライトメリッツに形だけでも攻め込んでほしい）
といった内容であった。
ミラも形式が整え社交辞令と美辞麗句を尽くしつつも、事情を了解した旨、そして（エレオノーラを牽制し、彼女が自領を空けてブリューヌに来るようであれば、必要に応じてライトメリッツに攻め込む）旨を書いた手紙をしたためる。そして
「これをテナルディエ公にわたすように伝えてちょうだい。」
と侍従を通して使者にわたした。
「オルミュッツの兵が国境付近に集結している？」
「はい。数はおよそ二千ほどで、冬に備えた訓練とのことです。」
「リュドミラはいるのか？」
「偵察に出た兵の多くがそのお姿を認めております。」
しばらくするとヴォージュ山脈を越えようとするあやしげな旅人を捕らえたという報告が入り、その旅人、すなわちテナルディエの「密使（笑）」がオルミュッツにあてた「密書（笑）」を持っていることが判明した。
その密書（笑）＝手紙には例によって形式が整えられて社交辞令と美辞麗句が尽くされているが内容を要約すると（エレオノーラがブリューヌに向かったら、直ちにライトメリッツに攻め込んでほしい）
という手紙だった。エレン、リム、ティグルはこの手紙がわざと自分たちの手に渡るようしかけたという結論に至り、もし、リュドミラに敵意がないなら兵を引くように懇願する使者を二度にわたって送ったが、拒絶され、ライトメリッツ軍とオルミュッツ軍はブルコリネ平原で交戦することになる。
そしてライトメリッツ軍にいつのまにか一人の兵士が加わった。腕には鎖のような文様の刺青があったが、誰も気づかなかった。命令

に忠実であり、無口で目つきが険しいほかはとりたてて変わったところが見受けられないように思われたのでエレンには一切報告されなかった。
　ブルコリネ平原で交戦したライトメリッツ軍とオルミュッツ軍は、それぞれ被害を出しながら後退した。数日後、オルミュッツ軍は朝もやにかくれてひそかにタトラ山まで退却する。
「タトラ山に黒竜旗と短槍を十字状に交差させた三角形の軍旗を見ました。まちがいなくオルミュッツの軍旗です。山道にいくつもの防御陣地を築き籠城するつもりのようです。」
「やられた・・・。」
　タトラ山の山道には、リュドミラの指示による防御陣地が幾重にも連ねられている。広い壕を掘り、柵を張りめぐらし、木材や石、土で固めた防壁を築き、その後ろに高台を設置して弓兵を配置している。
「お前ならどう攻める？」
　エレンに問われてティグルは考えるが、兵を突撃させても弓矢で狙われるだけであるのはすぐにわかる。
「破城槌や投石器を使うしかないな。」
「いや・・・ 要所要所がラヴィアスの力で凍らせてあって下手な城門よりも硬い。高台の弓兵を射おとすことはできるか？」
「できるけど鉄製の長盾でふせがれてしまうから意味がないな。エレンが以前に地竜を倒したあの技は？」
「ああ、竜技か・・・。まず、距離が遠いと効果がない。高台まではとどかない。もうひとつは、あの竜技は周囲の風の力を集めるので、撃った瞬間に風の守りが一切効かなくなる。そのときに矢を射かけられたら・・・。」
「まるでエレンに対抗するために造られたみたいな陣地だな。」
　エレンは、肩をすくめて笑みを浮かべる。
「もうわかったと思うがあの陣地はアリファール対策のためにあいつの祖母が考えたものなんだ。だから竜技の効果を計算して造られている。先代もあの陣地にはずいぶん苦しめられたという話だ。」
　エレンとティグル、リムはタトラ山攻めの方法を考えた末、山道以

外に城塞の裏手に出れる通路をさがそうということになった。ティグルは熊のかぶりものを全身にまとって「ウルス」と名乗る狩人になる。しかし、山に入ると同じ狐を射たことで敵であるはずのミラに出会ってしまう。毛皮をミラ、肉と骨は「ウルス」がもらうことにした。

狐をさばき、肉を食べた後、ミラは「ウルス」に紅茶をいれた。

「飲みなさい。」

「ウルス」は少々疲れていた。しかし、紅茶の品のある香りが鼻腔をくすぐり、苦味と甘味と旨みの絶妙なハーモニーが口のなかにひろがる。たまった疲れがいっぺんにとれるようだった。

「・・・ うまい。」

「紅茶はいいわよね。身も心もいっぺんにいやされる。」

ミラは満足さと無邪気さと誇らしさのまじった笑顔を向けた。

なぜ戦姫である者が一人で狩りにでるのかと「ウルス」はミラにたずね、話していくうちに狩人「ウルス」に気を許したミラは心にたまったうっぷんをぶちまけた。

代々戦姫を受け継いできたルリエ家の当主としての矜持、そのために押し殺している感情、嫌いな相手と交流を続けていかなければならない自分の立場・・・

他人を駒としか見ず、陰湿な陰謀と武力と脅迫によってすべてを解決しようとするテナルディエ公の態度、外面はいいが何を考えているかわからない嫌悪感、あのザイアンていうバカ息子、アルサスで戦死したというが、一見貴公子然としているが親の悪い部分のみうけついでどことなく下品で好きになれなかった。そしてこのあいだ、テリトリアールでティグルたちが討伐した野盗の甲冑…。

「自分の陰謀や政略のためになんで野盗ごときに、なんでうちの、オルミュッツの甲冑を着せるわけ！ありえないわ！礼儀以前の問題よ。年端のいかないわたしが、何事にも真剣に取り組んでいるのに、あの男がやっているのはただの弱いものいじめ。高貴なるものの誇りというか義務という感覚がない！。」

「今日ね。わたしがひとりで狩りに出たのは・・・ 皆が許してくれたのは、それを察してのことなの。せめて一時的にでも気晴らしをっ

て・・・。」
「ウルス」はただただうなづいて彼女の話をきいていた。
「ウルス、あなたの名前覚えておくわ。あなたの弓の腕はすばらしい。その気になったらいつでもオルミュッツの公宮にいらっしゃい。」
　ミラは歩き去っていき、「ウルス」はその足跡をたどるようにして寒さに耐えながら城塞の裏手に出れる通路をようやくのことで発見し、夜を山で過ごして朝になってから下山した。
　その晩、狩りからもどるとミラは兵たちに図面を示して命じた。
「城の裏手に１００名から２００名弱なら攻撃可能な空間がある。山道のものよりも深くなくていいから至急壕を掘って。柵と防壁をこのとおり用意して。」
「それから、城門は、鉄板三枚と樫の板をはさんで。わたしの指示通りに陣地を築いてもらえれば、破城槌や投石器もアリファールも城門をうがつことができないはず。」
「城壁の上の弓兵を三倍にして。」
　こうして城塞の裏手に幾重もの柵と防壁陣地が築かれた。
　エレンとティグル、リムがタトラ山の裏手にまわったとき、新たに防御陣地が構築され、城壁の弓兵が増やされているのが見える。
「ティグル、お前の報告より警備が厳重だぞ。」
「ほんとうにあんなものはなかったんだ。」
　と答えつつ
（こんなところまで人がこれるようならいろいろと考え直さないと）とミラがつぶやいたことがおぼろげに思い出される。
「お前に会ってリュドミラのやつが考えを変えたのかもしれないな。」
　引きかえすかとたずねたが、エレンは首を振った。
　お前の努力も兵のがんばりも水泡に帰す、わたしがあの陣地と城門をつきくずすと主張した。
　エレンが放った竜技「大気ごと薙ぎ払え（レイ・アド・モス）」は陣地を突きくずすものの城門までとどかない。アリファールに風の力を集めようとするエレンにオルミュッツ兵の矢が雨のように襲いかかる。ティグルは彼女をかばってひきづっていく。

（どうしたらいい・・・。）
　ティグルははたと思い当たる。モルザイムで飛竜とザイアンを射落としたときのことだ。
「頼む。お前の力を俺にかしてくれ。」
　ティグルはアリファールを見つめて必死に訴える。
　ささやかな風がティグルの髪をなでる。
「浮気ものめ。」
　エレンは苦笑し、ティグルと肩を並べ、剣を持つ手をのばした。ティグルは、弓に矢をつがえて引き絞る。ティグルの矢にアリファールからの風が流れ込んでいく。矢の周りに黒々とうずまく気流が点滅するように光を放つ。ティグルの弓から矢がはなたれると空気を切り裂くような異音を発しながら気流が城門を丸くくりぬいた。
「突撃！」とエレンが命じるとライトメリッツ軍は怒涛のように進軍する。
　鎖の刺青の男はそのようなライトメリッツ軍の兵士のなかにひそむ。エレンとティグルを視野にいれ、なおかつ襲いやすい位置にたくみに陣取る。
（まだ、遠いな。しかし、やるさ）
　タトラ山の城塞の外郭はライトメリッツ兵によって埋まる。内郭と外郭を隔てる濠と橋でオルミュッツ兵は必死に防ぐものの、エレンの剣技とティグルの矢がオルミュッツ兵を倒していく。
「エレオノーラ！」
　怒気を含んだ叫びでエレンの名を呼び、凍漣ラヴィアスをかまえたミラが現れる。
「下がれ！」
　戦姫たちの一喝する声に、自らの主君の一騎打ちを妨げぬよう兵士たちは下がる。
　長剣と槍の数十合による打ち合い、竜技まで交えての一騎打ちはまったくの互角であり、お互いの竜技ではじきとばされ、二人とも腰をついて、肩で息をしているような状態であった。
「ティグル。くるな。何、もうすぐ終わる。」

「そうね。終わらせましょう。」
　そのときライトメリッツ軍のなかから、エレンをめがけてすばやくおそいかかる男がいた。腕には毒を焼き付けた短剣をもっている。エレンのすこし手前にミラがいた。
（くっ。相棒の敵だ。この女もついでに葬り去ってやる。）
　そう考え、ミラに短剣をつきたてんとしたとき、その男の頭は一本の矢に貫かれていた。
　ブリューヌ南部ネクタクムの都ランスにあるテナルディエ公爵の屋敷に斥候がおとづれていた。
「七鎖は失敗したか。」
「はい。最後の一人もタトラ山でヴォルン伯爵に射殺されました。それから・・・。」
「何だ？」
「オルミュッツ公主のリュドミラ様は中立を宣言し、一切協力しないそうです。」
「あのガキめ。もともとお嬢様育ちで鼻持ちならない小娘だった。もうよい。」
（ガキのくせに高貴なる者の義務だと。笑止な。民など草だ。無能なやつしか生み出さない場所は増税で搾り取る。文官はこきつかう。武官は戦場で勝てなければ死だ。力こそ全てだ。）
「さて。国内では逆賊を討つようナヴァール騎士団をうごかした。さてオルミュッツの小娘以外に使える駒に心当たりはないか？」
「ルヴーシュの異彩虹瞳（ラズィーリス）女をつかいましょう。ライトメリッツの銀髪女に父親を殺されたり、難民の処理などでお互いに不満をもっています。ライトメリッツの銀髪女は、レグニーツアの戦姫と刎頸の交わりと聞いています。レグニーツアに異彩虹瞳女を攻め込ませれば、銀髪女はジスタートに引き返さざるを得なくなるでしょう。」
「面白いが、ルヴーシュの異彩虹瞳女がレグニーツアに攻め込むための「大義」とやらはあるのか？」
「海賊討伐などで多かれ少なかれもめごとがあります。その導火線に火をつけてやりましょう。」

「わかった。金三万で手を打とう。」
「はっ。」

「ブリューヌのテナルディエ公爵様からの使者がいらしております。」
「通してちょうだい。」
（先日はガヌロン公爵からの依頼があったけれど何かしら？）
　ルヴーシュを治める明るい赤い髪をした戦姫に謁見すると使者はひざまずいて
「ルヴーシュ公主エリザベータ様にはご機嫌麗しゅうございます。」
　と述べた。
「ご用向きはなにかしら？」
「わが国に、反逆者ティグルブルムド＝ヴォルンがライトメリッツの戦姫殿を招きいれて混乱を起こしており苦慮しているところでございます。そこでルヴーシュ公主エリザベータ様におかれましてはどうかお助けいただきますようお願いに参ったしだいでございます。」
「エレオノーラがその長たらしい名前の小貴族を捕虜にしていれこんでいるというううわさは聞いておりますわ。でも、わがルヴーシュとライトメリッツは離れておりますの。ライトメリッツはレグニーツアをはさんで南方にある。それで何を私に望むのかしら。」
「先般の夏に行なわれた海賊討伐におかれましてのレグニーツアの動き、お気になりませんでしたでしょうか？」
「……？」
「わたしどもの記録をご覧ください。」
　そこにはたくみに船団の配列を誘導し、ルヴーシュに海賊の鋭鋒が向くようしかけた戦闘記録だった。レグニーツアは楽な側面からの攻撃で成果をあげ、分配品はほぼ同じということになっている。
「…。」
「これが事実ならば、レグニーツアに抗議しなければならないわね。でもなぜこんなことを知っているの？」
「われわれは、各国に情報網を張り巡らせているのですよ。当然それはジスタート国内にもです。われわれの協力者は貴国にも多い。当

然のことでしょう。」
「アレクサンドラは悪意はないとのことでしたけれど。」
「それはどうでしょう。自分に不利な情報はかくすのではないでしょうか。」
「そう。それでわたしに何をしてほしいのかしら？」
「ライトメリッツの戦姫殿はレグニーツアの戦姫殿と刎頸の交わりと聞き及んでおります。レグニーツアに攻め込んでいただければと。」
「ただ、というわけにはいきませんわね。」
「金三万ほどでいかがでしょうか。」
「わかったわ。レグニーツアに攻め込みましょう。」
　使者はもっと要求されるかと思ったがエリザベータが意外に素直に受け入れたので驚いた。
（予想していたとはいえガヌロン公爵とまったく同じ依頼とは驚いたわ。当然といえば当然かしら。まあ、これでエレオノーラをひきつけて、わたしの力を試すことができる。一年前と違った私の力を…。）
「ご用向きはそれだけかしら。」
「はっ。失礼いたします。」
　礼儀だけは完璧にテナルディエの使者はルヴーシュ公宮の謁見の間から退出していった。

第1話　ムオジネル軍動く！

「王よ。それは考え直されたほうがよろしい。これからの海戦は砲戦の時代になりますぞ。」
　ムオジネルの王宮ではブリューヌ攻めについての軍議が行われていた。
　ブリューヌはディナントの敗北で王子が死に混乱しつつあることはムオジネルにも伝わっていた。今こそ本格的なブリューヌ攻めのチャンスであると国王カワード1世が軍議を召集したのだ。今は王の提案に赤ひげの王弟が反論しているところだった。
「クレイシュよ。ザクスタンが千隻率いてきたときは苦慮していたではないか。
　そんなことが起こらないように用意しておくのだ。」
「いや。王よ。わしは、あのバラヴェザ海戦は、砲戦の効果を試す絶好の機会と感じたのです。そしてそのとおりになりました。わがムオジネルの兵は精強をもって鳴りますが、白兵突撃する前に砲戦で船を沈められてしまったら何にもなりませんぞ。お考え直しください。」
「いうな。もう決めたことなのだ。わがムオジネルの精強さを海戦でもみせつけてやるのだ。」
　クレイシュはため息をついた。
「陛下、アニエスに進む陸路のほうですが・・・。」
　若い精悍な男が発言する。奴隷から成り上がった新進気鋭といってもよい将軍のカシムだ。
「いまブリューヌはディナント平原で敗北し、王子は死亡で内乱状態です。テナルデイエ、ガヌロンは新しい王を傀儡にたてようとにらみを利かせ、そして元アルサス領主とジスタートのわずかながらの兵力が争っています。それからザクスタンが西方の国境にたえず侵入し、ブリューヌ最強と呼ばれるナヴァール騎士団は西方国境から離れられません。
　二万の兵があれば四分五裂になってどうにもならないでしょう。」
　クレイシュは、やれやれと感じた。

「たしかにいまブリューヌは内乱の状態にある。しかし、南の良港を失う愚を知れば、対策をとるだろう。」
「クレイシュ様、そんな心配はないと思いますが。先だってブリューヌは、デイナント平原の戦いで二万五千を率いながらジスタート軍わずか五千に惨敗を喫しました。それは、結局のところ貴族どもの内輪もめでしかもレグナス王子を失っての惨敗です。今度も緊張感の欠いた戦いになるでしょう。」
「カシムよ。ジスタートの再度の介入をふせごうとして、テナルディエは、バカ息子に竜二頭と三千の兵を率いてアルサスに侵入させたそうだ。アルサスは百前後の兵士しか集められない田舎だ。しかもそこの領主はジスタートの戦姫の捕虜になっていた、それがどうなったと思う？」
「!!」
「捕虜になった元アルサスの領主は、一千の兵をジスタートの戦姫から借りて三倍の敵と竜二頭をほふったということだ。」
「・・・・。」
「ディナントのときは、きっかけは治水に関しての村どうしの水争いだったが、それに乗じてジスタートがヴォージュ山脈の街道を得て交易路をつくりたいという狙いはあった。一方、ブリューヌとしては、表向きは王子の花道のための勝利をもたらそうと大軍をととのえたというわけだが、テナルディエとガヌロンにとっては、直系の王子はじゃまだった。手柄を立てさせるどころか混乱の中で戦死したということにすれば、自分たちの息のかかった者を王につけることができるからな。それからジスタートにとっては、ブリューヌ軍についての威力偵察の意味もあった。だから手の内を知らせないためにあの敗北は都合がよかったのだ。」
　カシムはなんとも納得できない様子だった。
　クレイシュは内心でため息をついて心の中でつぶやく。（この男、作戦も補給もそれなりに上手く数々の戦功をたててきただけに確かに有能だ。しかし、情報の分析に甘さがあったり、大局を見通せなかったり、敵をなめたり、実践よりも理論を重視するきらいがある。

それがやつの足元をすくうことにならねばよいが・・・。）
「王よ。兵法の書には正面から戦うには五倍の兵が必要とあります。テナルディエ公は兵一万をこちらに差し向けることができるほかに精強な海軍をもっておるようです。そこへ黒騎士ロラン率いるナヴァール騎士団五千が加われば、兵力の優位など紙一重の差。また敵地に侵入した場合の伏兵の攻撃も考えなければなりませんぞ。」
「うむ。であれば、先遣隊としてカシムに二万を率いさせ、クレイシュが本隊として三万を率いるというのはどうだ？」
（アニエスは荒涼とした地で起伏がはげしくいくつもの岩山や丘がある。カシムには、もっと情報の重要さを認識してもらったほうがいいだろう。）
「わかりました。それでは、先遣隊として二万をカシムに、わしが、本隊三万を率いてアニエスを攻めることにいたします。」
　カシムとクレイシュは、王宮をあとにした。
「カシムよ。功をあせらずに敵地の地図を作成し、今後のために備えることを優先せよ。」
「はっ。」
（クレイシュ様はわしに戦功を立てさせたくないのだな・・・。）
（う～む。おそらく戦功を立てさせたくないためにこう言っていると思っているのだろうな。ブリューヌ全土をいずれ捕ってやるというわしの遠謀が理解できない男らしい。惜しいことだ。）
　ムオジネル軍一万は森林などで野営を巧妙にごまかしてきた半数の部隊と合流する予定だった。
　オルミュッツ公国とムオジネルの国境付近には、ヴォージュ山脈の南端の小高い丘陵地帯となっている。アニエスにいたるまでは森林もあり軍隊が野営を巧妙に隠すのにちょうどよい。
　さて同じ頃、ジスタート南部のオルミュッツの公宮では…
「リュドミラ様」
「何？」
「ムオジネル軍が国境地帯をブリューヌ領へ向かって進軍している模様です。ブリューヌの国境から１５ベルスタの森林で野営跡を発見

しました。」
　リュドミラと呼ばれたのは、オルミュッツ公国を治める公主で、ルリエ家の当主でもある切りそろえた青い髪に青い絹服をつけた少女だった。彼女はオルミュッツ公国の前公主であった母親を二年前に失ってから、母親の持っていた竜具ラヴィアスを引き継ぎ、戦姫として14才でオルミュッツ公国の公主になり、二年を経過していた。内政では名君たること、外交においては、優れた交渉者たること、戦争においては名将であることを幼少時から叩き込まれてきたのである。
「なるほど。あと幾日で彼らはブリューヌに入りそうかしら。それから兵力はどのくらいだと考えられる？」
　あごに手の甲をあてながら小柄であるが高貴な少女は、自分よりも二倍から三倍近い年齢の斥候にたずねる。一見愛らしい小顔だが、鋭さと冷たさを併せ持つ知性と果断さを秘めた瞳が斥候に返事を促していた。
「2～3日ほどで。野営跡の数から考えると一万くらいかと思われます。」
「そう。引き続き監視を続けて。それから海路もね。」
「はっ。」
　ムオジネルとの国境地帯については十分に警戒している。いつムオジネルがオルミュッツに侵入するとも限らないからだ。彼女は数回にわたるムオジネルの散発的な侵入を巧妙な守りで被害を最小限に抑えてきた。守戦の巧者としてムオジネルにも知られていた。
（しかし、ブリューヌの国境から15ベルスタになるまでオルミュッツの監視網をごまかすなんて・・・。たった一万をかくすためにこんな手の込んだことするかしら・・・　なにかあるわね。ただの奴隷の略奪じゃない。）
　この一件についての、リュドミラ＝ルリエ―親しい者にはミラと呼ばせている―の警戒度は上昇した。
　ムオジネルの都ブルサからブリューヌの国境まで約400ベルスタある。陸路で一万、もう一は、海路をつかい国境地帯の港トリエステまで運ぶ。そこから海軍もととのえてブリューヌ南岸の港をおそ

うのだ。陸の部隊は合流すると一気にブリューヌ領へ侵入し、アニエスの国境を守るカルラエの要塞を包囲した。
カルラエ要塞を守るのはブブリーヌ子爵の率いる三千の兵であった。しかし、二万の兵が攻城塔と投石器と火矢で城壁をやすやすと突破し、次々と斬首、刺殺されていく。
ブブリーヌの首は槍に突き刺され、軍神ワルフラーンの旗とともに並べられる。逆らうものはこのようになるぞということであった。
シズレ、アデニュス、カラナなどを始とする町や村を襲い、囲壁を破壊する。
住民は突然現れた「暴徒」に悲鳴をあげながら逃げ惑う。逃げ遅れたものはつかまって奴隷になる。
「蔵を暴くのだ！捕まえた者はお前たちの自由にするがよい！」
カシムの命令で略奪と奴隷にするための捕虜狩りが行われる。食料や金品を脅してあさって奪い取る現地調達である。住民は奴隷にするのだから統治について全く配慮する必要はない。それがすむと家々を打ち壊して木材を薪の材料にする。
奴隷になりたくない者は、別の村や町へ逃げて知らせる。
ムオジネル軍が通過した後は、壊されないで残った石造りの家屋と老人、子ども、抵抗して殺された者の死体がおびただしい数ころがって数日後には腐臭を放っていた。
「リュドミラ様。」
「どう？ムオジネル軍の様子は？」
「ブリューヌに侵入。海路から来た一万と合流し、二万でブブリーヌ子爵の率いる三千の兵を難なく破り、カルラエ要塞を陥落させ、なおもブリューヌ領内を進軍中です。なお、さらに三万の兵がブリューヌへ向けて国境地帯を進軍中。」
あごに紅茶の湯気をあてながら高貴な少女はしばらく考え込んでいた。
動揺しなかったのはオルミュッツへの侵入の可能性は限りなく低いとふんだからであるが、気になるのは三万もの大軍をさらにブリューヌに進軍させる意味である。

「ありがとう。その三万の兵の指揮官を調べて。それから今後も監視を続けて。」
「はつ。」
　入れ替わりで別の斥候が公宮にはいってくる。
「リュドミラ様。」
「どう？『銀の流星軍』の動きは？」
「ルヴューシュのエリザベータ様がレグニッツアに攻め込み、レグニッツアのアレクサンドラ様との友誼からライトメリッツのエレオノーラ様がレグニッツアに駆けつけるに及び、『銀の流星軍』には、ライトメリッツ軍のうち一千を残していかれました。」
　斥候は青い髪の愛らしい戦姫が気になっていることを察して、続ける。
「ティグルブルムド卿は、ムオジネル軍を迎え撃とうと盛んに偵察を繰り返しています。」
　青い髪の小柄な戦姫は、表情に出さずに
「そう。ありがとう。」
　とだけ答えた。
（ティグルの兵は二千くらい。アニエスは、岩山が多いから奇襲をかけるには適している。
　しかし、数回戦ったらへとへとになるだろう。）
　ミラの胸中は微妙にあわ立つ想いにつつまれる。頬がかすかに赤らむ。
　脳裏に一瞬銀髪の戦姫の姿が思い浮かぶ。
（まさか・・・ そんなことはないわ。わたしはエレオノーラとは違う。ただ、戦略上高く恩を売りつけたいだけ。）
「ムオジネル軍五万が国境地帯を進軍しているわ。四千の兵をととのえて。」
「はつ。」
　ミラの部下たちは出撃の準備をしはじめた。
「クレイシュ様。」

「どうだ？カシムの部隊の様子は？」
「二万の兵でブブリーヌ子爵の守るカルラエ要塞を陥落させ、シズレ、アデニュス、カラナなどをはじめとする二十箇所の町や村を襲って金品と奴隷を確保し、なおも進軍中です。」
「ふむ。ブリューヌとオルミュッツの動きは？」
「動きらしいものといえば、騎士団が撤退し、テナルディエ公爵が二万の軍を二つに分け、一方は、王都ニースを守るため、その実ガヌロン公爵をけん制するための軍、もう一方はテナルディエ公爵自身の率いる軍。テナルディエの部下ドン・ファン率いるマッシニアからの海軍が向かっています。そのほかの動きについては報告がありません。」
「もっともオルミュッツは攻められることはないと判断しているから動かないのだろう。見えないところで間者をうろちょろさせておろうがな。テナルディエは南東国境を見捨てるか。わが軍を奥深くまで引きずりこんでたたこうというわけか。笑止だな。まあ、そう思い通りにいかないことを思い知るだろうがな。」
　クレイシュは赤ひげをいじりながらひとりごとのようにつぶやく。
「元アルサス領主とジスタートの混成軍はどうなっておる？」
「情報が把握できていません。しかしながら多く見積もっても二千から三千程度です。
　たいした勢力でないことからほうっておいてかまわないと思われます。それに愛郷心の強い御仁と思われることからカシム様の軍をほうっておくとは思えません。いずれ動きを見せるでしょう。」
「たしかにカシムの軍で反応はみせるだろう。ただ、ほうっていい問題ではない。わしが問題ないと相手に思わせ、十年前バラベザで五倍のザクスタン艦隊を打ち破ったのだ。敵をあなどるな。」
「ははっ。」

第2話　アニエスの奇襲戦（その1）

ムオジネルの大軍は砂に礫が散らばるアニエスの荒野を進んでいる。

ムオジネルの軍旗は赤地に軍神ワルフラーンを象徴する角を生やした金色の兜と剣を描き、旗竿には金箔を貼った太い鉄の棒を用い、他国のものよりも一回り大きいので遠くからでもよく目だつ。そのため威嚇効果も十分であった。

兵士たちは頭に黒い布を巻き付け、厚地の福の上に革鎧をつけている。腰には三日月状の反りのある剣を吊るし、弓をもつ者と自分の背の倍以上もある長槍と楕円形の盾をもっている者とがいる。部隊の長と思われるものは鉄の兜をかぶっている。歩兵が多く、狭い街道をぞろぞろと埋めつくすように進軍していた。

その様子を高い砂岩の岩陰から眺めている数名の者がいた。そのうち一名は、くすんだ赤い髪をしている。はるか下の街道を進むムオジネル軍はまったく気づかない。むしろ気づかれて困るのは岩陰に隠れている者たちのほうだから彼らは巧妙に隠れながらムオジネル軍の様子を観察していた。

「あれがムオジネル軍か・・・。」

赤い髪の青年はぼそりとつぶやき、顔など武装のわずかな隙間からのぞく褐色の肌をみとがめて

「本当に肌の色が違うんだな・・・。」

と口にだす。

「実に素朴な感想ですな。ティグルさんらしい。」

刷毛のような茶色の髪に海狸（カストール）のような愛嬌のある丸顔をした若い兵士アラムがぼそりと感想を述べる。彼はライトメリッツの戦姫エレオノーラの部下であるが、ティグルと呼ばれた青年―元アルサス領主だったティグルブルムド＝ヴォルン―がエレオノーラに捕虜となってからいつのまにか仲良くなり、ティグルのために対ムオジネルの偵察に来ていた兵士たちの一人だった。

「仕方ないだろう。俺もムオジネル軍を見るのははじめてなんだ。」

「アルサスにはこなかったのかい？ムオジネル人には商人が多いそうだが・・・？」
「・・・う～ん、うちに来たところで、商売になるとは思えないし・・・。」
そう言いつつ、ティグルの目は、ムオジネル軍二万の後方にいる集団に向けられている。縄で手を縛られ、身体中に傷跡や暴行を受けたと思われるあざがある。板きれを重ねたものを背負わされ、着ている服はぼろぼろで、女性の倍は半裸になっているものも珍しくない。憔悴しきった表情でとぼとぼとムオジネル軍のあとを着いて歩いている。
（ムオジネル軍をただ追い払うだけじゃだめだ。全員は無理かもしれないができる限り助けるにはどうしたら・・・。）
そのとき脇から声がしてきてティグルは我に帰る。
「ここから狙ってみるかい？ティグルさんなら当てられるだろう？」
期待半分冗談半分な口調は、アラムだった。
ティグルは首をふって
「う～ん、難しいな。ここは風が荒れすぎている。」
（それともこの弓の力を使ってみる機会なのか・・・？）
ティグルは一瞬自分がもっている黒弓をみつめる。
もしかしたら、総指揮官だけでなくその周辺の兵士をまきこんで数十人ものムオジネル兵を倒せるかもしれないという考えが脳裏をよぎる。
（しかし・・・）
ティグルはその考えを振りはらうように頭を振る。
それはこの弓には未知の部分が多すぎ、夜と闇をつかさどる女神テイル＝ナ＝ファと関係ありそうなこと、テイル＝ナ＝ファの神殿でティッタに憑依したことなどが思い出される。
モルザイム平原やタトラ山の戦いでは威力を発揮したが、それは、エレンがいて、アリファールがあったからで、ロランとの戦いでは気を失ったこともある。ここで自分が気を失うようなことがあれば、『銀の流星軍』は統制が取れなくなるし、うまく敵の指揮官を倒したところで、恨みが奴隷たちに向けられる虞が高い。

「引き返そう。ルーリックたちも準備しているだろうし。今日は無理かもしれないが、明日こそはやつらにしかけよう。」
　ティグルとジスタート兵たちは顔を見合わせて軽くうなずくと、音をたてずに断崖からはなれて、そろそろと馬をつないである場所をめざす。
　ティグルのすばやく、しなやかな身のこなしにアラムは微笑みながら感嘆が入り混じった軽口をたたく。
「つたく…　ティグルさんの親は、どっちか山猫か何かだったんじゃないか。」
「それならお前の両親は海狸（カストール）だな。」
　ティグルがそう返すと、いっしょにいる兵たちにくくっと小さな笑いが起こる。
「ティグルさん。一度、こいつの親に会ってみてくださいよ。海狸（カストール）が人間に化けているかと思うから。」
「それも両親ともだから。この親にしてこの子ありって思うから。」
　ティグルと兵士たちは軽口をたたきながらも慎重さを忘れない。ムオジネル軍が進む街道から十分離れたことを確認し、馬をつないである場所に戻った。
　この直後、ティグルはかすかな物音から、ムオジネル兵４名に追われている旅人風の者に気づくことになる。ムオジネル兵をたちまちのうちに射殺し、旅人を助けてみると少女であった。
「こいつらが、なにか持っていないか調べてくれ。それから武器はいただいていこう。」
「おいはぎそのものですな。」
　ティグルと兵士たちは苦笑して、ムオジネル兵の懐を探るが何もみつからない。
　死体を見つかりにくいようにひっぱっていって岩陰にかくすとティグルたちは数刻後に自分たちの陣営に帰還する。
「ずいぶんでかい土産ですな。」
　それがティグルたちを出迎えた禿頭の騎士の口をついて出た第一声だった。

その頃、ジスタート王都シレジアでは…

王宮では、青い髪の少女が正装して玉座まで続く赤いじゅうたんをゆっくり進んでいく。少女の頭を白と赤の花冠がかざっている。青い髪は結い上げられ、水色と純白のドレスは肩を露出させていたものの、赤や金の装飾がドレスの白を引き立てて、艶かしさよりも無垢さ、清純さを印象付ける。肘まで伸びた白い手袋には袖口に微小な金片をあしらい、腰に巻かれた白い帯は大きく広がって羽根のように見える。

少女は小柄ではあるがオルミュッツの地を治める公主であり、一見童顔のような愛らしい面立ちでありながらもりりしい威厳を感じさせる。自領であるオルミュッツへ帰れば名君といってもいい有能な統治者であり、兵を率いれば諸国に聞こえるほどの防御に定評のある優秀な指揮官である。

その彼女は玉座から一定の距離でひざまずき、竜具たる凍漣の短槍をおき、頭をたれる。

「面を上げよ。」

「『破邪の穿角』が主、リュドミラ＝ルリエよ。用向きを申してみよ。」

「陛下のお許しを得て申し上げます。ライトメリッツ公主エレオノーラ＝ヴィルターリアのブリューヌ介入についてでございます。エレオノーラ・・」

といいかけて彼女は一瞬言葉煮詰まったが続ける。

「姫がブリューヌに介入したのはアルサスへテナルディエ公爵が軍をすすめたことによる混乱がライトメリッツをはじめとするわが国に及ばないようにするためでした。」

「そのように聞いておる。」

「しかし、エレオノーラ・・ 姫は、先般レグニーツアにルヴーシュ軍が侵入したとの報を受け、帰国し、レグニーツア軍に加勢するという行為に出ました。」

「ふむ。先般ルヴーシュのエリザベータから一応の報告を受けているが、実のところはテナルディエとガヌロンの差し金であろう。困ったものじゃ。」

「はい。私戦ともとれるこういった行動をなされては陛下の権威にもかかわることと存じます。しかもブリューヌにはムオジネル軍が先遣隊二万が侵入し、本隊三万が国境地帯に集結している状況です。」
「そのとおりじゃ。エリザベータといい、エレオノーラといい、余をなんと心得ているのか。」
「このようなことであれば、ブリューヌの安定とエレオノーラ姫のブリューヌでの行動については、国益にかなうものか監視する必要があるかと存じましてその任にあたろうかと愚考いたした次第です。」
「ふむ。リュドミラよ。おまえはエレオノーラとはあまり友好的な関係でないことは知っている。一方、おまえのルリエ家は代々戦姫を継ぎ、おまえ自身戦姫のなんたるかをよく心得ていることと思う。エレオノーラの行動について有利に判断せず適切かどうか判断できるだろう。よろしい… 監視の任にそなたに任じよう。監視を有効ならしめるため一定程度の兵を率いることもゆるそう。」
(ライトメリッツとオルミュッツの力をそぐことにもなろう。好きに行動するがよい。)
「ムオジネルのブリューヌ侵入についてはいかがいたしましょうか。」
「南部にあるおまえのオルミュッツにも影響のあることゆえ、必要とあればムオジネル軍を排除することも許す。しかしエレオノーラにも命じたようにジスタートの国益を第一に考えることを肝に銘じよ。」
「御意を得ます。」
　戦姫リュドミラことミラは、王宮を退出し、自領のオルミュッツに戻った。
「陛下の許可は得たわ。ムオジネル軍の動きと、『銀の流星軍』の動きを把握して。」
「はっ。」
「リュドミラ様。」
「なあに?」
「ムオジネル軍本隊の指揮官が判明いたしました。」
　ミラは息を呑みうながす。

「王弟たるクレイシュ＝シャーヒーン＝＝バラミールでございます。」
「・・・ そう・・・。」
（やはり・・・ でてきたか。やっかいな相手ね。武勇だけでなく、知略にも長けている。兵站管理にも隙がない。）
「わたしの指示したタイミングで出撃する。準備を整えて。」
（そう、アルサスのあの赤毛の伯爵に恩を売れる最もよいタイミングで）
「はっ。抜かりなく。」
　ミラは満足そうに微笑を部下に向けて軽くうなずいた。
「それにしても・・・ 本当に何もないところだな。」
　ムオジネル軍前衛部隊二万の指揮官であるカシムは、アニエスの砂塵まじりの乾いた風を馬上で浴びながらぼそりとつぶやく。
　アニエスの荒野は戦略上の要地に要塞が点在し、たまにオアシスがあるとそこに村や町ができるがほかにはまさしく「何もない」場所だった。
　だがムオジネル軍はそんな荒野を念入りに偵察して進み、地図を作成し、小さな村であっても見逃さずにつぶしてゆっくりと進軍していく。
「町や村をつぶして進むのがわれわれの役目とはいえ・・・ 目的地についたときに奪うものがないということにもなりかねんな。」
　カシムは不機嫌につぶやく。進軍速度が遅いためにムオジネル侵入の報が先に伝わって実際からっぽの村や町もあった。
（そろそろ夜営の準備でもするか・・・）とカシムが考えたとき先頭部隊より報告がもたらされた。
「閣下、敵が現れました。ブリューヌ軍かと思われます。」
「数と兵種は？」
「百から二百ほどですべて騎兵です。距離をとって我が軍の右側面を投石と弓矢で攻撃してきました。負傷者もでています。」
「その程度の数、矢を射掛けて追い返せなかったのか？」
「そうしたのですが・・・ 逃げたと思ったら、しばらくすると戻ってきて同じことを繰りかえすのです。」

（どうやら城砦にいた連中とは違うようだな。こちらのおおよその数は把握しているだろう。その連中はおそらく囮だな。）
　カシムは考える。
「三千ほど向かわせてその連中をつぶせ。」
「三千はいくらなんでも多すぎるのでは？五百ではダメなのでしょうか？」
「わからぬか。連中は囮だ。どこかに本隊がいる。それから妨害するものは徹底的につぶすのがわれわれの役目だ。さっさと向かわせろ。二度はいわぬ。」
「はっ。」
（大軍が近くにいれば、斥候を放っているからその痕跡もあるはずだし、相手もかくす必要はないはずだ。それがない以上、百から二百程度の囮なら本隊は二千くらいだろう。）
　ムオジネル軍は千の弓兵と二千の槍兵で、ブリューヌ兵を追わせる。ブリューヌ兵は逃げ出し、岩場の狭い通路をたくみに走り抜けていく。ムオジネル軍はそれを猛然と追いかける。ブリューヌ兵は、左右が絶壁に囲まれた隘路に、ムオジネル軍をさそいこんだ。
　ムオジネル軍は長蛇の列となっていた。先頭部隊は隘路を抜けた開けた場所に出るが、そこは袋小路で正面と左右は砂岩の急斜面な丘に囲まれている。
　ムオジネル兵は、正面と左右の丘の上に、無数の旗が林立し、数多くの兵士と思われる人影が埋め尽くさんばかりであるのを見た。
「五千・・・・　いや六千はいるぞ。」
「うおおおおおお！」
　西の空を背にいっせいに鬨の声が上がり、弓が射掛けられ、騎兵が怒涛のごとく駆け下りてくる。
「ひけぇ～！ひけぇ～！。」
「無理です！後ろから来る兵が前進をやめません！」
　ムオジネルの部隊長たちは青ざめた。次々に矢を射掛けられ、石を投げつけられ、斬り伏せられる。前進しようとする兵と引き返そうとする先頭部隊の兵とがぶつかりあい転んだりたおれたりして大混乱

に陥った。
　ティグルは声をからして指揮しようとする部隊長を目ざとく見つけて射倒していく。
　もはやムオジネル軍は逃げ惑う烏合の衆と化してお互いにぶつかったり押しのけたりして必死に逃げ惑う。ムオジネル軍は全軍崩壊状態で逃げ惑い、隘路からもどって一定の距離になったときに落ち着きを取り戻したが、一千の戦死者を出していた。
　オルミュッツの公宮では、ミラと部隊長たちが自分がティグルだった場合にどうするか兵棋を用いての模擬戦をしていた。
「わたしだったら、戦う場合、囮をつかって、このように仕掛けるけどティグルヴルムド卿はどうしかけるのかしらね。」
　地図を見せながら駒をうごかして部隊長たちに説明する。彼らはうなづき
「それが一番効率的でしょう。少数なのですから。」
「そうですね、戦うんだったらそうするでしょう。」
　と答える。
「戦わないという選択肢もあるんでしょうけど。」
「ルリエ様は、ティグルヴルムド卿が戦うとお考えなのでしょう。」
「そうね。彼は反逆者の汚名もあるからムオジネル軍と戦う姿勢をみせて国内から共感を得なければならない。そうすることによって味方が集められる。危険な賭けだけれどそれをしないと先細りになる。」
　そのとき斥候が帰ってくる。
「リュドミラ様！」
「なあに？」
「リュドミラ様の予想通り、ティグルヴルムド卿がムオジネル軍にしかけ、三千の兵を・・・。」
「隘路に誘い込んでたたいたということね。」
「はい。」
「これからどうするつもりかしらね。矢の数も限られる。敵兵の装備を奪ったり、石を拾い集めるしかないわね。」

「まあ、あと一、二戦でしょう。」
「そうね。エレオノーラが帰国してしまったから補給が問題でしょうね。」
ミラと指揮官たちはおたがいの顔をみてうなづく。
現実世界の２０世紀、２１世紀には、子どもの頃から楽器を弾かされて天才と呼ばれる少年少女がいるが、ミラの場合は子どもの頃から政治と軍事を叩き込まれて、オルミュッツをいかに豊かにし、民の生活を保障して満足させ、いかに兵站を管理して、地形や敵の情報を利用して有利に戦いをすすめるか鍛え上げられた生まれながらの戦姫なのであった。

第3話　アニエスの奇襲戦（その2）

「なんとか上手くいったか・・・。」
　ティグルは、狭い隘路に積み重なるように倒れているおびただしいムオジネル兵の死体を見ながらつぶやく。その顔には疲労の色が見える。
「やつらが戻ってくる可能性がある。迅速に作業を終えるんだ。」
　ルーリックの指示で『銀の流星軍』の兵士たちは、ムオジネル兵の武具を外し、使えそうな矢や石を拾って集める。
　ムオジネル軍が進軍している街道から離れた自分たちの拠点に戻ってきた兵たちに、ティグルは、幕舎の設営と休息を命じた。
　総指揮官用の幕舎でティグル、ルーリック、ジェラール＝オージェがいる。三人はじゅうたんに腰を降ろし、何枚もの地図を囲んでいる。
「ひとまずの勝利おめでとうございます。」
「本当にひとまずですけどね。」
　ルーリックの言葉にすました顔でジェラールが横槍を入れるように口をはさむ。
　ルーリックはむっとする。ティグルはルーリックをなだめるようにうなずいて、ジェラールに向き直ってたずねる。
「ジェラール、戦死者と負傷者の数は？」
「死者はいません。負傷者２７人のうち重傷者は３人、ほかは軽傷です。」
　ジェラールの報告にティグルとルーリックは安心したように息をつく。
「矢と石の配布は？」
「矢は、弓兵一人当たり５６本、石は、騎兵一人当たり１１個、歩兵一人当たり５個確保しました。いずれも分配済みです。」
「使用した分の一割が回収、再使用可能と考えた場合、どこかで確保しなければ二戦までが限度です。戦闘の規模が大きくなった場合は一戦でももたないでしょう。とくに矢についてはブリューヌ兵に使い

手がいない反面、ジスタート兵に強く影響します。」
　ティグルは考え込んだ。エレンたちがいたときは資金に困らず、蹄鉄、武具の修理、食料、燃料の確保にも困らなかったが、今は矢の一本も無駄にできない、道端に落ちている石すら貴重なのだ。
「次はどうします？」
　腕組みをしてルーリックがたずねてくる。ティグルは即答できずにしばらく地図をにらんでいる。ルーリックも地図に視線を落とし考え込む。ふと思うところあってジェラールにたずねる。
「相手の進軍速度を少しは落とせたのだろうか？」
「斥候の報告から考えても、彼らの進軍速度は落ちてないですね。」
「ルーリック」
　ティグルは信頼する禿頭の副官である騎士に話しかける。ルーリックが地図からティグルに視線を移す。
「敵将のことはどう思う？」
「優秀ですな。」ルーリックはため息をはきだす。
「二百の兵に対し三千の兵を向けてきたってことは、こちらの実数をかなり正確に把握して確実につぶしに来たということです。進軍速度が変化しないのも立ち直りの早さを示しています。ただ…。」
「…　ただ？」
「生真面目というか神経質な印象を受けますな。斥候の報告では小さな村でも見逃さず潰してまわってるそうです。今回の戦も反応が異様に早かったですね。全体を見渡す力に欠けるのかも知れません。」
「そうだな。俺もそう思った。」
「できれば…　敵がアニエスを出る前にもう一戦か二戦しかけたいな。」
「ヴォルン伯爵。敵とわれわれとの最大の違いは何だと思いますか？」
　ジェラールはしかめっ面に疑念をにじませて、ティグルに話しかける。
「まずは、兵力差…　だろうな。」
「確かにそれはありますが、私が申し上げたいのは敵はまだ何度か負

けることができるが、こちらはそうではないということです。数十人単位の小競り合いで負けることすら許されない。」
「・・・。」
「勝てばいいのだろうが・・・。」
　ルーリックは憮然とする。
「ジェラール。ウサギとクマのおとぎ話は知っているか？力の強い暴れん坊のクマを小さなウサギが知恵と俊敏さでうち負かす話だ。クマの豪腕をかわしつつ、一撃づつ確実にあたえて相手を疲れさせる・・・」
「その話は私も知っていますよ。」
　ジェラールは小馬鹿にしたような笑みをうかべて話を続ける。
「あれの結末はいくつかありましてね。一度でやめておけばいいのに調子にのったウサギが何度もクマをからかって、ついには運悪くつかまって丸呑みにされてしまうという話もあるのです。一度でやめておけばよかったのに・・・ね。」
　ジェラールはやってられないとばかりに両手を広げて渋い表情になって話し続ける。
「あなたに必勝の策があっても運が悪ければ負けます。戦うという選択をした以上、負ける可能性がついてまわります。さきほども申し上げましたがわれわれには戦える力はあまり残されていません。」
「口達者なのはいいが不満とか文句とかばかりではなく、意見をのべたらどうだ？ブリューヌ人。」
「現状をよくわかっているのか、という意見ですよ、禿頭のジスタート人。」
「ジェラール。余計な言葉は謹んでくれ。さもなければお前を禿頭のブリューヌ人にしなければならなくなる。」
「失礼しました。」
　とジェラールは頭をさげるものの、いささかも申し訳ないと思っているようには見えない。
「問題なのは」
　さらにジェラールは話を続ける。

「われわれの継戦能力もさることながら、深刻なのは、ムオジネル軍が奴隷にしたわが国の民を連れているということです。彼らを盾にされたら・・・。」
「わかっている・・・。」ティグルは重苦しい口調でジェラールに深刻さを認識していることを言外に示した。
　さて、そのころムオジネル軍ではカシムが血と砂塵にまみれて戻ってきた兵たちから報告を聞いていた。カシムはこぶしを硬く握り締めて怒りを抑えている。
「敵は、われわれを隘路から袋小路にさそいこみ、そこには五千から六千ほどの兵がひそんでいました。」
「・・・　あのときは確か夕暮れ時だったな。」
「はい?それが何か?。」
「そういうことか・・・　やってくれたな・・・　ブリューヌ軍め・・・。」
　もはやあとの祭りではあったが、カシムはティグルたちの策に感づいた。
　しばらくするともどってきた偵察部隊があり、報告があるという。
「閣下。」
「何だ。」
「街道からかなり離れた場所で夜営の跡を発見しました。おそらく敵のものと思われます。」
「どのくらいの兵力だと推定できそうか?」
「二千足らずだと思われます。やつらは一日か二日ごとに拠点を変えているものと思われます。」
「上出来だ。これは褒賞だ。よくやった。」
　カシムは金貨のつまった袋を偵察部隊の兵士にわたす。
　夜明けになってカシムは部隊長を呼び集める。
「そろったか。」
「「はっ。」」
　カシムは部隊長の顔を見回し部隊の再編を命じる。
「いまから部隊の配置を再編することにする。騎兵隊三千は、先頭に配置。歩兵隊を騎兵の変わりに本隊の左右に配置し、側面からの攻撃

に備えよ。昨日の報告のとおり敵は二千いくかいかないかという数であることが確認されている。先日の夕方のように多くいるように見せかけるためさまざまな策を講じて大軍にみせかけてくるだろうがまどわされてはならん。」
「それから敵は少数だ。敵が攻めてきたら直接攻撃せず、退路をふさいで包囲するのだ。以上のことを全軍に通達し、肝に銘じよ。」
「「はっ。」」
（とにかくこちらは敵の１０倍近い大軍だ、くくたる小細工ごときで負けるはずがない。）
『銀の流星軍』の指揮官用幕舎では、斥候の報告が行なわれていた。
「ムオジネル軍は、部隊の再編を行い、左右にいた騎士隊を先頭に、歩兵隊を本隊の左右に配置したようです。」
「なるほど、側面からの攻撃に弱く、砂岩の岩山があっては騎兵は使いづらいからな。側面を固めたということか。」ティグルが話すと
「まあ、順当な判断でしょうね。」ルーリックが相槌を打つ。
「ジェラール、敵の進軍速度から考えて、今日の夕刻にはどのあたりを通過すると思う？」
「おそらく、昨日の場所から６ベルスタ離れたここでしょうね。」
　ジェラールは地図の一点を指差した。
「敵も偵察を出しているようだから、野営地のいくつかは把握されていると見ていいでしょうね。」
「その地点になると岩陰とか少なくなるから地形を利用して仕掛ける最後のチャンスかもしれませんな。」
　ルーリックがつぶやく。
「敵はこちらの正確な数をおそらく把握しているだろう。だからそれを逆手にとって印象付ける。ここで騎兵５００を敵の斜め後方から襲わせよう。このあたりに配置する。」
　ティグルが地図の一点を指指す。
「数が多ければ包囲するのは常套手段だから、包囲しようとするだろう。いくつかの場合が考えられるが、動きの速い騎兵を使って包囲しようとした場合に、先日のムオジネルの軍装を着せた騎兵一千を使っ

て横撃する。」
　ティグルは街道の脇から街道へ向かって指をなぞらせる。
「う～ん、時刻的に肌の色がごまかせる利点がありますが、昼間に攻撃する場合に比べて同士討ちの可能性も強くなりますが…。」ジェラールが反問する。
「じゃあこうしよう。合言葉を決める。「クマ」と言ったら「ウサギ」と答える。これでどうだ？」
「!?　例のおとぎ話ですか？」
　ルーリックとジェラールが珍しく一緒に苦笑し、二人とも気が付いて「おほん」と咳払いをしてお互いにそっぽを向いてみせる。
「う～ん、それにしてもおとぎ話ですか…。」
　ルーリックはあらためて苦笑してぼそりとつぶやく。
「この際、大事なのはわかりやすさといいやすさだからな。」
　ルーリックはしばらく考えた後
「まあ、こちらの数は把握されているし同じ手が通じないとすれば意表をつくしかありませんからな。」と同意する。
「それから、数の多くないわれわれとしては、敵の補給、食料と指揮官のどっちを狙ったほうがいいと思う？。」
「補給や食料の部隊については、それなりに警戒が厳重ですな。なかなか難しいでしょう。」
　ジェラールがつぶやく。
「敵の指揮官ですが…」
　ルーリックが話し始めると、続きをティグルがうながす。別に意図したわけではなく、指揮官の性格が鍵だと考えていたからだった。
「確かに有能ではありますが、細かいところにいちいち反応して全体の流れが読み取れない人物のように思えます。たしかティグルブルムド卿はご自分の弓の腕前はまだ披露していませんから、うまくひきつければ…。」
「う～ん、とりあえずは目の前の戦いになんとか勝ってからの話でしょう。それから改めて詰めても間に合うのでは…。」
　ジェラールが先走ったルーリックを半ばたしなめるように口を挟

む。ルーリックはいくらか表情をゆがめる。
「そうだな、ルーリック、自分も指揮官を狙うのがいいと思うが、まず次の戦いをなんとかしよう。後で詰めても遅くないと思う。」
ルーリックは気を取り直してうなずく。
「そうと決まったら早速準備しよう。部隊の配置をつたえてきてくれ。」
ルーリックとジェラールは同意して部隊長に作戦を伝えた。
『銀の流星軍』は予定地点へすばやく移動して、岩陰に隠れた。
夕刻となり、ムオジネル軍は、断崖はだんだん少なくなって道幅が広くなるつつある地点にさしかかっていた。二万近い兵のため、進軍速度はゆっくりで前日から6ベルスタほどの位置であった。街道の左右には、『銀の流星軍』がひそんでいた。岩陰に隠れつつ、暗がりにまぎれてムオジネル軍に接近し、斜め後方から襲いかかる。
「敵です！敵の奇襲！斜め後方から騎兵。その数五百くらいです！」
カシムは平然と命令をくだす。
「迎撃せよ！」
歩兵が長槍をずらりと構える。隙間なく槍が並ぶ様子は針ぶすまのようだった。
「撃て！」
長槍隊の後ろの弓兵がいっせいに矢を放つ。矢は長槍隊の頭上を越えて山なりに放たれる。
『銀の流星軍』の騎兵たちは盾をかざして矢を防ぐ。
「撃て！」
今度は『銀の流星軍』が矢を放ち、投石する。ムオジネル軍の隊列が乱れる。
「突撃！」
『銀の流星軍』の騎兵が隊列の乱れを見逃さずに切り込む。しかしその攻勢は長くは続かなかった。
カシムはほくそえむ。騎兵の部隊長は、『銀の流星軍』を直接攻撃せず、退路をふさぐように回り込む。
「ふん。昨日のように隘路へ誘い込むつもりだろうが同じ手は通じ

ぬ。」
「!!」
「あれはなんだ?何事だ!」
厚地の服に革鎧をつけ、頭には黒い布を巻いている千騎ほどの騎兵が岩陰から現れ、ムオジネル軍に横撃を加えた。ムオジネル軍とまったく同じ軍装であり、夕暮れであるために肌の色の区別もできない。
戦闘中に「クマ!」「ウサギ!」「クマ!」「ウサギ!」の声が飛び交う。
ムオジネル軍は完全に意表をつかれ、落馬するものが続出した。
「突撃!」
『銀の流星軍』の騎兵が槍先をそろえて反撃に出て、包囲網は突破される。『銀の流星軍』が戦場を離脱していったときには、ムオジネル軍は、歩兵、騎兵あわせてさらに千人を失っていた。しかもカシムは追撃を命じたくてもできない。歩兵は追いつけないし、騎兵は同士討ちするかもしれないからだ。
カシムは、血がにじまん限りにこぶしを握り締め、暗闇をにらみつける。
「・・・ 奴隷だ。」
怒りのこもった低い声でつぶやく。
側近は何のことやらわからず困惑した顔で自分たちの指揮官を見つめる。
「兵たちに伝えろ。奴隷をすぐに金に変えたいものは申し出よ、奴隷を男女十人づつ二十人まで買い取る、早い者勝ちだ、とな。」
一方、オルミュッツの公宮では、斥候の報告をミラが受けていた。
「へええ。先日から6ベルスタ進んだ場所でムオジネル兵に化けた騎兵で奇襲し、包囲網を突破?面白いわね。」
「夕刻に後方からおそいかかって、包囲されかかったところを変装した部隊が攻撃、ムオジネル軍は大混乱で追撃すらかなわなかったそうです。」
「先日は隘路にさそいこんで囮で数を誤認させ、今度は夕刻で肌の色さえ区別できない状態で敵をおそったということね。同士討ちを避

けるためにどうしたのかしら。」
「変わったことといえば、「クマ！」やら「ウサギ！」やら掛け声がとびかっていたことでしょうか。」
「なるほど、おとぎ話ね。」
　ミラはくすりと笑う。
「リュドミラ様？」
「ムオジネル軍がクマ、かれら『銀の流星軍』がウサギってことよ。」
「軍議でそのおとぎ話が話題にのぼったということでしょうか？」
　斥候も愉快そうに話す。
「そんなところでしょうね。わかりやすいし、面白いわね。今度わたしたちも使いましょうか。」
　ミラと指揮官たちは朗らかに笑った。

第４話　アニエスの奇襲戦（その３）

『銀の流星軍』の指揮官用幕舎で軍議が行われていた。
「敵の司令官は？」
　ティグルの問いに答え
「大体この位置ですな。先頭部隊三千、本隊がそれに続きます。」
　ジェラールが指を地図に走らせて示す。
　ティグルとルーリックが顔を見合わせてうなづく
「われわれが少数だから正面から来ると思っていないからこその陣形だな。俺が五百五十騎を率いて敵の前面に出て」
　ティグルが指で示す。
「挑発しようとおもう。」
「なるほど、弓を軽蔑するブリューヌ軍がまさか弓使いを将にするとは考えも及ばないでしょうな。」
「敵は二回もしてやられて、そろそろ堪忍袋の糸がきれるころでしょう。奴隷をみせしめに挑発するかも知れません。」
「われわれがここの断崖から黒竜旗をかかげてムオジネル軍におそいかかります。これで再びわれわれの数を誤認させることができます。またジスタートが援軍にきたと印象付けることで、敵を混乱させ、ブリューヌの奴隷を殺しても効果が薄いことをアピールできます。」
　ティグルはうなずく。
　翌朝、カシムは兵から買い取った奴隷を陣頭に並べた。
　そして自分で叫んだムオジネル語をブリューヌ語のできる兵に復唱させる。
「岩陰に隠れてこそこそと這い回る臆病なブリューヌ兵どもよ。真の勇士であるなら街道に出てきて正々堂々挑んでみよ。こちらはお前らのつまらぬ小細工につきあっていられぬ。
　それでも岩陰に隠れ続けるならこのようになるぞ。」
「斬れ！」
　カシムが命じると男たち十人の首がはねられ、血を噴き出し、首が転がる。

それをみて女たちが悲鳴をあげる。
「これより一刻をすぎても姿を見せないなら、次は女たちの番だ、小心者のお前たちがでてくるまでくりかえすぞ。」
これは敵に対する挑発であると同時に、奴隷たちをおとなしく従わせるための見せしめの処刑であり威嚇だった。奴隷の死体を放置してムオジネル軍は進む。このときムオジネル軍の先頭部隊は三千で本隊がそのあとに続く陣形である。
太陽が中天にさしかかり昼に近くなったとき、ティグルが彼らの前に五百五十騎を率いて現れる。
「敵です。我が軍の前方に五百から多くて六百騎ほどです。」
「何？五百から六百騎ほどだと・・・？」
（一千ほどの伏兵がどこかへいるとすれば数は合うが・・・・それともわれわれが把握しきれない伏兵がいるのか??）
と迷いが生じる。しかし思いなおす。
（いや、野営の痕跡があるし、もし少数でないなら隘路にさそいこむとか、昨日のように背後から攻撃するとかしなくてもよいはずだ。）
「敵の指揮官はどこにいる？」
「おそらく先頭にいるあの赤毛の男かと。」
部下が革鎧を着て弓を持つ赤毛の青年を指差して、カシムに答える。
（ぬう、ブリューヌが弓使いを将にするはずがない・・・・どこかに伏兵がいるはずだ・・・・）
（あの赤毛の男を見れば、誰もが伏兵こそ主力とみるはずだ。しかし、そう思わせるのが敵の手だ。伏兵にこちらの注意を向けさせ、正面の敵がしかけてくるだろう。）
カシムは敵の策を見破ったと考えて、軍をそのまま前進させる。
正面の敵は動かず、待ち受けているように見える。
ティグルはムオジネル軍に向かって声をはりあげて叫ぶ。
「粗暴にして野蛮なるムオジネルの兵たちよ。罪もない丸腰の民を殺める貴様らの所業は万死に値する。だが、その首を刎ねる前に前に聞いておく。なにゆえ無法にもわが国に土足で踏み込むのか。」

カシムは嘲笑する。
「笑止な。武器を捨て、はいつくばって奴隷になれ。そうすれば寛大な主人がわかりやすく教えてやるかもしれんw。それから後もなるべく優しい主人に買われるようとりはかってやってもよいぞw。」
ムオジネル兵はムオジネル語とブリューヌ語で叫んで嘲笑を返してくる。
いよいよ矢の届く距離になったときに、彼らは弓に矢をつがえてかまえる。
そのときだった。
「うおおおおおおおお!」
断崖の上から鬨の声が上がる。
カシムは余裕の笑みをうかべる。
(ふふ。ここで伏兵を使ってきたか・・・)
次の瞬間、カシムは「伏兵」のいる方向を見たときに思わず目を疑った。
(!!黒竜旗だ・・・ なぜ??)
カシムに戦慄が走る。たしかブリューヌにはジスタート軍を引き入れた小貴族がいたという話は軍議でも聞いた。しかし、かなり北方、デイナントの近くの話だったはずだ、そんなものがムオジネル軍をふせぐためにはるか南方のアニエスくんだりまで来る理由がない。
それにジスタートがわざわざブリューヌの守るためだけに血を流すはずはない。
カシムだけでなく兵たちも動揺する。
「突撃せよ!」
ティグル率いるブリューヌ兵とルーリック率いるジスタート軍はムオジネル軍に二方向から斬り込む。両軍の兵士たちの切り刻まれた死体が転がる。しかし、ムオジネル軍は隊列に開いた穴を次の兵士が埋める。さすがに三千の兵のあつみに対し『銀の流星軍』は突破できないように思われた。
(ふふ。戦はしょせん数だ。包囲してすりつぶしてくれる。)
しかし、そんなカシムに一瞬の悪寒がはしる。それは、戦場でたび

たび彼を救ってきた一種の直感であったが、それを彼は即座に否定した。もっとも近い敵でも三百アルシンは離れている。この兵の厚みを突破できるはずはない・・・・ はずだった。
そしてその直感を否定した次の瞬間に彼は一本の矢に額を射抜かれて倒れていた。
総指揮官カシムのいた場所は直接剣、槍が交えられている場所から至近であり、隠すことができない。
ムオジネル軍に衝撃と動揺が波紋のように広がる。
「ティグルヴルムド卿が敵将カシムを討ち取ったぞ！ティグルヴルムド卿が敵将カシムを討ち取ったぞ！」ルーリックが大事なことなので二度叫ぶ。
「うおおおおおおおお！」
『銀の流星軍』が鬨の声をあげて襲いかかる。我に返り、兵を叱咤しようとした部隊長が次々に射殺され、ムオジネル兵の動揺はますますひろがって、戦意を喪失し完全崩壊して逃げ始めた。
「全軍追撃せよ！徹底的に叩きのめせ！」
ティグルは叫び、『銀の流星軍』も敵を射殺し、斬り殺していく。
ムオジネル軍は大軍であるがゆえに、いったん指揮官が倒れてしまうと烏合の衆と化して全面潰走してとまらなくなる。
そのさまは、津波になぎ倒される建物や強風になぎ倒される麦のようだった。
「終わってみると予想以上にぎりぎりでしたな。」
矢を撃ち尽し、疲れた顔で馬上でたたずむティグルにルーリックが馬を寄せて話しかける。
ティグルは無言でうなずいた。ムオジネル軍は全面崩壊し、逃げ惑っている。戦場は視界から南東方向にどんどん離れていく。
「ルーリック、追撃を任せていいか？」
「お任せあれ。」
禿頭の騎士はティグルの心情と意図を察し、ほのかな笑みを浮かべて答えた。ティグルは礼を言うと奴隷にされている者たちのところへいき、とりあえずの安全を伝える。

しかし、そんなティグルたちに対し向けられた言葉は
「どうして・・・ もっと早く来てくれなかった？」
という男の発したなじりの言葉だった。ジェラールや兵士たちは反問しようとするが、ティグルがそれを制して
「すまなかった。」
と沈痛な面持ちで頭をさげる。
男は一瞬息を呑む。何か考えているようだったが、うなだれて座り込んだ。
さて、ムオジネル軍は総指揮官とさらに三千以上の兵を失った。アニエスで二回の奇襲を受けて戦死した数をあわせると五千を超え、全軍の１／４以上を失ったことになる。
「そうか。カシムは死んだか。」
金と銀をあしらった豪奢な天幕の中で、派手な色彩の絹服をつけ、頭には虹色の鳥の羽を挿した絹布を巻き、目立つ赤ひげをいじくりながら王弟クレイシュが斥候からの報告を受けていた。
「はい。敵は正面に六百ほどの兵を率いて現れ、こちらを挑発し、戦闘が開始されたところにジスタート軍の横撃をうけ、動揺しているところを、カシム様が矢で頭を射抜かれて・・・。ほかの部隊長も射抜かれて大混乱に陥り・・・。」
「どのくらいの距離で射抜かれたのだ？カシムは？。」
「信じられない飛距離でした。弓の名手といっても２５０から２７０アルシンが限度なのに、３００アルシンの飛距離からカシム将軍の頭を正確に射抜いたということです。」
「むう。そうか。」
クレイシュはにやりと笑みをうかべる。
（敵は少数だ。わしをねらうか、食料、補給をねらうしかない。しかも勝ったとはいえ疲労困憊しているだろう。カシムの軍の兵を再編する前に息をつかせないでたたいておく。）
「カシム様の兵のうち一万がもどってまいりました。我が軍に加わって戦いたいとのことですが・・・・。」
「部隊の再編をするが、その前に敵は連戦して疲れている。こちらが

部隊の再編に手間取ると考えているだろうが、休ませてやるつもりはない。直ちに三千から四千くらいの騎兵で追わせろ。」
「はっ。」
「ティグルヴルムド卿がムオジネルの将カシムを討ち取って、ムオジネル軍はさらに三千を失い、敗走しました。」
斥候の布告を聞き、ミラは笑みを浮かべてたずねる。
「『銀の流星軍』の位置は？」
ムオジネル国境から北西へ３０ベルスタ、わがオルミュッツとの国境から南西へ５ベルスタの地点です。」
「彼らの行軍速度から、いまから出撃した場合に接触する予想地点は？」
「奴隷にされた民を連れていることから２ベルスタくらいしか進まないと思われます。一方ムオジネル軍は、三千から四千の騎兵で、『銀の流星軍』を猛追するとともに、カシムが討たれたことによる敗残兵のうち一万を再編し、翌日か翌々日には進軍を開始する模様。」
「さすがね・・・。」
ミラは抜け目のないクレイシュの戦術にあらためて舌をまくとともに、『銀の流星軍』に高く「買わせる」なら今しかないことを悟る。
「皆を集めて。」
「はっ。」
集まってきた部隊長たちに、ミラは地図を見せ、一点を指差して伝える。
「出撃よ。この地点にある断崖へ向かうわ。」
オルミュッツ軍四千は、馬蹄を響かせて、『銀の流星軍』とムオジネル軍のいる戦場へ向かった。
一方、追撃戦を行って十分に敵を追い散らしてもどってきた『銀の流星軍』の兵士たちは陣営につくなり倒れこんだ。テリトアールからアニエスまで進軍し、岩陰に隠れて敵を攻撃してきた。死者は二百人ほどである。
「生存者は１５０３人、負傷者は、重軽傷問わず４６２人です。相手の数を考えれば奇跡的な戦果かと。」

ジェラールは感に堪えないという面持ちでティグルに報告する。
ムオジネル軍が潰走する際に、大量の食料、燃料、略奪で得た金品を放置していった。
ジェラールは、『銀の流星軍』が必要とする分を確保しつつ、民がとりあえずテリトアールにたどり着くまでに必要な食料と燃料をみごとに分配してみせた。
「やっぱりテリトアールに送らざるを得ないか・・・？」
ジェラールは答える。
「彼らから話は聞いているとおもいますが、住んでいた町や村はことごとく破壊され、建物の建材まで持ち去られたということです。もといた家に戻れといっても住む家はなし、冬の寒さの中野宿しながら自力で家を建てろって言えますか？」
「それはわかるが・・・ テリトアールは大丈夫なのか？」
すでに多くの町や村の者が戦火をのがれてテリトアールに向かっている。
テリトアールの領主の息子は肩をすくめ、両手をひろげてはき捨てるように答える。
「二千人もの人間を押し付けられるあてがほかにありません。」
「わかった。そのように手配頼む。」
そういったとき、ルーリックが自分たちのところへ歩いてくるのが視界に入る。
「テイグルブルムド卿、お話があります。」
ルーリックは笑顔であるがどことなくぎこちない。
「どうした？」
「追激戦において何名かのムオジネル兵を捕虜にしたのですが・・・。」
話し始めたルーリックの表情から笑顔が消え、陰鬱な表情になる。
「彼らは異口同音に『われわれは先遣隊であり、露払いである。』と話すのです。」
寝る間も惜しんで知恵を絞り、犠牲を出してようやく倒した相手が露払いに過ぎないとは・・・
「彼らが先遣隊というなら・・・ 本隊は・・・ ？」

「彼らの話ですと三万ということです。確認と情報収集のために偵察隊を向かわせました。」
（さんまん・・・　三万・・・）
「・・・　いえ三万ではすまないでしょう。」
　ジェラールが陰鬱から蒼白な表情になって首を振る。ティグルもその意味を即座に理解して、渋面をつくりうなずく。
「敗走した兵のすべてではないにしろ、一万は本隊に合流するとみていいな。」
「二万の次は、四万ですか・・・　まあ、向こうも軍を再編しなければなりませんから今日明日ということはないでしょうが・・・・。」
「どうなさいますか？ヴォルン伯爵。」
　ティグルはジェラールをぼんやりと見つめる。
「これからのことです。あるいは、身軽になって逃げれば助かるかもしれません。」

第5話　凍漣の雪姫参戦

「ジェラール・・・ ??本気で言っているのか?」
「・・・・ いえ、失言でした。申し訳ありません。」
　次の瞬間、ルーリックがジェラールの頬をなぐりつける。
　ルーリックは切れたのだが、まさしく幾分かの理性で手加減をしていた。
「・・・・ 貴様、いつまでティグルヴルムド卿を試せば気が済むのだ。」
　ルーリックはジェラールをにらみつける。ジェラールは腫れ上がった顔をさすりながらいびつな笑みをうかべる。
「もうしませんよ。今のが最後のつもりだったんですから。」
「あの口の悪さもわざとだったのか?」
「いえ、あれは素です。」
　ルーリックは青筋をたててわなわなとにじり寄ろうとするが、ティグルはそれを制して大きなため息をついてみせる。
「俺は、お前の父上に信頼されていると思っていたのだが。」
「父は父、私は私です。」
　ほおをさすりながらジェラールは答える。
「私が恐れていたのは、アルサスを守るためにあなたがテリトアールを切り捨てる事態です。アルサスのことを第一に考えるのならばありえないことではない。だから、あなたという人間を可能な限り正確に知っておきたかった。」
　ルーリックは、それなら信頼を得る努力をすべきだと問い返したが、ジェラールは信頼は父が得ているから自分が父に斬られればすむことと答える。さらにジェラールは、
「あなたは、ブリューヌ人でありながら弓に長け、ジスタートの捕虜になったかと思えばジスタートから兵を借りて大貴族であるテナルディエ公にケンカを売る、あなたの人柄を知らない人が聞いたらどう思うでしょうか。」と問うた。
「仕掛けてきたのは向こうだ」、とティグルは反問するものの、考え直す。

「わかった、気をつける。」と答えた。
ジェラールは、ルーリックについて、この禿頭のジスタート人はティグルに傾倒しすぎていて参考にならない、と付け加えた。
ルーリックは腹に据えかねていたが自制心を発揮して
「ティグルヴルムド卿、これからのことですが・・・。」
と話をもどすとティグルもうなずき、
「兵はともかく、民をなんとか動かせないか？なるべき遠くに逃げてほしいんだが。」
「彼らはずっと鎖につながれ、歩かされてきたので、疲労もかなりのものです。今は難しいかと。」
「じゃあ、男女の数を調べてくれ。男に女を守らせる形にして、テリトアールまで向かってもらう。武器は死んだムオジネル兵がもっていた槍を持たせることにしよう。槍を持つ男たちが大勢いると見れば野盗もおそってこないだろう。」
翌朝、『銀の流星軍』と奴隷になっていた二千の民は街道を進軍するがなかなか進まない。
「予定の半分もすすんでいないな・・・。」
ルーリックはうなずき、
「仕方ないでしょう。せきたてたところで歩みが速くなるとは思えません。」
昼ごろになって、偵察隊が帰還し報告がある。
「ムオジネル軍の騎兵部隊が突出、その数は三千から四千くらいです。」
「ルーリック、兵の指揮をまかせる。それから矢は残っている分すべてくれ。」
「また無茶をなさるのですか。」
ルーリックは、呆れと気遣いの入り混じった表情で答える。
「今は向かい風だ。いくらかでも敵の足を遅らせたい。」
「では弓の得意な者を何人かお連れください。」
「すまない。」
ルーリックと何人かの弓の得意なジスタート兵は。四半刻ほど

いったところでムオジネル軍を発見する。戦神ワルフラーンの大旗をひるがえっているのが見える。
いっせいに矢を射かけ敵兵をたおすもののすぐに穴が埋まり、進軍速度は落ちない。
（まずいな・・・　とても足止めにならない。このままだと本隊に追いつかれる・・・）
そのとき、ひときわおおきな馬蹄の響きが聞こえてきた。
ムオジネル軍も馬をとめる。
馬蹄の響きは左上方の断崖の上から聞こえてくる。
やがて林立する黒竜旗と、槍を十字に交差させた三角形の白い軍旗が見えてきた。
先頭に馬に乗っているのは青い髪を切りそろえた小柄な少女だ。
「久しぶりね。ティグルヴルムド＝ヴオルン伯爵」
オルミュッツ公主、凍漣の雪姫と称される戦姫、リュドミラ＝ルリエだった。
ムオジネル軍にはクレイシュの元に戦況が刻々と伝えられている。
「クレイシュ様、敵が風上から弓を射かけてきましたが、被害は僅少、敵の本隊まで二刻ほどで追いつけるものと思われます。」
「ふむ。」
クレイシュは笑みを浮かべる。
（予定通りだ。あとは時間の問題だな。好敵手だったが、すべて捕らえて奴隷だな。）
その報告があってからどのくらい時間がたったろうか、別の偵察隊から新たな報告が王弟クレイシュの幕舎にもたらされる。
「クレイシュ様」
「何だ？」
「ジスタート軍が・・・。」
「ジスタート軍だと??カシムのときのジスタート軍とは別なのだな。」
「はい。四千騎ほどが前方に立ちはだかるように・・・。黒竜旗のほかに槍を十字にあしらった白い三角形の旗です。」
「ブリューヌの辺境のアルサスのなんとかという小貴族にジスタート

軍が味方をしている話は聞いていたが・・・ アルサスは北方・・・ こんな南方の国境くんだりで・・・ ふむ。意外だな。」
　クレイシュはひとりごとのようにつぶやく。
「数千もの兵を投入する・・・ それだけの理由がジスタートにはあるのか・・・・。ブリューヌからの富を独占するか、それとも大きな貸しをつくるのか・・・・。」
　クレイシュはひとまず行軍を止める旨を全軍に伝えた。
「わかった。ジスタート軍に使者を派遣する。この手紙をもたせよ。」
　手紙には（我らの目的はブリューヌ南部のネクタクムだ。あなたがたがほかの地域を狙っているならおたがいに不要な干渉はつつしみ、もし同じ獲物を欲しているのであれば、馬乳酒（クミス）でも酌み交わしながら話し合おう）といった内容が記されていた。
　クレイシュは赤ひげをいじりながら
「もし戦姫が評判どおりの美人だったら協力をもちかけよ。そうでないなら手ぶらで帰ってきてもいいぞ。」というとカラカラと楽しそうに笑う。
　クレイシュは寛容な人柄で知られていたが、それは指揮官として部下が意見や諫言をしやすくし自らがより正しい判断を下せるようにするためであり、また信望を得るためのものだった。王族としての権威にかかわることや外交、戦略的戦術的に必要とあれば即座に部下や他国の使者などを処断する苛烈さ、果断さをもっており、側近や兵はその苛烈さや果断さがどのような形で発露されるか予想できないので真剣そのものであった。このようにしてムオジネル軍の使者がオルミュッツ軍の陣営に派遣された。
　一方、『銀の流星軍』とオルミュッツ軍の間には、羊の皮を張り合わせた布を二重に使用した幕舎が設置されていた。この幕舎はリュドミラが用意させたもので、床には上質な絨毯が用いられ、冬のアニエスの乾燥した冷気や地面の底冷えを完全に遮断するつくりになっている。
　幕舎のなかには、リュドミラが淹れる紅茶の水音だけが静かに響いていた。

「どうぞ。」
　コトリ、と木のテーブルにカップの置かれる音がする。ティグルの前に置かれたカップから湯気が立ち上り、紅茶のほのかな香りが彼の鼻をくすぐる。
　ティグルはリュドミラに深々と頭をたれる。
「まずは助けてくれてありがとう。」
「減点1」
　リュドミラは予想はしていたものの、素直すぎる反応に呆れながら、そっけない声をあびせ、指を一本立てる。ティグルはとまどいを隠せない顔でリュドミラを見る。
「あなたとわたしは特に親しいわけではない。助けに来たと言ったわけでもないのに早合点して礼を述べるのは失敗。相手によってはすかさず見返りを要求されるわ。」
「でも、こうして紅茶を淹れてくれたじゃないか。」
「気に入らない相手であっても淹れることはあるわよ。破談にするとき相手の顔に中身を浴びせるためにね。あなたはどうかしら。ティグルヴルムド＝ヴオルン伯爵。そういえば爵位は取り上げられたのだったわね、ティグルヴルムド卿？」
　そういいながら、リュドミラは自分の前にあるカップに紅茶を注ぐ。彼女は笑み—好意的とは思えない、どことなく冷たい感じの笑み—を浮かべて自分のカップをゆっくりと傾けてみせる。
　ティグルは笑みを返すものの、自分でも自覚できるくらい引きつっていた。
「・・・・ 勉強になったよ。ありがとう。」
（はあ・・・ あきれた・・・ 本当にウブというか・・・）
「あなたに講義するためにこの場を設けたわけじゃないわ。」
　すかさずはねつける。ティグルは困惑を隠せず、思わず赤い髪をかいてしまう。
「じゃあ聞くけど・・・・ 君はどうしてここに現れたんだ？それも四千騎もつれて。」
「どうしてだと思う？」

リュドミラはするりとはぐらかして、しばらく必死に考えをめぐらす彼女の目の前にいる赤い髪の青年を楽しげに見ている。
そうしておいて紅茶に口をつけて、上目遣いでティグルの顔を見つめながら
（からかってやろｗ）
「欲しい？」
とたずねる。
たずねられた赤い髪の青年は、うろたえさせられる。身体が火照り、顔は赤く染まる。
（やっぱ、かわいいわね。）
その反応を意地悪く楽しんでから、青い髪の少女は重ねてたずねる。
「私と私の配下の四千を欲しいか聞いてるのよ。」
「欲しい。」
（はあ・・・ もうｗそういう素直さはちょっとね）
「減点２」
青い髪の少女は、そっけない口調は同じだが、今度は指を二本立てる。
「気持ちはわかるけどがっつきすぎ。相手に足元見られるわよ。言っておくけど私はバカとは組みたくないの。」
ティグルの額に汗がにじむ。ここでリュドミラに去られたら一巻の終わりだ。
結局、巧言令色とは縁のないティグルには頭を下げる以外の行動は思いつかなかった。
「助けてくれ。」
これまでの状況をリュドミラに説明する。
「今の俺に出せる対価はない。ただテナルディエ公爵との戦いが終わるまで待ってもらえたら報酬が払えるかもしれない。」
「あなた自身はどうなの？」
「俺の所有権はエレンにある。」
赤い髪の青年はただただ頭を垂れた。彼の額からは汗がテーブル

に落ちる。彼には青い髪の少女を満足させる言葉は何ら出てこない。彼は、舌に苦味を感じ、頭痛を覚え、頭がくらくらする。
「頭を上げなさいな。」
気の抜けたような声が青年の耳から入ってきた。
青い髪の少女の発言だったが青年には最初それが自分に向けられたものとは思わなかった。
青い髪の少女は、のろのろと体を起こす青年に対し、しょうがないわねとでも言いたげな苦笑を浮かべて続ける。
「バカ正直とバカじゃどちらがましなのかしらね。もともとあなたの誠実さを買ったのだし、おまけで及第点にしてあげるわ。」
「助けて…くれる…のか？」
青い髪の少女は笑顔でうなずいた。
「実はね、聞くまでもなくあなたの状況はだいたいわかっていたもの。テキトーな対価をでっちあげて下手な駆け引きをしようものなら帰らせてもらうつもりだったけど。」
ティグルは引きつった苦笑をするしかない。背中に再び汗が伝う。
青い髪の少女は楽しそうに微笑むが赤い髪の青年は彼女を正視できそうにない。
「安心するのは早いわよ。まだ交渉は終わっていない。こちらから対価を提示させてもらうというだけ。」
リュドミラは空になったカップに新たに紅茶を注ぐ。
「タトラ山は覚えてる？」
ティグルはうなずいた。
「あなたたちは城砦の裏手に回りこんで、城門を破壊したわね。覚えてる？」
ティグルは再びうなずく。その態度には少なからず何かを見破られたことをあせるかのような動揺があるのを青い髪の少女は見破ったが、妖艶な笑みをうかべて、そしらぬ風を装い、そう、とだけつぶやいた。
あどけなさが残る顔にもかかわらず、その笑みは驚くほど似合っており、ティグルはなにかに縛られたように緊張する。背中に再び冷や

汗が伝った。
「その城門だけど、誰がどうやったのかまあるくくりぬかれていたのよ。鉄板を三枚用意してその間に樫の板を挟み込んだ城門がね。」
少し間をおいてリュドミラは話を続ける。
「あのあと、城門を修復してから公宮で政務の合間に過去の戦闘詳報を確認したの。もう知ってると思うけど私の母も祖母も戦姫だったから、ライトメリッツとはよく戦っていた。
だから記録はたっぷりあった。あと、城壁の上にいる兵士たちからも話を聞いた。」
ティグルは膝がかたかたと震える。
（あんなに震えちゃってwもうバレバレじゃないのw）
「アリファールにはあんなまねはできない。あなたのしわざね。エレオノーラに口止めされてる？」
「城門に穴があけられたのはみたけど・・・・ 俺はブリューヌ辺境の弓が少しばかり得意な田舎貴族にすぎないから・・・・」
カップに残った紅茶を一気に飲み干して、冷静さを必死に装い、一見落ち着いたようにみえる態度と口調で答える。肩まですくめてみせた。
しかしそれも幼い頃から政戦両略にわたって鍛えられ、並外れたセンスをもつ戦姫の前には空しい抵抗だった。
（あーあ、必死すぎてかわいそうなくらいねwうそつけないから言葉選んでるしw）
「ティグルヴルムド卿。」
リュドミラはにこりと笑って、空になったティグルのカップに新たな紅茶を注ぐ。
彼女の傍らにおかれた氷の槍から冷気が放たれた。それは、ティグルの頬から耳までをさっと撫でたが、主の意志を反映するかのような（ごまかそうとしてもためにならないぞ）といわんばかりの恫喝じみた凍気だった。
リュドミラはかわいらしく小首をかしげて、微笑みながらとどめをさす。

「あのとき、わたしはあなたの誠実さを買った。ぜひ今回もあなたの誠実さを買わせていただきたいのだけど‥‥　いかがかしら？」

ティグルは降参するしかなかった。全面降伏だった。

第6話　軍議

ティグルはルーリックを呼んで黒弓をもってこさせた。
幕舎にもどり、リュドミラに黒弓をみせた。
「ふうん。洗練さという言葉の対極にあるような弓ね。」
リュドミラは弓をもって眺めながらつぶやく。
「一応、俺の家の家宝なんだ。慎んでくれとまではいわないが、もう少し言葉を選んでくれ。」
リュドミラはしばらく黒弓をもちかえたり、自分の竜具であるラヴィアスに近づけてみたりしてから
「・・・・どことなく不気味な感じはしないでもないけど・・・　何の変哲もない弓に見えるわね・・・。」
「俺も、そう思ってたよ。」
エレンに対する後ろめたさとそれの何倍にもなる申し訳なさがティグルを苛む。
リュドミラはティグルの表情をみて、くすりと笑みを浮かべ、もし、エレンに見捨てられたら自分が生活させてやってもよい、そうはならないだろうけど、と慰めるかのように言ったが話を弓にもどす。
「あなたの言うことが本当だとして、これはもうひとり戦姫がいるようなものよ。ほかの六人に対し、圧倒的に優位にたてる。手離すくらいなら、他の戦姫が確保する前に始末するわね、私なら。」
リュドミラは恐ろしいことをさらりと言ってのける。
ティグルは再び協力してもらえないかと要請するが、リュドミラは、エレンから離れて自分につけば協力するとかわす。それならばとティグルは
「俺がエレンに対して負っている借金もすべて背負うのか？」
と挑発的に言ってみた。リュドミラは歯牙にもかけずに笑って
「その程度で引き取れるならいいわよ。その代わり、私に忠誠を尽くしなさい。」
と再び切り返す。青い髪の少女は出来の悪い弟をかまう姉のような顔になってあきれ交じりの笑顔で諭すように

「百人の兵を指揮する場合と、一万の兵を指揮する場合の感覚は別のものよ。大軍を動かす場合は相応の感性が要求される。その弓の力についても同じこと。そのあなたの大事な家宝を使い続けるなら、その価値について一度しっかり考えなさい。」
とティグルに告げた。赤い髪の青年は家宝である黒弓を改めて見つめる。
(戦姫がもう一人いるようなものか・・・。それをわかっていないということか・・・)
「すまなかった。申し訳ないけどさっきの言葉は取り消させてくれ。」
「よろしい。」
満足げにうなずき、リュドミラは静かに椅子から立ち上がる。
「今回の件は、給金に経費、それからあなたへの貸しひとつということにしてあげるわ。あなたが死んだら不履行とみなして帰る。せいぜい死なないようにがんばりなさい。」
「あらためて・・・ よろしく頼む。」
ティグルも立ち上がり、リュドミラに手を差し出した。少しの時間二人は固く握手をかわし、今後について実戦的な話を始めた。
軍議を終え、幕舎を出ると日が沈もうとしており、暗くなっていて、あちらこちらにある幕舎の前には篝火が灯されている。
『銀の流星軍』の指揮官用幕舎へもどると、ジェラールが駆け寄ってくる。
「どうでした?」
「なんとか協力をとりつけることができた。」
それを聞いてジェラールは安堵のため息をついた。
「しかし、あなたはいったい何者なんですか?」
「?どういう意味だ?」
ティグルはわけがわからず問い返す。
「エレオノーラ=ヴィルターリアといい、あの青い髪の戦姫といい、どうしてあなたは彼女たちの協力を得ることができるんですか?」
「人徳だな。」
自分でも信じていないことをティグルはぬけぬけと吐き出すよう

に言って、両手をひろげ肩をすくめてみせる。それを聞いたジェラールもつまらない冗談を聞かされたという呆れ顔になり、あやかりたいものです、皮肉っぽく返した。
　さて、一晩空けて、『銀の流星軍』の指揮官用幕舎である。数枚の地図を広げ、ティグルとリュドミラ、ルーリックが座っている。
　リュドミラが『銀の流星軍』の幕舎を訪れたのは、ティグルの部下たちを安心させる意味合いだった。ライトメリッツ兵はオルミュッツの主に対してあまり良い感情をいだいていないし、ブリューヌ兵は突然現れた相手に対しとまどわざるを得なかったからだ。
「一戦よ。」
　人差し指をたてながら、険しい表情でリュドミラは話し始める。
「一戦でムオジネル軍を打ち破る作戦。よく聞きなさい。」
「できるのですか？」
「できるかどうかじゃないわ。やるしかないのよ。」
（エレンに似てるな・・・・。）
　礼儀だのなんだのうるさいタイプのリュドミラと傭兵上がりであまりそういったことにはこだわらず竹を割ったような性格のエレンは決してソリが合うとは思えないが、もちまえの大胆なまでの決断力とゆるぎない態度は、瓜二つのように似ているとティグルは感じた。
　エレンとリムのことが思い出される。エレンは親友を助けるんだと言っていたがうまくいったのだろうか・・・　続いてテイッタ、バートラン、マスハスの顔が脳裏によぎる。
　そんなことが脳裏に浮かんでいたが、
「減点」
　というリュドミラの言葉とラヴィアスからだろうか、冷気が顔に当たってでティグルは我に返る。
　リュドミラは憮然とした表情になってくすんだ赤い髪の青年をにらんでしまう。
「疲れているのはわかるけど、重要な軍議の最中に上の空ってどういうことかしら。何を考えていたの？」
　彼女の決断力をほめるにしても、ひきあいにエレンの話が出るよう

では怒らせてしまう。
「すまない。申し訳ない。意識が飛んでいたようだ。ほんとに申し訳ない。」
　ティグルはひたすら平身低頭して許しを請う。
　ルーリックは、(まずいですよ)といわんばかりの渋面をつくって眺める。
「ふう。」(しかたないわね。)
　リュドミラは聞こえよがしのため息をついた。
「話を戻しましょうか。・・・　あなたたちの兵、あと一戦くらいしかもたないでしょ。」
　ティグルは苦い顔にならざるをえない。リュドミラは厳しい表情になる。
「責めているわけじゃないわ。二千足らずで二万の兵を撃退するなんてこと自体がそもそも無謀なのよ。一日休んだ程度・・・　それも緊張が抜け切れない戦場の休息ではね・・・。」
「しかし、一戦でというからには何か策があるのか?」
「基本的には、あなたが二万の兵にやったことと同じよ。」
「兵を無視して将を狙い撃つ。わかってるとはおもうけど圧倒的多数の敵に対してできることって、食糧か総指揮官のどちらかを狙うしかないもの。」
「食糧を狙わないのはなぜでしょうか。」
　腕組みしながらルーリックがたずねる。
(あ~どうやら事態の深刻さが飲み込めてないわね。)
　青い髪の小柄な戦姫はかわいらしく鼻をならすが、その顔は深刻さとそんなこともわからないのか、というあきれがまじった表情になる。
「その場合は徹底する必要があるからよ。ます敵を奥深くまで誘い込む。それから敵の進路にある町や村を焼き払って夜風をしのぐ環境すら与えない。ここまでしないと効果がないけど、相手は愚物どころじゃないから、そんなことをする前に手を打たれてやられる。」
「相手について知っているのか?」

（もうあきれた。どうなっているのよ。敵についての情報がなくてどうやって戦うのよ。このトーヘンボクが。）
　リュドミラは忌々しげに顔をしかめて答える。
「クレイシュ＝シャーヒーン＝バラミール。『赤ひげ』の異名をもつムオジネル王カワードの弟よ。」
　ティグルとルーリックはリュドミラが何を言いたいのか理解できず顔を見合わせる。
「・・・ 有名なのか。」
「この言い方をされるということは、おそらく。」
（もう。困った人たちね。）
「知らないのはあなた方が無知だからよ。」
　青い髪の小柄な戦姫は怒気と冷気をはらんだ視線でティグルたちをにらんでしまう。
　ティグルは、頭をかいて弁明する。
「アルサスはそういう話とは無縁のところなんだ。申し訳ないが教えてくれないか。」
「まったく・・・ エレオノーラはあなたに何を教えていたのかのかしらね。」
　リュドミラは半ば本気で怒っていた。
（これじゃ戦いようがないじゃない。エレオノーラ。あんたほんとに戦姫失格よ。）
　憮然とした表情で青い髪の戦姫は不満をこぼすが、説明を続ける。
「十年ほど前だったかしら、ザクスタンが一千隻もの船団を率いてムオジネルに攻め込んだことがあったの。それをたった二百隻で迎え撃ったのがクレイシュよ。」
「話の流れからすると、クレイシュが勝ったのか。」
「圧勝よ。最初、相手が少数だからとなめてかかっているところを夜襲して４００隻弱をいっきに砲撃と火計で焼き払い、敵が密集している愚をさとって船団を展開させたら、小島の多い海域に誘い込んで罠にはめて痛みつけて、補給を断ち、最終決戦をあせる敵を岩礁のある海域にさそいこんで袋だたき。ザクスタンは２００隻残っていな

かったといわれている。事前に十分な偵察を行い、地形や風向き、敵の情報を知り尽くした精緻な作戦だった。最終決戦の行われた地名からバラヴェザ海戦として知られているわ。その強さにおそれおののいたザクスタン軍は彼のことを畏敬をこめて赤ひげ、ザクスタン語で「バルバロッサ」と呼んだの。それがムオジネル語で少し訛ってバルバロスと呼ばれているムオジネルの名将よ。」

ティグルとルーリックは事態の深刻さが理解でき、げんなりとした顔になってお互い顔を見合わせる。五倍もの艦隊を破るなんて尋常どころでない強敵だ。

「まず、アニエスで戦うのは無理ね。後退するしかない。」

地図を一枚取り上げて、リュドミラは、ティグルとルーリックに見せる。

アニエスをブリューヌ本土方向に抜けた先にあるオルメア平原の地図だった。

一本の街道が、一面に広がる起伏の緩やかな草原の中を西へ向かって走っている。街道は途中で北西方向に大きく曲がりそのそばに二つの小高い丘が描かれていた。

「断崖だらけのアニエスよりよほど大軍に有利そうな戦場ではないですか。」

ルーリックの声にとげが混じってしまう。ティグルはなだめるように彼の肩をたたいて、青い髪の戦姫に質問する。

「わざわざここを選ぶのは理由があるんだろう。」

当然だ、という表情で青い髪の戦姫はうなずく。

「説明してあげてもいいけど… その前に今回の四万の敵と、あなたたちが戦った二万の敵との違いについて説明してみなさい。」

「まず、数が違うな。だから隊列の厚みが違う。」

「先遣隊と本隊という違いもありますな。先遣隊が得た情報はほぼすべて本隊に伝えられていると考えていいでしょう。」

「とりあえずその二点でいいわ。それだけで十分だから。」

「敵は地形もこちらのおおよその数も把握している。そのうえで警戒している。だから小細工にはひっかからないし、奇襲をかけても敵将

の首にはとどかない。」
「それを、オルメア平原ならなんとかできると？」
「ひとつだけ考えがあるわ。だけどわたしたちだけじゃ数が足りない。二千人ほど難民がいるでしょう。彼らにも手伝わせなさい。」
「彼らに何をやらせる気だ？」
「おとりよ。」
「今回、ムオジネル軍が大規模に兵を興したのは、ブリューヌの混乱に付け込んで南部を占領するため。使者が来てそう言っていたけどムオジネルの基本的な目的は略奪。だから最悪の場合でも奴隷だけでもつれて帰ろうとする。」
　リュドミラは地図を指でなぞりながら作戦の説明を始める。
「そういうことだから、ムオジネルが攻撃してくる場合は、難民を捕捉してからよ。そうすれば人質としてこちらを脅迫できるから。それに彼らは今後のことを考えればブリューヌでない相手とは戦いを避けたいはず。従って奴隷を確保するまでは、丘には攻撃してこない。それからあなたもタトラ山で戦ったからよくわかったと思うけど、敵はわたしが守りに長けるということで今回も守りに徹すると考えるでしょ。実際何度もムオジネル軍を撃退しているから。その威名を最大限に利用する。そこで、まず北西の方向に「難民」をすすませる。だけど実はこれは難民じゃない。いちいち男女別だの顔つきなど覚えていないし、遠くから追いかけるのだから、あなたがたとわたしたちオルミュッツ兵の一部を二千人ほど変装させて敵に追わせる。手前の丘には、黒竜旗とオルミュッツの軍旗、紅馬旗とアルサスの軍旗を立てて、槍と馬を何頭か置いて本物の難民たちに守らせる。敵が来たら投石や矢を射かけさせる。」
「君は敵はかなりの名将で、偵察隊を放ち、情報を重視して確実な作戦を練ってくると言ってたよな。そんな相手にばれないですむのか？」
「城砦がどのくらい堅固かどうかじっくり調べるなんて普通はできないわ。だから偵察兵には要所要所をすばやく観察して把握する能力が求められんだけど‥‥。逆に言えば目に付きそうな箇所がしっかり備えられているように見せれば一日や二日くらいならごまかせる。

オルミュッツの工兵はそういうのが得意なのw。それにその程度ならたいした手間をかけずにすむわ。」
「なるほど・・・ そういうものか。」
リュドミラは微笑んで続ける。
「ここまではいいかしら。」
ティグルとルールックはうなづき、続けるようにうながす。
「敵が「難民」に扮した部隊に近づくまで、そうね一ベルスタくらいかしら、そこまで待てばさすがに相手もこちらが守りに徹して出てこないと思い込む。そこでわたしたちは、奥にある丘に潜ませた三千の兵で敵の先頭の軍を横撃し、「難民」に化けた部隊と同時に狙う。これで敵の先頭部隊は壊滅させられる。それからわたしたちはクレイシュのいる本隊をすかさず攻撃、二番目に進んでいる部隊が反転してくるところを、一戦しかもたないと私が指摘した一千の部隊、それを別働隊として使って横撃させる。クレイシュの本隊がいかに分厚かろうと、本人を発見できればあなたの弓の腕で射殺せる可能性がある。」
「なるほど・・・・。」
「たしかにこれであれば勝機がありますな・・・。」
「しかし・・・・ かなり危険な策だな。」
「怖気ずいた?」
青い髪の戦姫の口調は挑戦的な色を帯びる。ティグルは、首を横に振り、気になっていることを青い髪の戦姫にたずねる。
「君はどうしてそこまで考えてくれるんだ?」
「あなたが、そう思うほどの貸しができるからよ。」
ティグルは少し考え込んで家宝である漆黒の弓をみつめる。この弓の力で貸しを返せるのだろうか・・・ いや自分自身の力でなんとかすべきだろうな・・・。
そんなことを考えていると青い髪の小柄な戦姫は
「あなたなりのやり方でわたしを満足させてちょうだい。期待しているわ。」
と言って美しいいたずら好きの妖精のように笑う。
ティグルは思わずリュドミラを見つめ、なんとなく元気がわいてく

る気持ちになった。
「ありがとう。」といい、笑みをうかべてうなずく。
軍議を終え、リュドミラを見送ると、ティグルは難民たちのところへ行こうと考える。
「わたしもいっしょに参りましょうか。このようなことを申し上げるのは心苦しい限りですが彼らが暴発しないとも限りません。」
「ありがとう。だけど俺一人でいい。」
ティグルは黒弓を手にとって難民たちのところへ向かった。

第7話　オルメア会戦（1）『銀の流星軍』オルミュッツ軍の攻勢

難民たちの幕舎には、かがり火が炊かれているのが見える。その周囲に柵や堀は築かれていなかった。ティグルは疲れ切った難民たちを説得するのに有効と思われる言葉はなんら浮かばなかった。

理屈としては、ムオジネル軍が攻撃してくる場合、難民を補足してからになる、理由は、人質としてティグルたちブリューヌ軍を脅迫できるからで、今後のことを考えればムオジネル軍は、ブリューヌでない相手とは戦いを避けたいはず、従って奴隷を確保するまでは、丘には攻撃してこない、ということであるがそれを理解してもらえるか、理解してもらえたとして、協力してもらえるのかはなはだ不安な気持ちのまま難民たちの幕舎を訪れた。

「伯爵様。」

ティグルに気がついた難民の少女が駆け寄ってくる。ティグルは赤い髪をかきながら少女にうなづき返す。そして

「二百人組の代表者を呼んでもらえないか。」

ティグルは少女にそう伝え、少女は微笑を浮かべてかるくうなづくと二百人組の代表者を呼びにいく。

ティグルは二千人の難民を十人づつの班とし、それを十班連ねて百人の組とし、さらにその百人組二つ分を二百人組として十人の代表者を選んだのだ。

ティグルは、ひとつの幕舎に二百人組の代表者を集めた。そこで作戦の大枠の説明を始める。

「これからムオジネル軍と俺たちは戦う。しかし、俺たちだけでは六千人ほどしかいないからとても四万の軍勢と戦うのは難しい。敵は掠奪したり、奴隷を捕まえるのが目的だからこの丘にいる限り安全だ。指示があるまで待っていてほしい。」

「なんで戦なんかしなければいけないんだ。俺たちは、普通に暮らしていたいだけなんだ。急に戦えって言われたって…。」

「そもそも、俺たちを丘の上に置き去りにして逃げようっていうんじゃないのか。」
「こっちは、家もないし財産もない。何日もまともな食事すらできなくて寒さに震えているんだ。それなのにこれ以上何をしろって言うんだ。」
　ティグルは、（そんなこと言っているとまた捕まって奴隷にされるぞ、それでもいいのか）という言葉がのどまででかかる。助けてもらっておきながらなんて勝手な言い分なのか苛立ちを覚えたがぐっとこらえた。
　彼らがひととおり不安や懸念を吐き出して静かになるのを待って、ティグルはようやく話をはじめる。
「お前たちの心配はわかる。だが、どうか聞き入れてほしい。より多くの者が助かるためには、これはどうしても必要なことなんだ。」
「それなら、あなたが丘の上に来てくれ。俺たちと一緒に行動してくれるなら信じようじゃないか。」
「それはできない。四万もの敵と戦うには、兵士は一人でも惜しいんだ。」
「それなら、別の案を考えていただけないでしょうか。敵と話し合うとか。私たちでは無理でしょうが、お強い伯爵様なら敵も話合いに応じるのではないでしょうか。」
「残念ながらそういう相手じゃないんだ。彼らは占領できなければ掠奪するだけのことだ。」
「国王陛下や騎士団やほかの貴族の方々は何をなさっているんですか。伯爵様の力で何とか頼んでもらえないのですか。」
　ティグルはいいかげん自分の都合しかいわない難民たちにうんざりしていた。
　しかしどう説得するのかうまい言葉がみつかなない。やはり脅すしかないのだろうか…と
　思ったとき、太く、威圧感のある声で意見が出された。
「…俺は、伯爵様に従う…。」
　ティグルはその男の顔に見覚えがあった。

助けたときに「どうして・・・ もっと早く来てくれなかった?」とティグルたちをなじった男だった。男は続ける。
「あんたが俺たちを助けてここまでつれてきてくれたのは事実だ。それに俺たちは、俺たちの家族を殺し、家を叩き壊したあの連中に一度もやり返してねえ。」
男はいったんそこで言葉を区切り、ほかの代表たちを見回す。
「俺たちはまともには戦えねえ。正面切ってやりあっても、こないだみたいに首を刎ねられるのがおちだ。けどよう、伯爵様の指示に従えば、助かる上にやつらに一泡ふかせられるんだろう。」
搾り出すように発言する男の声からは怒り、緊張、恐怖が入り混じって震えているが感じられた。ティグルは男の発言に対し、ぐっと力強くうなづいて
「全力を尽くして必ず守ってみせる。」と答えた。
一方ムオジネル軍では・・・
(ジスタートでも、ブリューヌでもよいがどう出てくるか・・・)
アニエスの荒涼とした岩場が終わり、穏やかな起伏のある平原に出る。オルメア平原であった。冬であるために一面こげ茶色の土色が広がっている。
空は灰色で雪がまたちらついてきた。
「クレイシュ様、ジスタート軍に派遣した使者がもどってまいりました。」
「よし。通せ。」
「ジスタート軍の総指揮官であるリュドミラ=ルリエ殿からお言葉をいただいてまいりました。口頭にてお伝えせよ、とのことで、これより復唱いたします。」
「うむ。」
クレイシュはうなづき、続きを促した。
「我々オルミュッツ軍が故国を離れこの地にいるのは、ブリューヌ王国の要人に救援を求められてのこと。」
「ふむ。」
「無法に他国の地を侵している貴君の軍とは違う。」

「ふんふん。」
「もしお疑いとあらば、ブリューヌ貴族ティグルヴォルムド＝ヴォルンに聞いてみればよい。」
「ほほう。」
「貴君と積極的に争う気はないが、我々の行動を妨害するのであれば致し方なし。願わくば参られた道を通り、無事に帰国されんことを・・・ 以上でございます。」
　使者は、言い終わると小さく息をして、一礼する。
「つまり・・・ 痛い目をみたくなければ・・・ さっさと来た道を帰れ、ということか。」
　クレイシュはふふん、と鼻で笑うと、使者に、
「復唱もご苦労だった。所属の幕舎に戻って休むがよい。」
　と告げて下がらせた。
（戦姫は、無法に他国を侵すと弾劾するが、その点については全くもってそのとおりで、申し開きしようがないが、ブリューヌ人ならともかくジスタート人に言われる筋合いではないな。）
　クレイシュは側近たちに向かって
「こちらは四万の軍勢だ。ブリューヌ南部を削り取るためにはるばる遠征してきた。戦姫に脅されたなどと言う情けない理由で逃げ帰るわけにもいかぬ。リュドミラ＝ルリエについては知っている。いいだろう。どちらが痛い目を見るか試そうぞ。今度こそ生意気な小娘にきつい仕置きをしてやることにするか。」
　と言って笑う。偵察隊が戻ってきたため、クレイシュの前に通される。
「我々の現在位置から西へ直進いたしますと小高い丘が二つあります。そのうち敵は手前の丘のほうに布陣しているようです。ブリューヌとジスタート双方の軍旗を確認いたしました。」
「北西に二千人ほどの集団が移動しているのを確認いたしました。身なりから先遣隊が捕らえていた奴隷どもと思われます。」
　クレイシュと側近たちは、偵察兵の報告を聞きながら地図に敵の布陣を記載する。

「どう思うお前たち。」
　クレイシュは側近たちに意見を求める。
「足手まといになる奴隷どもを逃がしつつ、丘の上に居座って我が軍を牽制するというわけか。」
「我々が奴隷を追ったらやつらは丘を下って退路を絶ちにくる、といったところですな。」
「この状況では、ほかに手もないだろうからな。偵察部隊によればやつらの数は五千から多くて六千弱。一日ではたいした仕掛けもできないだろう。」
「うむ。わかった。第一軍から第四軍で手前の丘を包囲。第五軍から第七軍で奴隷どもを追って捕らえる。」
「リュドミラ＝ルリエは、守りの戦に長けると聞く。いままでオルミュッツを攻めた将たちは、しかける隙も付け込む隙もないと評していたからな。積極的に丘を攻める必要はない。三軍あれば十分だ。封じ込めてやれ。」
　第一軍から第四軍は、敵がいると思われる丘に進む。五千五百づつの部隊は近づきすぎず、離れすぎず、見事な連携をし、隙をみせない。
「例の手前の丘の様子はどうだ」
「確認できた軍旗は四つです。紅馬旗と黒竜旗、あと槍を十字に交差させた白い三角形の旗。これはオルミュッツのリュドミラ＝ルリエの軍旗です。あとひとつの旗はテイグなんとかという長たらしい名前の貴族の旗でしょう。」
「丘のいたるところに柵や濠が築かれています。槍がきらめき、馬のいななきが聞こえます。近づきすぎた部隊は矢や投石を浴びせられました。」
「その部隊の者たちに怪我は？」
「いえ、ありません。幸いほとんど命中しなかったので。」
（牽制ということか。）
「ご苦労だった。」
「はっ。」
　クレイシュは別の偵察兵に向き直って問う。

「もうひとつの奥にある丘のほうはどうだ?」
「そちらは雪をかぶって真っ白なものです。敵の姿と思われるものはみあたりませんでした。」
(ふむ。その丘に伏兵を潜ませている可能性もすてきれんな。そうなるとますます手前の丘に攻め入らせるわけにはいかぬ。)
「そうか。では、手前の丘を包囲する軍に改めて通達せよ。包囲だけにとどめて決して中に攻め込んではならぬ、第一軍と第四軍は、敵の奇襲を警戒せよと。」
　昼ごろになった。ムオジネル軍の第五軍から第七軍は、およそ一ベルスタほどであろうか、「奴隷」たちの姿を肉眼でも見える位置にとらえる。
「例の丘に何か動きはあるか。」
「ありません。」
「よし。第五軍から第七軍は速度をあげよ。一気に奴隷どもを捕らえる。」
「名をはせる戦姫もさすがにこれだけの数には対応できなかったと見えるな。ああして丘に立つことでブリューヌに義理を果たしているということか。戦などしょせん政事だからな…。」
　そこへ新たな報告が入る。
「閣下、敵が出現しました。その数およそ三千。」
「もっとも近い軍に迎え撃つように伝えよ。それから… どこから来た?」
「進軍方向からみて右側からと思われます。」
「第五軍の横腹を突かれました。先頭に立つ赤い髪の男が弓を射掛けてきます。」
「赤い髪の男と並んで戦姫と思われる青い髪の少女が槍をふるい、全く我々の矢は敵にとどきません。」
「第五軍は、斜め前方の死角から敵の攻撃をうけ大混乱です。我々の矢は敵に全く届かず、敵の矢だけが命中し、戦死者が続出しています。」
(そうか… 兵たちは、敵のいる丘に気をとられすぎたな。もっとも

奥の丘に手出しをすれば、手前の丘からの敵の攻撃をうけ丘と丘の隘路で叩かれるからな。だからこちらの心理をそこまで読んで奥の丘の陰に身をひそめていたというわけか。守りの戦いに長けるといわれたリュドミラ＝ルリエ、その勇名にひっかけられたな。奴隷たちにぎりぎりの近距離まで近づくのを許して絶妙なタイミングで来たか。

・・・・ まあよい。こちらは一万六千以上、攻めてきたときの対応策もある。たかが三千程度でどうにかなるものではない。）

クレイシュがそんなことを考えていると次の報告がもたらされる。

「に、逃げていた「奴隷」どもが・・・ こちらに向き直って襲いかかってまいりました。」

「なんだと・・・。」

側近たちがざわざわとざわめき、顔を見合わせ、ときおりクレイシュに目をやる者もいる。

クレイシュは赤ひげをいじりながら、平然と頭上にはためく戦神ワルフラーンが描かれた軍旗を目をぎょろつかせ、見上げてほくそえむ。

「ふむ。おもしろくなってきたな。さて戦神は、性悪な馬と竜を狩れるのだろうか。それとも馬蹄とかぎ爪に蹂躙されるか。そう簡単にはいかぬぞw。」

「今だ「今よ、突撃！」」

銀の流星軍とオルミュッツ軍は、第五軍が進軍速度を上げ始めた絶妙なタイミングで横撃を加える。

丘の影から雪を蹴立てて襲い掛かってくる敵に気づき、

「右方向から敵です。」

「長槍をかまえよ。矢を放て！」

さすがは名将クレイシュの配下だった。動揺を最低限にとどめ長槍が針ふすまのように整然と突き出され、その背後から矢がいっせいに放たれる。

「やぁつ。」

リュドミラが矢の雨にむかって凍漣を振るうと、冷風が湧き起こって矢の雨を包み込んだ。次の瞬間、矢は、凍って灰の燃えかすのよう

に粉々に砕け散って吹き飛んでしまう。
「ひえええ。」
「な、なんだ・・・ あれは・・・。」
ムオジネル兵から悲鳴があがる。
「それ、竜具の力か？」
リュドミラは軽くうなずき、にこりと笑顔をテイグルに向ける。
「大きな声ではいわないでね。」
テイグルはうなずいて、黒弓に数本の矢をつがえて、力強く引き絞って、長槍と盾を構えるムオジネル兵に向かって放つ。
矢は、あやまたずムオジネル兵の武装のうすい腕や頭に命中し、つぎつぎに倒れる。整然とならんでいた長槍の針ふすまにほころびが目立ち始める。
「やるじゃない。」
リュドミラは短い賞賛と笑顔をテイグルに向けると、
「はぁつ。」
と馬に鞭をくれてムオジネルの戦列のほころびに向かって突進する。
振り回された凍漣は、ムオジネル兵の急所をつき、彼らの肉体は突き刺され、切り裂かれる。ムオジネル兵は「ぎゃつ」「ぐつ」と一瞬悲鳴をあげ、鮮血をほとばしらせた次の瞬間には、ものを言わぬ骸となって折り重なる。ムオジネル兵の剣も槍も弓も同じだった。剣や槍は金属音をたて、弓は小枝が折れるような音や弦の切れる音をたて、すべて凍漣に打ち砕かれる。その残がいや破片が死体の上に落ち、転がる。あるいは、地面に突き刺さった。
槍兵たちは集団でおそいかかり、いっせいに槍をリュドミラにつきだすが青い髪の戦姫はその半数を凍漣を用いて何食わぬ顔で打ち払い、もう半数を馬上でしなやかに姿勢をかえて回避する。そして閃光のように繰り出される槍さばきにまたたくまにムオジネル兵たちは貫かれ、切り裂かれ、骸に変わる。
どよめきと怒号がムオジネル兵をつつむ。しかし、たかが十代の小娘に打つ手がなく、それに続く『銀の流星軍』とオルミュッツ軍に隊

列が押し捲られていく。しかも赤い髪の青年の放つ矢が部隊長を的確に射抜き、第五軍の指揮系統も崩壊しはじめる。
「あなた、怖くないの？」
槍を振るう手は休めずにティグルに話しかける。
「そう思うなら守ってくれ。」
ティグルはやや乱暴な口調で答える。目の前の敵に集中しなければならないので一言でもしゃべるのが惜しい気分だった。そうやって射っていくうちに矢筒の矢が減っていくのをみて、ジェラールが後ろからティグルの空になった矢筒を外し、新たな矢筒を胴に結びつけた。

第８話　援軍要請

オルメア平原での戦場は敵味方入り乱れ、視界が定まりにくい。しかも敵の部隊長の鉄兜は、灰色の曇り空で、ほんのり暗く、さらに雪が降っていて、見分けにくくなっている。
「この状況でよく敵の部隊長を狙えるわね・・・。」
リュドミラは感心したようにつぶやきながらティグルを見る。
「頭に黒い布を巻いていないのが部隊長。そう考えればわかりやすい。」
アニエスからの連戦で、ティグルはムオジネル軍の軍装を正確に把握していた。
一方でムオジネルの第五軍は、奴隷と思っていた「難民」の逆撃と、ティグルとリュドミラの攻撃で崩壊していく。予定通りだ。
「ティグルヴルムド卿、ご無事ですか。」
馬を寄せてくるルーリックに対し、ティグルは笑みを浮かべながら返事をする。
「お互い、まだ大丈夫みたいだな。」
緒戦はうまく行ったように思われた。
さて、しばらく時をさかのぼる。ムオジネルの侵入が判明したときの朝である。
ティグルとルーリックは、ユーグ＝オージェ子爵とマスハス＝ローダント伯爵のいる幕舎に向かった。
幕舎にはいって、二人は言葉を失った。何枚もの地図と兵棋演習に使用する駒が散らかっている。ずんぐりとした体躯で灰色の髪と髭が印象的な老人は目にくまをつくっている、またやせ気味で温和な文官風の老人は服が着崩れて疲れきった感じがありありとうかがわれた。
「お話があるのですが、お二人ともいかがでしょうか。」
「ちょっと待ってくれ。」
二人の老人は異口同音に返事をし、眠気をとばすために水をかぶってから顔と頭をぬぐった。

「よし、聞こう。話してくれ。」
「俺は、兵を率いて南東へ向かい、ムオジネル軍と戦います。」
ティグルは想いを一気に吐きだすように言い、マスハスとオージェをみつめる。二人の老人は一瞬視線をかわすと、マスハスが重々しい表情で
「そう言うだろうと思っておったよ。」
その表情は、表面的にはルーリックやリムがティグルに時々向けたものと同質なもので、（また、むちゃをするのか、困ったやつだ）というあきれ顔と声質を伴っていたが、アルサスを民を守るという原点からあくまでもぶれないティグルに対して年長者がたのもしい若者を見守る暖かいまなざしを含んだものだった。
「ますは、理由を聞かせてもらおう。」
「生き延びるため、守るべき者たちを守るためです。」
と赤毛の若者は答える。二人の老人は（やはりそうか）と自分の予想が合致したのを確認したが、それは若者に対しての同意にはつながらない。より安全な策を考えるのが経験豊かな年長者の役目であると二人は考える。そこで今度は温和な文官風の老貴族オージェのほうが赤毛の若者へ提案を述べる。
「このテリトアールで守りを固めるという手もあるが・・・・。それは考えられないのか？」
オージェの表情は真剣そのものである。普段のやさしげな笑みを浮かべる老人の姿はそこにはない。
「二万の軍勢が攻めてきた場合、果たして守りきれるでしょうか・・・・？」
「時間を稼ぐのだ。相手は侵略者だ。ほかの貴族や騎士団にとっても他人事ではない。それにムオジネル軍がこちらではなく、豊かなネメタクムに向かう可能性も充分ある。」
「ほかの貴族や騎士団はいつ来るのでしょうか。その前に俺たちが負ける可能性も充分あります。」
「あるいは、援軍現れず・・・・か。」
マスハスがつぶやくとティグルは驚きを隠せない視線を若者が深

い信頼を寄せる灰色の髪と髭をもつ老人に向けた。
「ふん・・・。」
　温和な文官風の老貴族オージェが鼻を鳴らし、兵棋駒を指と手のひらで転がしながら皮肉気な笑みを浮かべて話し始める。
「テナルディエのおかげで、こちらは反逆者の片割れのような扱いじゃ。放置したところでとがめられる理由もない。それにやつらにしてみればわしらのためにムオジネル軍が少しでも疲弊してくれればもうけものくらいに思っているのじゃろう。」
「そこまでお考えでしたか。」
「考えるのはできる。その後の判断と行動をどうするかが重要じゃて。」
　マスハスがティグルの肩に手を置いて話を続ける。
「お前がそこまで考えた上で、民を守ることを決断したのはうれしいが・・・。」
　ティグルはマスハスの発言をさえぎるように
「そこで、お二人にはお願いしたいことがあるのです。」
　と笑みを浮かべて話し始める。
「二千弱では、二万の兵に立ち向かうべくもありませんが、工夫によっては多少なりとも行軍を遅らせることならできます。その間にお二人には騎士団と中立派の貴族たちに働きかけて、動かしていただきたいのです。」
「そうか・・・　わかった。」
　マスハスとオージェの脳裏には幾人かの貴族の顔や軍旗、騎士団の軍旗が浮かぶ。
「それでは、お二人ともお願いします。」
「任せておけ。」というとマスハスは笑みを浮かべてオージェに目配せする。
　今度はオージェが笑みをうかべて
「ことがことだけに無理するなとは言わぬが、しすぎてもいかんぞ。逃げの一手でなんとしてももたせるのじゃ。」
　オージェは好々爺然とした笑みを浮かべ、いたずらっぽくウィン

クしてみせる。
自領と民を守るためにはいくらでも老獪になってきたしたたかさうかがわる笑みだった。
オージェは、わしの息子をお預けするから好きなようにつかってくだされ、とジェラールをティグルに預けた。たしかにジェラールは有能だった。世知辛い立場を老獪に切り抜けるそういう父親を見てきた彼は、皮肉屋でしゃあしゃあと物を言ってのけ、若いのに達観したような老獪さを持ち、計算高く有能な文官の資質をもつように育ったことをティグルは後に思い知らされることになったのだった。
マスハスが最初に訪れたのはティグルたち『銀の流星軍』とクレイシュ率いるムオジネル軍が激突することになる戦場から街道を北へ向かって四日ほどの位置にあるペルシュ城砦であった。東西方向と南北方向に走る街道が交差する交通の要衝に位置している。
城砦にある幕舎には、群青色の地に、ベージュの十字が描かれ、その中心には白い円の中に黒い剣と兜、そして黒と白の盾が描かれているペルシュ騎士団の軍旗が翻っている。
護衛の兵に身分を名乗って、騎士団長レオナールの執務室へ通しもらう。
「おお、これはマスハス卿。」
「レオナール殿。おりいってお話があるのだが。」
「うかがいましょう。」
「ムオジネル軍が、二万の兵を率いてアニエスへ侵入したことはごぞんじか。」
「はい。さらにその後に三万の軍勢が向かっているようですな。」
「なんだと。」
「わがペルシュ騎士団だけではとても兵力が足りず、じくじたる想いですが・・・。」
「そのことだが、テイグル・・・ ではない、ヴォルン伯爵は単独でムオジネル軍の足止めをすることを決めたのだ。」
「なんと・・・ ヴォルン伯爵のことはうかがっております。テナルディエ公爵の息子にアルサスに攻め込まれ、やむなくジスタート軍を招き

入れたと・・・。」
「それについてはどうお考えか・・・。」
「テナルデイエ公爵のやり方には、騎士団としては納得しがたいものを感じていました。一方で、ヴォルン伯爵が外国の軍を招きいれたことについても同様でした。しかし、ヴォルン伯爵はナヴァール騎士団のロラン殿と戦った後、正義を認めた証としてデュランダルを預けられただけでなく、ロラン殿とオリビエ殿より手紙でブリューヌのため、民のために戦うときは彼の元にはせ参じてほしいとうかがっております。」
「ありがとうございます。」
「しかし、この城砦を空にするわけにはまいりません。その代わり、見所のある者に騎士団の一部を割いて率いさせましょう。おい、エミールを呼んでくれ。」
「はっ。」
　呼ばれてきたのはティグルより十歳ほど年長であろうか、褐色の髪が印象的な若々しい騎士であった。
　レオナールは若い騎士の名を呼ぶ。
「エミールよ。」
「はっ。」
「こちらは、マスハス＝ローダント伯爵だ。」
「おはつにお目にかかります。ペルシュ騎士団のエミールと申します。」
　レオナールは、エミールにマスハスがペルシュ城砦に訪れた経緯を話し、
「千五百を率いて、ヴォルン伯爵をぜひ助けてほしい。」
　と付け加えた。
　マスハスは、これまでの戦いの経緯を話し、ティグルが兵力の圧倒的な不利とほとんど利益を見込めないムオジネルとの戦いに民を守るために挑もうとしていることを話す。
「まことですか・・・。」
　エミールは体を打ち振わせた。

「ヴォルン伯爵こそまことの勇者でおわすな。」
「エミール殿、たしかにその通りであるが、あれは気持ちが先にたって無茶をするところがあります。エミール殿も感極まってあれと同じことをなさらぬよう…。」
　レオナールを含めた三人は顔を見合わせて爆笑した。
「そこで、わしとオージェ子爵は、このブリューヌの危機に、騎士団と中立派の貴族たちに呼びかけてムオジネル軍を退けられないか考えているところです。」
「なるほど…。」
「エミール殿だけが急ぎ戦場へ向かった場合、戦力の逐次投入となり、ムオジネル軍の思う壺となります。援軍となる騎士団がこのペルシュ城砦にいったん集結していっきにムオジネル軍が備えていない部分に突進すべきでしょう。」
「おっしゃるとおりだ。じゃあオージェ子爵の呼びかけに応じた騎士団や貴族の方々と一緒に出撃することとしましょう。」
「そうなさりますよう。わしからその旨オージェ子爵にもお伝えすることにして、ほかの貴族や騎士団にもあたってみます。」
「わかりました。マスハス卿、道中の無事を祈ります。」
　そのころ、オージェは、リュテス城砦に騎士団長のシェイエの幕舎をたずねていた。赤地に黒い線が上下に二本、中央下に白抜きで月桂樹、その上に赤く三又の麦の穂が描かれた黄色い盾が描かれた旗が翻っていた。リュテス騎士団の軍旗である。
「シェイエ殿。」
「これは、オージェ子爵、おひさしぶりです。自らおこしになるとはなにかあったのでしょうか。」
「シェイエ殿は、ムオジネル軍がアニエスに侵入したことはご存知であるか。」
「はい、存じております。ブリューヌの危機ですが、われわれだけではいかんともしがたく苦慮しております。」
「そのことだがな、わしとヴォルン伯爵とローダント伯爵が手分けして、ムオジネル軍を防げないか手を尽くしているところじゃ。ヴォル

ン伯爵が二千弱の兵でムオジネル軍を足止めし、わしとローダント伯爵で騎士団や貴族たちに呼びかけて兵力をそろえようと動いているというわけじゃ。今頃ローダント伯爵は、ペルシュ城砦へ行きペルシュ騎士団千五百に援軍をとりつけたころじゃろうし、ヴォルン伯爵の下には、ジスタートのオルミュッツ公国軍四千が援軍に来ている。オルミュッツから十分な補給を受けており、武器武具の補修も可能なものの、寡兵での戦いを強いられているのですこしでも兵力がほしい状態なのじゃ。」

　オージェ子爵は話しながら苦笑していた。

（ジェラールめ。わしの息子ながらあいかわらず抜け目のないことじゃ。）

「なるほど、ここへわれわれが加われば全部で八千五百か九千になるというわけですな。それからヴォルン伯爵のことは、ナヴァール騎士団のロラン殿とオリビエ殿から聞いております。よろこんで協力させていただきましょう。」

「ありがとうございます。」

「しかし問題は、騎士団がそれぞればらばら来たのでは・・・・。」

「戦力の逐次投入となりますな・・・。」

「そのとおりで・・・。それをどうするか・・・。」

「シェイエ団長、お客様が・・・・。」

「どなただ・・・。」

「マスハス＝ローダント伯爵の使者とのことです。至急、オージェ子爵と団長にお話があると・・・。」

「とおしてくれ。」

「はっ。」

「マスハス様から、手紙と地図をあずかってまいりました。」

「ふむ、ペルシュ騎士団千五百に加え、カルヴァドス騎士団二千にも参戦の了解をとりつけた、この地図に示したようにペルシュ城砦へいったん集結して・・・。」

　オージェとシェイエは顔を見合わせて軽くうなづく。そしてシェイエは使者に向き直り、

「なるほど、わかったとローダント伯爵に伝えてくれ。」
「はっ。」
使者は手紙受け取ると馬を駆って去っていった。
「オージェ子爵はどうなさいますか？」
「マスハス卿は中立派貴族の説得のために一緒に来てくれと書いておるな。どれ、わしはいくとするよ。」
「そうですな。お二人そろったほうが人脈も説得力も違うでしょうからな。」
ふたりは軽くうなずいてわかれる。
オージェ子爵は手紙に書かれたマスハスとの待ち合わせ場所にいき、リュテス騎士団は、一路ペルシュ城砦をめざして出発した。

第9話　騎士団集結、オルメア会戦（2）ムオジネル反撃

ペルシュ城砦ほどでないがブリューヌ南方国境に近いカルヴァドス城砦では、灰色地の中央に赤と黒の縞、中央に斜めに赤い盾と猛禽の翼とかぎ爪をあしらった旗が翻っていた。その一室で、ひげをたくわえた壮年の騎士が手紙を読んでいる。

それはナヴァール騎士団の現団長であるオリビエから彼に与えられた手紙だった。

「国王陛下の忠実な僕たるナヴァール騎士団の長であるオリビエが同じく陛下に忠誠を誓いブリューヌを守る盾の一であり、暴戻なる敵を倒す剣の一であるカルヴァドス騎士団に告ぐ。いまムオジネルが兵五万を率いて南方の国境から侵入してきたことはご存知のことと思う。また、ヴォルン伯爵がムオジネル軍の進軍を遅らせるべく戦っていることを聞いている。遺憾ながらわがナヴァール騎士団は西方国境を空けられない。もし、空けた場合は、虎視眈々と機会をうかがうザクスタンとアスヴァールが攻めてくるであろう。どうか前団長のロランが申し上げたようにヴォルン伯爵に助力し、南の憂いをとりのぞいていただきたい。」

壮年の騎士は前団長ロランの手紙を思い出していた。その文面ははっきり覚えている。

「国王陛下の忠実な僕たるナヴァール騎士団の長であるロランが同じく陛下に忠誠を誓いブリューヌを守る盾の一であり、暴戻なる敵を倒す剣の一であるカルヴァドス騎士団に告ぐ。今ブリューヌは、君側の奸がほしいままに専横し、それにおもねる者がはびこり、疲弊してまさに危急存亡の秋である。そのような者が、陛下の忠実な臣僚たるヴォルン伯爵の領地アルサスを攻めたとき、伯爵は領民を守るためにやむなく他国の兵によってこれを退けた。一方で騎士団はブリューヌを守る盾であり、剣であるのに動くことができず、正義を貫けなかった。このようなことは、ブリューヌの国辱である。私ロランは、

これをオーランジュ平原でヴォルン伯爵と決死の戦いを行って知った。伯爵はブリューヌのため、民のために戦っていると。私ロランは、誤りをただすために君側の奸はびこる都ニースへ向かう。無事にもどることができないかもしれない。ヴォルン伯爵の正義を認め後事を託すべく彼に宝剣デュランダルを預けた。ブリューヌは、西にアスヴァール、南西にザクスタン、南東にムオジネルと称する外患と、国内にはほしいままに専横する君側の奸とそれにおもねる者という内憂がある。これらの憂いをしりぞけるため、ブリューヌのため、民のためにヴォルン伯爵が戦うときは、騎士団が伯爵を支えてくださるよう願うものである。」末尾にはロランのサインが記されていた。

その手紙を読んだとき、あわ立つ興奮とこみあげる喜悦が壮年の騎士の心と体をゆさぶったものだ。ウルスにしがみついていたあの幼かったティグルが、ジスタート軍を招き入れたという汚名を浴びながらも、その動機が疑いもなくブリューヌのため、民のために戦っていることをあの黒騎士ロランが認めた手紙だったからだ。

（ご立派になられましたな・・・ティグル様・・・。）

壮年の騎士はそう心の中でつぶやいた。その数日後、風のたよりで、ロランが蜂牢でガヌロンによって殺されたことを知った。テナルディエがその情報が流れるのをとめなかったからだ。

（君側の奸がほしいままに専横し、それにおもねる者がはびこり・・・か）

ロランの手紙に書かれている「君側の奸」とは、まさしくテナルディエ公爵、ガヌロン公爵とそれに付き従う者たちであるのは明らかだったが両公爵の手の者がどこにいるかわからない。そのため、いくらでも言い逃れができるために名指しを避けているのだった。壮年の騎士の心は沈んでいた。それに、オリビエの手紙を受け取り、跳んで行きたい気持ちに駆られたがカルヴァドス騎士団で南方の防衛にさける兵力はせいぜい二千くらいだ。

（どうしたものか・・・せめて倍くらいの兵力がないと各個撃破されるだろう。ほかの騎士団と連絡を取る必要があるな。）

ひげを蓄えた壮年の騎士はあごをなでてしばらく思案にふけって

いた。そのときだった。部下の声が耳に入る。
「団長、オーギュスト団長はいらっしゃいますか？」
「何事だ。」
「お客様です。ローランド伯爵御自らお見えです。」
「何！お通ししろ。」
「はっ。」
　そこへ入っていたのは灰色のひげをたくわえた初老のオード領主だった。
「オーギュスト殿、実は・・・。」
「マスハス卿お久しぶりです。ムオジネル軍のことでしょう。オリビエ殿からお話を伺っています。」
「なんと。それは話が早くて助かる。」
「それでマスハス卿。カルヴァドス騎士団だけでもおうかがいしたいと気持ちがはやるのですが、相手は、十年前に五倍のザクスタン艦隊を打ち破った名将です。せいぜい二千ほどしか出せないわれわれだけでは、ティグル様を助けるどころか各個撃破されて敵の餌食になるのが落ちです。それで忸怩たる想いでいたところです。せめて倍以上、そうですな、少なくとも五千くらいはないと敵に十分な打撃は与えられない。それで思案していたところです。」
「そのことだが、オーギュスト殿、すでにペルシュ騎士団に話をつけている。」
「おお、そうですか。」
　壮年の騎士の表情が明るくなる。
「ペルシュ騎士団のレオナール殿もロラン殿とオリビエ殿から手紙を受け取っていて四千すべては無理だが一千五百を出しましょうと快諾してくれた。それからユーグ＝オージェ子爵がリュテス騎士団のところへ行っている。おそらくロラン殿とオリビエ殿の手紙がいってくるだろうからリュテス騎士団の説得も成功するだろう。」
「わかりましたが、敵をどうやって攻めるのですか。」
　マスハスは地図を広げる。
「現在わかっている敵の布陣だ。この丘に旗を立てて敵のうち半分を

ひきつけている。そして「奴隷」に化けたおとり部隊で敵をひきつけ、ティグルたちの本隊は敵の死角に隠れている。」
「ほう。この布陣はどなたがお考えに。」
「オルミュッツ公主リュドミラ＝ルリエ殿がお考えになったものだそうだ。」
「？ティグル様を守るためにジスタートから来た戦姫殿はエレなんとかという方だということだが・・・。」
「そう。ライトメリッツ公主エレオノーラ殿だが事情があって帰国している。」
「はあ・・・。」
「それはそうとこの布陣はどう思う？。」
「なるほど五万の相手をするにはこれが最善でしょうな。」
「敵の指揮官はずば抜けて有能だ。しかし、ムオジネルは、奴隷の確保に目が行く傾向がある。それから敵は、偵察を十分に行い、北側からの攻撃がないことを知っているからこその布陣だ。そこに付け目がある。そこでオーギュスト殿には、まずペルシュ城砦へ向かっていただきたい。あなたの同意がいただけたら、ペルシュに続いてカルヴァドスも参戦する旨、リュテス城砦には早馬で伝え、ペルシュ城砦へ集結するよう使者を送る用意が出来ている。」
　オーギュストは膝を打った。すでに壮年の騎士団長は、わが意を得たりといつのまにか顔にはあふれんばかりの喜色に満たされている。
「わかりました。さっそくペルシュ城砦へ向かいましょう。」
「ご助力感謝する。」
「マスハス卿はこれから・・・。」
「協力してくれそうな貴族たちを説得しようとおもうておる。老兵は経験とそれに裏付けられた弁舌が仕事じゃ。」
　マスハスは、オーギュストに満面の笑顔を向ける。
　オーギュストは部下に伝える。
「出撃だ。ペルシュ城砦へ向かう。二千の部隊を選抜せよ。」
「はっ。」
　準備が整うと灰色地に赤い盾と猛禽の翼と爪の旗を翻して二千の

騎士が馬蹄を響かせて一路ペルシュ城砦へ向かっていった。
一方、その遠く南方のオルメア平原では、一時的に、そして局地的に『銀の流星軍』とオルミュッツの連合軍が優勢を保っている。
「クレイシュ様、第五軍が・・・ 壊滅いたしました。」
「ふん・・・。」
赤ひげの王弟は平然と赤ひげをもてあそぶ。
(まあ、相手も小娘とはいえ、七戦姫の一人に選ばれるくらいの者だ。それくらいやってのけるだろう。想定内だ。)
「第四軍に伝令をとばせ。至急こちらへむかい、第七軍を支えよ、とな。」
「はっ。」
「それから第六軍に伝えよ。反転して敵の背後を襲えと。」
「はっ。」
「わが第七軍は後退する。」
「はっ。」
ムオジネルの第七軍は整然と後退をはじめた。さぁーっと潮がひくかのようなそのスピードは恐るべきもので、整然として非常によく訓練されていることをうかがわせる。
(さすがね・・・。)
リュドミラは言葉も出ない。これが五倍の船団を打ち破った男の軍勢なのだろう。
しかもその退却振りは、「堅実にして隙なく常に理にかなう」を地でいくものであり、全く無駄も隙もない。
『銀の流星軍』とオルミュッツ軍は逃がすまいと追いすがるしかなない。
そのとき後方にいた第六軍が反転をはじめる。黄金の兜をかぶった巨神が目覚めて、振り向いたのだ。その巨神に対し、ティグルは、一千の部隊に横撃を加えるよう伝令をとばす。
これがうまくいけば、あの十年前の海戦で五倍の敵をほふった赤ひげの名将に、当時六歳だった青い髪の戦姫は一気に完勝へ王手をかけるはずだった。赤い髪の青年の矢によって。

しかし、そうはならなかった。
「どうしたの・・・？」
一千のブリューヌ兵の部隊はムオジネル第六軍へ「ようやく」攻撃はかけた。
「ようやく」攻撃はかけたが、蟷螂が黄金の兜をかぶった巨神にむなしく鎌を振りあげて見せたに過ぎなかった。
（限界が来たんだ・・・）
兵たちは連戦に加え、寒さと雪で疲れきっていて、ろくに動けなくなっていたのだ。
第六軍はなんなくその散発的な攻撃を跳ね返し、第七軍に攻撃をしかける『銀の流星軍』本隊とオルミュッツ軍に側面から襲いかかった。
「あと一歩というところで・・・・。」
ムオジネル兵が雲霞のごとく殺到してくる。一騎当千の戦姫でなければ防ぐことはできない。リュドミラがラヴィアスを振るい、突きだすと、ムオジネル兵は馬上から叩き落され、また身体を貫かれて屍となる。しかし、青い髪のあどけなさの抜けない戦姫の絹服にも、肌にも斑点のように血痕がこびりついている。さらに新たな鮮血の飛沫がそれに加わる。
どのくらいの敵を倒しただろうか、呼吸が荒くなっている。
彼女の隣で戦う赤い髪の青年も似たようなものだった。弓を握る左腕も、弦を引く右腕にも痺れを覚えている。矢筒も何度交換したかわからないくらいだった。
「はつはつは。戦況が二転三転したが、みごとだったぞ。リュドミラ＝ルリエ。守りの戦いで名高い戦姫が猛将のごとく果敢に攻める戦いを選ぶとはな。」
「そういえば、敵は戦姫だけではなかったのだな。三百アルシンの距離からカシムを討ち取った恐るべき弓の使い手がいるのだったな。わしの輿を進行方向に移動させ、さらに後退の速度を上げよ。」
クレイシュは後退方向に輿を下げさせる。自分が射殺されてしまったらなにもならないからだ。いかにムオジネル兵の数が多く、精強であろうとそれが生かされるのは優秀な指揮官あってのものだ。

それが烏合の衆になってしまうのはカシムの一件で明らかだった。
　クレイシュは手をふり上げて命じる。
「第六軍に左右に展開して敵を包囲するように命じよ。第七軍も展開する。」
「はっ。」
「名高い戦姫を我が前に引きずり出してくれよう。なに、国王に次ぐといわれる者だ、虜囚の辱めはあたえぬ。賓客として手厚くもてなすとも。手厚くな。」
　クレイシュはほくそえんだ。
　七戦姫のひとりを妾とするのだ。気丈かもしれないが、そういう花のほうがたおるのに興があるというもの。戦姫を妾にした男として後世にまで伝えられるだろう。
　さて、『銀の流星軍』とオルミュッツ軍である。押し寄せる敵兵に対し、一人また一人と兵たちは倒れるものの、弓を放って敵の部隊長を射倒す赤い髪の青年と槍を振るって敵をつぎつぎに貫き、振り落とす青い髪の少女の目覚しい働きにはげまされて、一人戦死するときには敵兵は十人は死んでいるという状態という驚異的な善戦をしていた。
　雪と泥の上に死体が積み重なって凍っていく。
　ティグルの矢筒は空になった。後ろにいるジェラールを振り返ると、褐色の髪の青年は、赤い髪の青年に矢筒を二つ押し付けると苦渋の表情を浮かべる。
「ほかにないか今からさがしてまいります・・・。」
「頼む。」
　ジェラールは軽くうなづいて去っていく。
　ティグルは近くで戦っている青い髪の戦姫たる少女のほうへ向き直る。
「リュドミラ。ここは俺がどうにかするから君は・・・。」
「黙りなさい。」
　青い髪の戦姫の顔には隠しきれない疲労の色がうかがえるものの、その瞳には覇気があふれて輝いている。
「ただちょっと敵の数が多いというだけで泣き言を言うの？わたしに

は戦姫としての誇りがあるわ。母や祖母、曾祖母・・・ いえ、この凍漣を振るってきたいままでの戦姫から受け継いだ誇りが。」
そう話している間にも大柄なムオジネル兵がリュドミラに襲いかかるが閃光のような槍の一閃でその兵士を葬り去る。
「・・・・ 君に誇りがあるなら」
くすんだ赤い髪の若者は、青い髪の戦姫の隣に馬を寄せつつ言葉をつづける。
「俺にも意地がある。」
「意地？」
「父やたくさんの人たちから少しづつもらってきた・・・・ 意地だよ。」
意地という単語にはティグルの万感の想いがつまっている。
父ウルス、バートラン、ティッタ、領民たち、領主としての価値観を同じくするマスハスとオージェ、そして黒騎士ロラン、作戦に協力すると言ってくれた難民の代表の男、そしてその男になじられたときに「それでもあなたにお礼をいいたかった。」と言ってくれた少女。そして友人のために別の戦場にいるエレンとリムのことが彼の脳裏を駆け抜けていた。
「胸を張って言えることばかりしてきたわけじゃないけど・・・ とうてい顔向けできないことはしたくないんだ・・・。」
「バカ・・・。」
思わず口をついて出た青い髪の少女のつぶやきは、彼女自身にしか聞こえない小さなものだったが、彼女自身がいだいている気持ちや想いを正確に自覚させるものだった。彼女の胸の奥底から不思議な喜びがこみ上げ、笑みにかわる。そしてその不思議な喜悦は青い髪の戦姫の疲れた身体にも新たな活力を与える。
「いいわ。だったら戦いなさい。わたしといっしょに、わたしの隣で。あなたの背中はわたしが守る。」
凍漣の持ち主である戦姫が槍をかまえ、家宝だという不思議な黒弓の持ち主がその弓に次の矢をつがえた。しかし、その驚異的な善戦にも限界が近づきつつあった。

第１０話　オルメア会戦（３）騎士団参戦、戦局二転三転

『銀の流星軍』とオルミュッツ軍の北方半日の地点では、リュテス、ペルシュ、カルヴァドスの三騎士団の陣営があった。三騎士団ともペルシュ城砦にいったん集結した後、救援に赴こうと昼夜兼行でむかっていたが、戦場の位置が特定できたことで作戦を確認するためと兵を休ませるために陣営をはっていたのである。

「シェイエ様、エミール様、オーギュスト様、ヴォルン伯爵とオルミュッツ軍は敵の先頭集団を壊滅させつつある模様。」

「ムオジネルの指揮官はどこにいるのか？」

「前から三番目の部隊にいる模様です。ちょうどよいことにやはり敵は北側の警戒を全くしていない模様です。」

斥候は地図を指し示す。

「というかヴォルン伯爵とオルミュッツ軍の数では北側から敵を攻撃する余裕なんかないはずだからな。」

「そういうことであれば予定通り北側から攻撃しましょう。」

「そうだな。戦況が変化した場合でも混乱しないで敵に打撃を与えられるだろう。」

「よし、そうときまったら出撃だ。」

「あれだな。」

「ムオジネルの赤い旗と黒竜旗、白い十字に交差した槍の旗、アルサスの旗と流星の旗と紅馬旗です。」

「よし、突撃だ！ムオジネルの飢狼どもをたたきだせ！」

「うおおおおおおおおお！」

『銀の流星軍』とオルミュッツ軍は疲労困憊だった。

ムオジネル軍は第七軍と第四軍に包囲網を築かせつつあった。

（（真綿でじわじわ首をしめられているようだな（わ））

赤い髪の弓使いの青年と青い髪の戦姫は疲労の色を隠せず同じことを考えていた。

二人とも必死にきもちを奮い立たせて戦っている。
青い髪の戦姫は、赤ひげの王弟との直接対決に今一歩のところで戦術的に事実上の敗北を強いられていた。しかし、今一歩のところで『銀の流星軍』とオルミュッツ軍自体はふみとどまっていた。
一方、赤ひげの王弟は、最後の仕上げとばかり、その赤ひげをいじくりながら
「敵の本隊は確かに善戦したが、それゆえ疲労のきわみにあるはずだ。そのまま包囲網を縮めよ。」
と伝えていたところだった。
両軍に北方から鬨の声が聞こえたのはそのときだった。
「「新手?」」
赤い髪の弓使いの青年と青い髪の戦姫は同じことをぼそっとつぶやく。
しかしそのつぶやきはささやかな安堵と喜色に変わっていく。
新手の掲げる軍旗はどうみてもムオジネルの金騎士ワルフラーンの兜ではなかった。いまにも旗からとびださんとする赤い馬である。
鉄の甲冑、長槍に長盾をもつ五千の騎士が、喚声をあげながら雪を蹴立て馬蹄をひびかせてムオジネル軍に襲いかかった。
「!!」
ムオジネル軍の包囲網は騎士団の突破力に敵せずあっというまに崩れ去った。
「?どういうこと??」
青い髪の戦姫の言葉にティグルは自軍が有利になったことだけは理解できたが、事態が正確に飲み込めず答えられない。
リュドミラもティグルの表情から隠し玉の予備兵力を投入したわけではないことは理解できたが、次のエミールの叫びでそれが確信に変わった。
「ヴォルン伯爵、ヴォルン伯爵はいずこにおわすか。」
「ここよ。」
リュドミラが叫んで、高々とラヴィアスを振り上げる。ラヴィアスからはなたれた冷気は、空中の水蒸気を霧に変えて微細な霧の粒がき

らきらと光る。
それで我に返ったムオジネル兵がいっせいにリュドミラに襲いかかる。
しかし、青い髪の戦姫の槍さばきと、赤い髪の青年の放つ矢に貫かれて次々に屍を積み重ねるだけだった。
ティグルとリュドミラのいる位置に騎士団が突撃をかける。すさまじいばかりの機動力と突破力によってムオジネル兵の包囲は蹴散らされ、二人の周囲から一掃されてしまった。
敗走するムオジネル兵を騎士団は追撃する。
そして騎士団の鉄色の甲冑の群れから三人の騎士がティグルへ向かって馬を進めてくる。
ティグルより十歳ほど年長であろう褐色の髪の騎士が息をはずませながら一礼する。
「エミールと申します。マスハス＝ローダント伯爵からお話をうかがい、ペルシュ騎士団一千五百を率いて駆けつけた次第です。どうかあなたの指揮下で戦うことをお許し願いたい。」
エミールの隣に馬を並べた剣を持った黒髪の騎士が進み出る。エミールよりも体格がよく、声は太く、顔は厳つい印象を与える。
「戦場にて馬上で失礼する。ユーグ＝オージェ子爵の要請を受け、リュテス騎士団のシェイエ以下一千五百参上仕った。ただいまより貴殿の指揮下にはいる。」
「カルヴァドス騎士団のオーギュストと申します。二千の騎士とともにティグルヴルムド卿にご助力いたします。」
最後に名乗ったひげをたくわえた壮年の騎士は、穏やかで親しげな笑みをうかべている。彼の顔については、ティグルは、見覚えがあった。彼がまだ幼い頃父に仕えていた騎士だった。
「オ、オーギュスト、本当にオーギュストなのか？」
「覚えていてくださいましたか、ティグル様」
「忘れるわけないじゃないか。元気そうでなによりだ。」
「これまでは、国王陛下にお使えする騎士という立場ゆえご助力かなわず申し訳ありませんでした。歯がゆい思いをしていましたところ、

ナヴァール騎士団のロラン殿とオリビエ殿から手紙であなたのことをうかがったのです。」
「ロラン？」
　オーギュストは軽くうなづく。
「あなたがブリューヌのため、民のために戦う時は、その下に馳せ参じてほしいと。そしてこのたびマスハス様からお話を伺い、いまこそと部下を率いて参った次第です。ペルシュとリュテスの騎士団も同様です。」
「ありがとう・・・・ オーギュスト。」
「テイグル様、ご立派になられましたな。ウルス様のように。」
　ティグルは感極まって答えられない。前髪をかくふりをして目をこする。
　騎士団の指揮官たちは互いに軽くうなづきあう。
「では、早速きやつらをけちらしてまいります。」
「皆の武運を祈る。ありがとう。」
　騎士団の指揮官たちは今度はティグルに対してうなづくと、はいやつ、と馬に鞭をくれて走り去った。
「お話は終わった？」
　青い髪の戦姫が馬を寄せてきた。赤い髪の青年は彼女のほうに満面の笑顔をたたえて振り向き、おおきくうなずく。
　リュドミラもうれしさと安堵と大事業を終えたときのような最高の部類に入る笑顔を青年に向ける。
「おかげでひと息つくことができたわ。あなたはどう？」
「いや・・・・。まだ弓は引ける。それに助っ人ばかりに任せているんじゃ格好がつかないからな。もう少しがんばってみるよ。」
「そう^^。疲れてるんだからはりきりすぎてかえって醜態をさらさないようにね。」
　青い髪の戦姫と赤い髪の青年貴族は馬を並べる。赤い髪の青年は弓に矢をつがえる。戦姫たる少女は槍を構えなおした。二人の全身には、いたるところに血と雪と泥がしぶきのようにかかり、汗まみれで、その服も腕も顔もよごれまくっている。しかし二人ともその瞳に

は、なすべきことに向かって前進する者のみがもつ輝きに満ちていた。
「騎士団だと？ほう、騎士団か・・・。」
赤ひげの王弟は、あと一歩で完勝をつかもうとした手が払いのけられたのを悟って、怒りを含んだうめきを発するものの、一瞬で冷静な戦略家にもどる。
「なるほど。しかし、しょせん五千はあくまでも五千でしかない。第七軍を後退させろ。それから第六軍に伝えろ。最初の敵の本隊を撃滅するのに専念しろと。」
「はっ。」
ムオジネル第七軍は、ほころびをつくろいつつ整然と後退する。
（みごとな後退ぶりだわ。敗走じゃなくて後退。騎士団のあれだけの突撃をうけてもあんなに整然と後退させられるなんて・・・。）
リュドミラは感心してしまう。
クレイシュは、騎士団の突進によって乱れた軍の統制をまたたくまに整えてしまった。
「騎士団は化け物じみた機動力と突進力が身上だ。正面からの攻撃はすさまじいが、反面横が弱い。陣形を変えよ。第七軍と第四軍は騎士団の横腹をつくのだ。」
ムオジネルの第四軍と第七軍は陣形を変え、横から弓矢を一斉に放ち、動揺しかけたところを「うおおおおおおお！」
と鬨の声を上げて騎士団の横腹に槍によるすさまじい一斉攻撃をしかけた。
「敵の本隊はもうすでに疲労困憊のはずだ。騎士団の参戦で一時的に活力を取り戻しているにすぎない。まとめてすりつぶしてくれるわ。」
騎士たちは槍にひっかけられて馬を横転させたり、馬上から引き摺り下ろされて甲冑のつき間を槍に串刺しにされ、馬の悲しげないなき、グサリ、グサリと肉体を貫く鈍い音、そして、騎士たちのうめき声と悲鳴と鮮血がとびちる。甲冑が重いためにようやく立ち上がろうとしたところを数人がかりでたたきのめす。

テイグルもリュドミラも疲労を隠せない。兵士たちも第六軍とようやく戦っているがムオジネル軍のほうが疲労が少なく、じわじわとムオジネル軍の優勢がしだいに明らかになってくる。
（なんてやつだ。）
数だけではない。ナヴァール騎士団やテナルディエ公、ガヌロン公の軍とは違った強さをテイグルは感じ、舌をまかざるをえない。「高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対処」することは言うは易いが行うのは非常に困難であり、机上の兵法を論じるにすぎない者や凡庸な指揮官が主張したところで、その結果がいきあたりばったりと同義というそしりを免れないが、クレイシュの場合はそれをまさしく理想的な形で行っている。
後に、テナルディエの副将スティードとガヌロンの副将グレアストがオルメア会戦のクレイシュの戦いぶりについて知ったときにそれぞれ異なった感想をいだいた
という。
両者ともこの王弟には勝てないだろう、という感想を抱いたところまでは同じだったが、前者は、後の憂いを断つためにそれを撃退したティグルヴルムド＝ヴォルンは殺さねばならないということを決意し、後者は陰謀については自分のほうが上だと考えた。後者については、客観的に見て「陰湿」という形容詞が抜けていたが。
（ここまで来て負けるのか・・・。）
とティグルが思い始めた矢先、再び北西方向から鬨の声が聞こえる。
それは、紅馬旗をひるがえした小貴族の連合軍だった。先頭には、灰色のひげをたくわえた初老の貴族と文官風の好々爺然とした貴族がいる。
「野蛮な侵略者を叩きだせ。民と大地を守るのだ！」
「ヴォルン伯爵に続けえ！」
「うおおおおおおおおおお！」
歩兵と騎兵合わせて三千の部隊がティグルたちを包囲している第六軍の背後をつき、第六軍は陣形をみだして混乱する。

「何?北西から敵の新手だと?」
稀代の名将であるクレイシュもさすがにこれには驚かざるを得ない。
頭をフル回転させ戦術をねる。いくつもの脳内シュミレーションを行い、打ち破る見込みをたてる。
(できなくはない・・・ できなくはないが・・・。 しかし、どういうことだ?偵察隊が見落としたのか・・・ いやそんなことはない。今回も間違いなく働いている。運が悪いということか・・・。)
クレイシュは得体の知れない気味悪さを感じていた。
(しかし、こいつらは見方によってはテナルディエやガヌロン以上にやっかいだ・・・。
敵は六千弱だったはずだ。それが倍以上になっている。しかも問題はこれで最後なのかということだ・・・。)
(テナルディエやガヌロンを最初につぶしたかったな。こいつらに打ち勝ってなおかつテナルディエやガヌロンと戦わなければならない・・・。 それにしてもティグルヴルムド=ヴォルンだったか、長たらしい名前だ、ティグルとか名前を縮めればよかろうに・・・・。)
赤ひげの王弟は、このとき戦姫リュドミラだけでなくアルサスの小領主ティグルヴルムド=ヴォルンを明確に好敵手として意識し始める。そして、同時にこのままブリューヌ国内にとどまることにメリットがあるか真剣に考え始めた。
(時間をかければかけるほど義勇兵になやまされるだろう。少しばかり知恵の働く将がいれば、退路を断たれるかもしれない。ブリューヌ南部の豊かな港町、肥沃な土地、多数の奴隷、そしてそれをおさえているネメタクム。それをとれなければ何の意味もない。)
クレイシュは渋い表情になる。彼の側近や部下たちは、固唾を呑んで上官の命令を待った。
「・・・ 全軍後退だな。」
赤ひげの王弟は、ぼそりとしかしはっきりとした声で命ずる。
「しかし、ただでは後退せぬ。わざと隙を見せてやれ。」
渋い顔にわずかばかりのいたずらっぽい笑みをうかべて付け加え

る。
　ムオジネル軍はわざとらしく隙を見せながら後退する。
「敵が後退するわ。」
「そうだな・・・。」
　青い髪の戦姫は、ムオジネル軍がわざとらしく隙をつくっているがいつでも逆撃できる体勢にあることを看破して、赤い髪の青年にたずねる。
「敵の意図はわかる？」
「わかるけど・・・　正直言って気力がついていかないからちょうどいい。」
「それもそうね。」
　青い髪の戦姫は苦笑する。
「マスハス卿、追撃のチャンスでは？」
　とある小貴族の質問に老練な伯爵はこう答えて制した
「いや。あれは陣形の乱れを故意にみせつけてこちらの攻撃をさそっているのだ。敵は逆撃できるようういつでも準備している。テナルディエやガヌロンよりも恐ろしい敵だと考えて間違いない。」
「つまらんな。勇敢さと無謀さを履き違えて突進してくる者はいないのか。」
　クレイシュは遊び相手を捕まえられなかった子どものようにすねた表情になる。
「丘を包囲していた第一軍から第三軍に伝えよ。今回はこれで引き上げる。隊列をととのえ合流せよと。」
「はっ。」
「それから被害報告をせよ。」
「第五軍は壊滅、第四軍と第七軍は騎士団の攻撃、第六軍は最後の貴族連合軍の攻撃で合わせて六千人強の戦死者がでています。」
（戦死者が先遣隊と本隊あわせて一万一千・・・　本隊に加わらなかった兵を加えると三割以上を失ったか・・・。思ったより多いな。）
「まだ、三万四千の兵がいる。目の前の敵の三倍近くはいる。部隊の長を集めよ。」

「はっ。」
第一軍から第七軍の将と部隊長がクレイシュの前に並ぶ。
「わしは、海戦の報告を待つことにする。ここに陣営を築く。念のために陣営の周囲に堀と柵をめぐらせろ。それから負傷者の手当てと、兵に休暇を与えるのだ。偵察隊だけは敵の攻撃の警戒と情報収集だ。」
「はっ。」
ムオジネル艦隊とブリューヌのテナルディエが盟主となっているメデイト海沿岸の港町の連合艦隊との海戦の帰趨がさだまりつつあった。もし負けたら補給が完全に絶たれることとなり、占領政策もままならず、つぎつぎと現れる義勇兵になやまされることになる。
(港町は情報がはやい。勝てれば問題ないが、わしの予想があたったら退却しかないな。)
クレイシュは、海戦で敗れた場合にどうするか思索をめぐらせていた。

第11話　レパティウムの海戦前編

「どうだ、ムオジネル艦隊は、六百隻で向かってくるが・・・。」
　テナルディエは息子のような甥にたずねる。
「伯父上、王弟クレイシュとムオジネル王カワードは軍議で論争になったのはご存知ですか?。」
「その話は小耳にははさんだが・・・。」
「これからは接近して衝角を突き合わせたり、白兵戦で海戦をする時代じゃありません。船を沈めれば勝ちですから。」
「なんだと?どうするというのだ?」
「ブリューヌ人は弓を軽蔑してますよね。」
「そうだ。あんなものは臆病者の武器だ。」
「ただし、弓には何物にも変えがたい長所があります。」
「なにをばかな。そんなものあるはずがない。」
(困った人だ。戦姫の剣の魔力があったとはいえ息子を弓でうしなっているというのに・・・・。)
　ドン・ファンは、少し考えて伯父に話を続ける。
「弓は遠くから敵を攻撃できるという利点があります。弓以外に遠くから敵を攻撃する方法があれば船を沈められるということです。」
　テナルディエは、ふん、と鼻を鳴らし笑みを浮かべて黙る。
　甥の有能さは認めている悪いことにはならないだろうという無言の承諾だった。
　ドン・ファンが去ってから、テナルディエは、最も信用している副官のスティードに話しかける。
「どう思う?」
「甥っ子さんは優秀ですよ。」
「そんなことを心配しているのではない。」
「なるほど。指揮官としては優秀だが、政治的には立ち回れない方かもしれませんな。」
「わかっていたのだろう?」
「リグリアのジョナサンドレア・ドーリアをつけておられたのに加え

て甥っ子さんの副官にレグゾス卿をつけました。」
「そうだ。勝ちすぎず負けすぎずだ。ムオジネルには、この場に及んでもわれわれと同盟を結ぼうと言ってこないアルサスの赤毛の臆病者と青い髪の小娘をすりつぶしてもらわねばならん。それから十分疲弊してから退却してもらわねばならないからな。」
　もちろんテナルデイエはティグルが同盟を求めてきた場合は先鋒にたててムオジネルにすりつぶさせるつもりである。
（オルミュッツの小娘も死んでもらえば新しい戦姫に代わるだろう。オルミュッツの主がルリエ家でなければいけない理由はないのだからな。）
　一方、そんなことはつゆも知らないドン・ファン・テナルデイエは、勝つことばかり考えている。ヒタリア半島の東部の港町ヴェネタと西部の港町リグリアの協力をとりつけるのに成功する。この二つの港町は、双方ともムオジネルの海賊になやまされており、十年前のバラベザ海戦でも敗れている。しかし、双方が協力しようとしても艦隊総指揮官をヴェネタが担うのかリグリアが担うのかで争うのでなかなかまとまらない。そこへ、ドン・ファンの提案があったのだ。いっしょにムオジネルを撃退しないかと。公平中立な調停者として神殿のコロノス卿も来てくれているから不公平なことにはならないという念押しまであった。双方の町にとっては、テナルデイエの艦隊が加わる上にとにかく相手の下風にたたずにすむ、ということで同意したのだった。
　ヴェネタ艦隊の指揮官はアゴスティン・バルバリーグ、リグリア艦隊は、ジョナサンドレア・ドーリアである。
　テナルデイエ、ヴェネタ、リグリアの連合艦隊は、シラクサ島のメッシナに集結することとなった。メッシナ港にドン・ファン・テナルデイエが着くと船着場で歓声がわきおこった。
「ドン・ファン！」「ドン・ファン！」
　ドン・ファン・テナルディエは、感じのよい笑みをうかべて手を上げてその歓声に答える。
　テナルデイエ一族はメデイト海沿岸の港町の守護者であり、しかも

ドン・ファンは、容姿端麗な貴公子でありつつも海賊退治などで功績をあげている。容姿も実績もある若き提督は、人気も充分であった。バルバリーグもドーリアもその青年の存在感を改めて認めざる得なかった。

第一回目の作戦会議がドン・ファンの旗艦で開かれる。

「今回の海戦に参加した船の数は？」

「ヴェネタ艦隊はガレオン百二十隻です。」

「ブリューヌは、二百五十隻をかぞえますがリグリア艦隊はどのくらいですか？」

「百二十隻です。」

その後、乗員数、大砲の数など陣営の確認だった。

二回目の作戦会議が行われる。偵察船についてだった。

「リグリアの船をつかっていただきたい。」とドーリアが提案する

「性能ではヴェネタ船だって負けてはいない。リグリア船でなければ行けない理由は？」

バルバリーグが反論する。ドン・ファンはらちがあかないとおもいつつも、この競争心をうまく利用してやろうと考える。それぞれが得意な航路で偵察をすればより確実な情報が得られるだろう。

「では、両方使いましょう。リグリアの皆さんが得意な航路はどのあたりですか？」

ドーリアは、ヒタリア半島を越えて、エステムボルまで至る航路を示す。

「ヴェネタの皆さんは？」

問われたバルバリーグは、クリート島やサイプラ島の航路を指し示す。

「ムオジネルの艦隊は、このあたりを進んでくると思われるのでリグリアさんははここ、ヴェネタさんはここを偵察してください。それからもし敵をそれぞれの知っている航路で発見した場合、得意な航路のほうの港町の司令官を副将に任じるのであらかじめ承知しておいてください。」

ドーリアもバリバリーグも地の利を利用して戦うのが合理的であ

るのは理解できる。
「わかった。」
と返事をする。
ムオジネル艦隊の総司令であるメジンザルド・アリーは、海賊ウグリル・ベクに、ヴェネタの港や基地のあるクリート島、コル島を襲わせ、焼き払う。
この報告が、メッシナにいる連合艦隊に伝えられる。怪我の功名で、ヴェネタ船がムオジネル艦隊の動きを把握することができる。
「ムオジネル艦隊は、コル島からレパティウムに向かっているようです。」
「ムオジネル艦隊は五百隻です。ただし、火器については、カレブリナ砲で、こちらの15チェートカノネ砲や20チェートカノネ砲に射程でも破壊力でも劣ります。」
「予想通りですね。大ガレオン同士の旧式の白兵戦にこだわっている。また元海賊の白兵突撃力を生かすならそのほうが有利ですから。」
それから艦隊編成と布陣についての話し合いがなされる。本隊は、ドン・ファン・テナルデイエ、左翼はバルバリーグ率いるヴェネタ艦隊、右翼はドーリア率いるリグリア艦隊が占めることになった。本隊の旗は明るい青、左翼は黄色、右翼は緑色、そして予備兵力としての艦隊は白となった。この艦隊は激戦となった場合に救援に赴かせる艦隊であった。テナルデイエ公の与党であって、ドン・ファンも信頼している貴族サンタ・クロス侯が率いることになった。
編成がおおむね決まったところでドーリアが口を挟む。
「ところで。」
「ドーリア殿、いかがなされました?」
ドン・ファンが尋ねる。
「ヴェネタ船の戦闘員は、船一隻につき八十人ですか?不足しているのでは?ほかの船は二百人はいますぞ。これでどうやってムオジネルと戦うのですか?」
「ヴェネタはあなたがたと違って、こぎ手も自由民だ。いつでも戦闘

要員に転化できる。」
バルバリーグは反問するものの説得力に欠けている印象だった。
「リグリア船にいるザクスタン兵とわが指揮下のブリューヌ兵を一部配分して乗せるのはいかがですか？」
ドン・ファンは、妥協案を示す。ヴェネタ船にさすがにリグリア兵は乗せられないだろうからリグリア船に雇われているザクスタン兵を乗せようと提案したのである。
ヴェネタはこの案をのんだ。ドーリアはぶつぶつ言っている。
「この場に及んでも何か言いたいことがあるのか？」
「バルバリーグ殿、発言は自由ですが、三人の指揮官のうち二人以上が同意すればあとの一人は従うという条件に同意されているはずです。」
コロノスが代わりに答える。
「それならば、ドーリアに決定権はない。わしは一刻も早く出撃したい。」
「わたしも早めの出撃に賛成です。」
コロノスも同意する。
中央に座っている総指揮官たるドン・ファンに皆の視線が向く。
「出撃する。」
ドン・ファンが宣言するとその場の空気がしまる。
（いよいよ出撃か・・・）
ドーリアとレクゾスは、冷ややかな目線になる。しかし、ドン・ファンは、
（ムオジネルに完勝してブリューヌと港町を守る。）
という決心といかに指揮すべきかに意識が向けられていた。
一方、ブリューヌの港町を襲って、レパティウムに迫りつつあるムオジネル艦隊で意見の対立が起こっていた。総司令官メジンザルド・アリーと海賊出身のウグリル・ベクである。
「敵は五百隻に満たないということだ。我々のほうが優勢だ。十年前は貧弱な艦隊だったが、今度こそ一気にブリューヌ、ヴェネタ、リグリアをたたきのめす。」

「船の数の問題ではありません。いかに船の大きさが大きくても、十年前はクレイシュ様が快速な船と砲撃で敵を翻弄できたのです。今度は敵が大砲を充実させています。ヴェネタのバルバリーグが海戦が得意で、総指揮官のドン・ファンは、優秀な船乗りだけでなく、進取の気風があり、なにを仕掛けてくるかわかりません。」
クレイシュの名前をきいてアリーは嫉妬心をもたげた。そして海賊出のウグリル・ベクを軽蔑のまなざしで見る。
「クレイシュ様にはテナルデイエやザクスタンとの取引があったのではないか？貴殿もザクスタンのヒタリア半島南部の出身と聞いているが。」
ウグリル・ベクは
「後者はその通りですが、前者については、そんなことはありません。いままでのわたしの働きを見れば明らかでしょう。」
しかし、ムオジネル艦隊は、カワード王じきじきに組織した艦隊であり、海賊にたよらない、自分たちこそ正規の艦隊だという意識が強く、ウグリル・ベクの意見は軽視する雰囲気になっている。
（こんなに変わってしまったのか・・・。）
ウグリル・ベクは失望する。十年前のザクスタンの敗北から何も学ばず全く同じ艦隊をつくるとは・・・
「ブリューヌ、ヴェネタ、リグリアの艦隊は寄せ集めにすぎん。ヴェネタ、リグリアの仲の悪さは折り紙つきだ。テナルデイエの若造ごときにまとめられるとは思えん。どうどうと打ち破るべし。」
ムオジネルの陣容は、中央にアリー率いる本隊、右翼はメフメト・シャールフ、左翼はウグリル・ベクである。
レパティウムの湾の出口で敵を待ち構えるために、ブリューヌと諸都市の連合艦隊は弓なりの陣形をとろうとする。ただし逆風で左翼、本隊、右翼と並ぶだけだが手間がかかっていた。ムオジネル艦隊は六百隻の大所帯であり順風にもかかわらず狭いパトラ水道をぬけるのに時間がかかっていた。
「ムオジネル艦隊を発見しました。」
連合艦隊から見て、視界へ入ってくる敵軍船の数がだんだん増加し

ていく。
雲ひとつない快晴であるが強い東風がふきつける。
湾の出口で直接ムオジネル艦隊とぶつかることになるのは、ドーリア率いる右翼のリグリア艦隊だった。ムオジネル軍は、ウグリル・ベク率いる左翼艦隊である。
「面舵いっぱい。敵を右から攻撃する。」
ドーリアは、自らの旗艦を右に動かし、彼の艦隊もそれについていく。
一方、左翼を固めるバルバリーグの艦隊でも、右端の船の指揮官クイニーから
「敵艦隊発見!」
の報がもたらされる。バルバリーグは手を振ってそれに答えた。
正午になって風がやみ、ムオジネル艦隊の帆が垂れ下がる。
「わたしは、船に乗って皆を叱咤し、直接指揮をとります。」
といって二つの三角帆を連ねた小型の快速船であるレアル号に乗る。快速だけでなく、ちいさいので敵にもめだたない・・・ はずだった。

第１２話　レパティウムの海戦後編

「敵艦隊まで三百アルシンです。有効射程距離に入りました。」
「よし。砲撃用意。」
「準備完了！」
「発射！」
　連合艦隊の口径１５チェートのカノネ（アスヴァール語で「カノン」）砲がいっせいに火を噴く。
　ドーン、ドーン、ドーンと轟音が響き渡り、ムオジネル船に命中し、火を吹く船、船腹に命中して傾き始める船が出始める。
　ムオジネル艦隊は傾きながらもしゃむにに突っ込んでくる。１５チェートカノネ砲を浴びながらも、沈みかかった船を盾にしてつっこむ。
　連合艦隊右翼のドーリアとムオジネル左翼のウグリル・ベク、連合艦隊左翼のバルバリーグとムオジネル右翼のメフメト・シャールフの艦隊も同じような状態であった。
「面舵いっぱい。敵の右側にまわれ。」
　バルバリーグ艦隊の右を固める部将のクイニーが命じ、彼が指揮する船団が右側に回り、バルバリーグ艦隊は、メフメト・シャールフの艦隊を半包囲するのに成功する。
　１５チェートカノネ砲に加えて、２０チェートカノネ砲が火を噴く。
　グォーン、グォーン、グォーンと激しい轟音が響く。
　ムオジネル艦隊からは、弓矢が放たれる。まだカレブリナ砲の射程には至っていないため、弓矢が射かけられるが２００アルシンの距離であり、ようやく船の上にとどくといったありさまだった。
　ムオジネル艦隊右翼のメフメト・シャールフの艦隊は次第に沈められてやせほそっていく。
　しかし、一方、ドーリアとウグリル・ベクの艦隊戦は様相が異なっていた。有効な砲撃が行われないように巧みな艦隊運動で南西の方向へ針路をとってみせる。ドーリアの連合軍右翼艦隊と本隊を引き

離したウグリル・ベクは、そのまま連合艦隊本隊を背後から襲うよう北西に針路をとる。
　それに気が付いたのはドーリア艦隊の右翼であるヴェネタの船団を率いるベネデイット・ソレントである。ウグリル・ベクの艦隊には、十年前にザクスタンを撃ち破ったクレイシュの育てた精鋭艦隊の生き残りの百隻が含まれている。カノネ砲同士の砲撃が行われ、ヴェネタの船団はムオジネル艦隊の接舷を許してしまう。接舷されたヴェネタ艦隊へムオジネル軍は鬨の声をあげ白兵突撃を敢行する。
「うおおおおおおお！」
　押し寄せる戦いなれた海賊出身者であるムオジネル兵にもともと商人やただの船乗りであるヴェネタ兵たちはかなわない。打ち殺され、斬り殺されて船内は血に染まり遺体がころがる。
「もはやこれまでか・・・。」
　ソレントはつぶやき、漕ぎ手に命じる。
「もうこの船はだめだ。船を燃やすことにする。海に飛び込め。ほかの船にすくってもらえ。」
　ソレントは船内にある火薬に火をつけた。
　ゴオオオオーン
　と爆発音が響く。
　接舷しているムオジネル船を道連れにして自爆したのだった。
　しかし、ウグリル・ベクの艦隊に致命的な打撃を与えるには至らなかった。
「ぬけたぞ。敵本隊だ。」
　ウグリル・ベクのムオジネル艦隊左翼はドン・ファン率いる連合艦隊本隊に襲いかかろうとしていた。
　さて、少し時間をさかのぼる。ドン・ファンの本隊で各艦は砲撃を行っていた。
「第一列、発射！」
　15チェートカノネ砲が火を噴き、カレブリナ砲の倍の射程からムオジネル艦隊を襲う。
　ムオジネル本隊の主将であるアリーは叱咤する。

「確かに敵は射程外から攻撃できるようだがそれだけのことだ。装填時間がかかるはずだ。白兵突撃すればこっちのものだ。進め、進め！」

敵は一隻当たり５０門の砲門を備えているが一分間に撃てるのは６から７発である。

接近して突撃できるように思われた。

しかし、ドン・ファンは巧みな船列配置を行っていた。つまり、３列交互にならべて、味方の船に当たらないように配列を行い、船と船の隙間から順次間断なく斉射させる。つまり長篠の戦いで織田の鉄砲隊が時間差による射撃を行ったのに似た理屈である。しかも、接近すればするほど、命中率がよくなる道理である。ムオジネル艦隊の船は、足軽鉄砲隊に撃たれる武田の騎兵だった。したたかに撃ち抜かれて煙をあげて次々に沈没していく。

さすがのアリーも事態の深刻さに気付く。

「散開して敵の右と左にまわりこめ。」

と命じ、ムオジネル艦隊本隊は左右両翼をひろげ散開しようとする。

しかし、今度は、連合艦隊の船腹に付けられたカロネード砲が火を噴く。

ズドーン、ズドーン、ズドーン

ムオジネル艦隊は、散開しつつ連合艦隊に肉薄するものの５０アルシンまで接近していた船はあっというまに沈んだ。

そのため、１５０アルシンの距離でカレブリナ砲を撃つもののあまり効果はないため、弓を射かけるしかない。とにかく敵である連合艦隊の船員を射殺さないことにはいいように砲撃されてしまうからだ。しかし、３００アルシンで当たる砲弾が１５０アルシンでは撃ってくださいといわんばかりである。そうこうするうちに、轟音がアリーの足もとで響き、船が傾く。

「アリー様・・・。」

「うぬう。」

砲撃が繰り返され、さらに矢が射かけられる。ドン・ファンは伯父

とは異なり弓を軽視しなかった。海戦において衝角攻撃と白兵戦を行わないなら可能なのは遠距離攻撃であり、砲撃でなければ弓である。
「ぐつ・・・。」
数本がアリーに命中する。
「アリー様!」
部下がアリーにかけよる。
旗艦に砲弾が命中し、傾いた様子がほかのムオジネル船の漕ぎ手の眼に映る。
しかもムオジネル船は気が付いたら7割が沈んでいる。もはや敗北という意識がひろがり、奴隷として漕ぎ手に使われていたブリューヌ人、ジスタート人、ザクスタン人は反乱を起こす。ムオジネル船のなかで凄惨な殺し合いの末、船が次々にのっとられ、白旗が掲げられる。
もはやムオジネル艦隊本隊は戦力として機能しなくなっていた。
ドン・ファンは、本隊同士の戦いは、勝負がついたことを悟り、
「反転右９０度!ドーリア殿をお助けしろ!」
と命じ、ウグリル・ベクの艦隊に向けて船列の向きを変える。
そのときだった。ムオジネル艦隊の弓兵が無造作にレアル号に向かって放った矢のうち一本がレアル号で指揮をとっていたドン・ファンの右肩から胸を貫通したのだ。
「うぐっ・・・。」
「閣下、ドン・ファン様!」
近くにいた部下たちがかけより、ドン・ファンは医務室にはこばれた。
「!!」
医務長は致命傷であることを悟ったが矢を慎重に抜いて、看護の者に手当をさせる。
「閣下のお加減は?」
「よいとは言えません。お命にかかわると言ったほうがいいでしょう。」

「なんとかならないのか?」
医務長は静かに首を横に振る。
幕僚たちは身体をわなわなとふるわせるもののどうにもならなかった。
ドン・ファンはしばらく意識が混濁していたが、一時間後には
「戦況はどうですか?」
とたずねるほどまで意識自体が一時的に回復した。
彼の強力な意志が意識をささえていた。
「閣下。上々です。敵をおいつめています。」
「そうか。戦闘が終わったら投錨するよう伝えてくれ。天候が悪化するはずだ。」
「閣下が伝えたほうがよろしいのでは。」
「いや。もう私は死ぬ。医務長はわかっておられるのだろう。」
ドン・ファンは横になって眼を閉じ、喘ぐような苦しそうな呼吸を繰り返したていた。
ドン・ファンの最後のつぶやきは
「戦神トリグラフよ、風の神エリスよ、わたしは義務を果たしました。」
とも「神よ、祖国ブリューヌよ。」
とも伝えられる。ブリューヌの生んだ若き天才提督はやがて息をひきとった。
そしてドン・ファンの船団の戦術と技術は、ヴェネタ艦隊と彼の個人的な友人で技師であったアスヴァール人に受け継がれ、後者が本国へ持ち帰って後に強力な海軍をつくる基礎を築くことになる。テナルデイエ公自身もメルヴィル平原の戦いで戦死することになるため、その戦術も技術もブリューヌには残らないこととなった。
さて包囲を受けることとなったムオジネルの左翼艦隊では・・・
「ウグリル・ベク様、先ほど突破した敵が・・・。」
ドーリア艦隊がウグリル・ベクを猛追する。
また別の斥候が告げる。
「ウグリル・ベク様、敵本隊が・・・・・。」
連合艦隊の本隊とサンタ・クロス侯の予備艦隊が前方から襲いか

かってくる。
　ウグリル・ベクは、自分たちの船団が挟み撃ちにされようとしていることを悟ってもはや逃げるしかないと決断する。
「紡錘陣形だ。敵を突破する。サバ（アスヴァール語で「カノン」）砲と弓を撃って撃って撃ちまくれ！」
　ウグリル・ベクは一点集中砲火と弓を放った。
　砲撃の轟音が響き、煙が立ちこめ、両軍の間を弓矢の雨が降り注ぐ。
　連合艦隊の船列に穴を開けることに成功し、ウグリル・ベクの艦隊は甚大な被害を出しながらも、突進した。
「ウグリル・ベク様、敵艦隊の包囲網から完全に脱出しました。」
「そうか・・・。」ウグリル・ベクは、敵を突破し、逃げ切ったとことで安堵の息をついたが、周囲を見回すと自分の旗艦を含め三隻しか残っていないことに気が付いた。
　ウグリル・ベクは苦笑するしかなかった。
　信頼している副官に話しかける。
「これは海賊稼業にもどるしかなさそうだな。」
「そうですな。この状態で本国に戻ったところで・・・ 取り巻きどもが好き勝手なことを言って敗戦の責任を閣下に負わせるでしょう。クレイシュ様からの連絡を待ちましょう。」
「そうだな。」
　ウグリル・ベクは海賊仲間と合流するべくいずこかへ去っていった。
　レパティウム海戦は、ミラの予想通り、ドン・ファン・テナルディエが率いるブリューヌと港町の連合艦隊が結果としてムオジネル艦隊を砲撃によって撃ち破ったが、ムオジネル艦隊が思いのほか善戦したことが、両軍に惨々たる人的被害をもたらした。
　ブリューヌと諸都市の連合艦隊は、総指揮官のドン・ファンのほかヴェネタの司令官バルバリーグを戦死させた。彼の旗艦が赤く目立つ船であったことも起因していたといわれる。海戦の終わる間際には副将のヴァルニが指揮をとっていた。ムオジネル艦隊も主将のメジンザルド・アリー、メフメト・シャールフを戦死させた。そして作

戦方針に反対したにもかかわらず生き残ってしまったウグリル・ベクは、クレイシュの口添えがなければ、敗戦の責任を取らされて極刑にされるのが明白であったので逃げ去ってしまい事実上の全滅であった。こうしてレパティウムの海戦は集結した。

さて、テナルデイエ公爵のところへ斥候が戦況報告に訪れた。

「われわれはムオジネル艦隊に勝ちました。しかし……。」

「しかし、なんだ?」

精悍な顔つきの公爵は斥候に逆接の接続詞のあとの言葉をうながす。

「ドン・ファン・デ・アウストリア卿は、敵の弓矢で右肩から胸を射られて亡くなりました。」

テナルデイエ公爵は一瞬押し黙ったが

「そうか……。」

と重々しくつぶやいた。

「ザイアンに続いてドン・ファンも敵の弓で命を落とすとはな……。」

テナルデイエ公爵は、ある人物のことを思い出し、こみ上げてくる怒りや憎しみをつのらせた。それは、自分に頭を下げ、ひざまづいて同盟を請わなかった弓使いでアルサスの領主であった赤毛の青年のことであった。

「あのアルサスの坊やは始末せねばなりませんな。」

スティードがテナルデイエの想いを察したようにつぶやき、テナルデイエも重々しくわずかに頭を縦にうごかして同意した。

第13話　オルメア会戦集結その後

クレイシュがオルメア平原から引き返し陣営を築いて一晩明けた朝、本国から早馬の伝令が訪れる。
「そうか、通せ。」
「はっ。」
「報告します。海路ブリューヌの南岸攻略に向かった向かったわが艦隊はテナルデイエ公とリグリア、ヴェネタの艦隊に敗れました。」
「指揮官はテナルデイエ本人ではないだろう。有能な甥っ子がいたはずだが。」
「はい。ドン・ファン・デ・アウストリア卿ですが、わが軍の弓によって戦死しました。」
「そうか。」
クレイシュは含み笑いをする。
「なるほど。そしてこちらの損害は？」
「こちらは、総司令官のアリー様、シャールフ様が戦死。ウグリル・ベク様が行方不明です。艦隊は7割が沈没。」
「漕ぎ手が反乱を起こしてさらに2割が寝返ったと。」
「なぜ？それを？」
「それがあの艦隊の弱点ということだ。戦わずして砲撃で沈められるのに付き合わされるのではかなわないからな。降伏すれば生き残れるだろうし。」
クレイシュは表情をひきしめる。
「遺族には不自由させないように、それからウグリル・ベクは許して復帰させるよう進言しなければいかんな。」
クレイシュは天井をみてしばらく考えると
「さて、こっちだが・・・・　三万四千で目の前の敵を破り、テナルデイエ公も破って南部の港町を確保する。それを義勇兵が現れたり、補給線を脅かされながら本国の援軍が到着するまで耐え忍ぶってことだな。」
と独語し、さらに、はっはっはと幕舎のなかでとどろくような哄笑

を響かせた。
（戦死しつつも敵将を倒したということでアリー、シャールフをはじめとする遺族には弔慰金が支払われるだろう。ウグリル・ベクだが、提案が無視されたということで宮廷に同情論が起こるように工作しよう。海戦の敗戦の責任は私の進言を容れなかったことが敗因ということで自然に伝わるだろうから私一人の失敗ということにはなるまい。）
「撤退だ。全軍に撤退を命じよ。」
　それから思い出したように付け加えた。
「そうだ、ティグルヴルムド＝ヴォルンについて調べておけ。それから、せいぜい奴をはでに誉め讃えてやれ。黒騎士ロランを失おうと、彼に勝るとも劣らない英雄あり、ブリューヌの威風は健在なり、寡兵をもって神出鬼没に善戦し、その弓は兵の頭上を越えて正確に敵将を射たおすは我が国の古い伝承にある流星を射落とす英雄のようだと。『銀の流星軍』を名乗っているようだからただ誉めるだけでなく皮肉を効かせてやった。これで私の顔も立つ。」
「ははっ。」
（われわれが去れば、外患がなくなるから、やつを妬む勢力があらわれるだろう。テナルディエやガヌロンとかみ合って内側の混乱が深まってきたときが好機だ。）
　ムオジネル軍が後退してから数日後、『銀の流星軍』とオルミュッツ軍のもとにムオジネル軍から使者がやってきた。
「どうする、というか誰と誰で会うか？」
「わたしがいたほうがいいでしょう。ジスタートがあなたについていることを示せるし、オルミュッツがムオジネルににらみをきかせていることを示せるし。」
「そうだな。ありがとう。」
　テイグルはリュドミラに礼を言ってから老貴族のほうを向く。
「マスハス卿。」
「わかっておる。困難な交渉になれば経験がものをいうからな。ついていこう。」

「使者を通してくれ。」
「はっ。」
「私はムオジネル王国の王弟クレイシュ＝シャーヒーン＝バラミールのお言葉を伝えにまいりました。ヴォルン伯爵、貴君の寡兵をもっての勇戦、また騎士団、諸貴族を束ねる人望、そして民をまもらんとする気概に心から敬意を表する。弓を蔑視するブリューヌにおいて戦場を埋め尽くす兵たちの頭上を越えて目標を正確に射抜く鍛え上げられた貴君の弓の技量、まさしく称賛に値する。我が国の古き伝承にある「流星さえも射落とすもの」、まさしく『流星落者（シーヴァラーシュ）』の称号がふわしい・・・・。」
　使者は、さらに、寡兵をもって的確にわが軍を翻弄してカシムを倒し、本隊に対しては、果敢に戦ってわが軍を破り、撤退に追い込んだ手腕がすばらしい旨を、うんざりするほどの美辞麗句をならべたてて表現して、言い終わるや一礼して去っていった。
　使者が去るとマスハスがティグルの肩をたたく。
「わたしの斥候の報告だと敵の撤退がすみやか。わなではないわ。」
「リュドミラ殿の言う通りじゃ。」
「あなたの勝ちよ。ティグル。」
「ティグル、おぬしが民を守ったのじゃ。」
　マスハスが笑いかける。
「マスハス卿、申し訳ありませんがしばらく休ませてもらえますか。その間のことも・・・。」
「わかった。ゆっくり休め。」
　マスハスが幕舎をでていくと、ティグルの身体はぐらっと崩れ落ちる。
「ちょ・・・　な・・・。」
　いきなり寄りかかられた青い髪の少女は驚き、いっしょに倒れこむ。青い髪の少女は、いらつきながらティグルの肩をつかんで引きはがそうとするが、すぅ～すぅ～と心地よさそうな寝息が聞こえてきた。
　そのとき、青い髪の少女リュドミラの顔から怒りが消えた。くすん

だ赤い髪の青年の顔には細かな傷や凍傷のあと、そして目の周りのくまやかくしようがない疲労の色が見える。
「そういえば、あなたはずうっと戦ってきたのよね。」
　そうだ、自分がオルメア平原の入り口にかけつけるまですでに寡兵をもって二万の軍と戦っている。それから自分たちオルミュッツ軍がくわわったとはいえ四万を相手に戦ったのだ。そんなことが頭をよぎったとき、幕舎の外から兵の声がする。おそらくテイグルが倒れたときの物音をききつけたのだろう。
「リュドミラ様、どうかしましたか。」
「なんでもないわ。ちょっと荷物が崩れたの。」
　兵士は納得して去って行った。
　リュドミラは座った姿勢で後ろから倒れかかったテイグルを抱きしめる。
「あなたの意地、確かに見せてもらったわ。」
　青い髪の少女は赤い髪の青年の寝顔をのぞき込みながらつぶやいた。
（正直いろんな意味で打算はあったけど、あなたに協力してよかったわ。）
「あなたは、とても頑張ったわ。素敵だったわよ。テイグル。」
　とっさに「テイグル」と青年の愛称が口をついて出たことに、青い髪の少女は妙に恥ずかしい気分になった。ほおがなんとなくほてって赤くなり、胸のあたりが熱くなる。
（でも・・・ こういうのも悪くないかも・・・ テイグルの持っている竜具と引き合う黒い弓・・・ 戦姫と対等と言えなくもないし・・・・。）
　青い髪の少女は微笑みをうかべて赤い髪の青年の髪をなでる。
「おやすみなさい。テイグル。」
　もういちど青年の愛称をつぶやき、青い髪の少女は身体の力を抜いて青年のそばに倒れこむといっしか眠りの世界に落ちていった。
　さて、四半刻ほど過ぎたころ、ジェラールが幕舎を訪れる。
「ヴォルン伯爵・・・。」
　幕舎の中には絨毯の上に赤い髪の青年と青い髪の少女が抱き合う

ようにして眠っているのを見ると彼は何も見なかったような涼しい表情をつくって幕舎を出た。そして見張りの兵士に声をかける。
「ジェラール様、何か？」
「ヴォルン伯爵は連日の戦闘指揮の疲労でお休みになっておられる。明日の朝までは誰であろうと幕舎に入れないように。それからどうしても必要な場合はわたしも用があるからわたしを呼んでくれ。」
「わかりました。」
そしてどこか楽しげな足どりで自分の幕舎にもどっていった。
こうしてオルメア会戦は終結した。赤ひげ王弟と凍漣の雪姫の直接対決は、内容的には、後者の惜敗であったものの、戦術的にも戦略的にも、ムオジネル軍を撃退し、民を救出し、ブリューヌの地を守るという戦争目的を達成した意味で、『銀の流星軍』とオルミュッツ連合軍の明確な勝利であった。またこの勝利は、テイグルにとって戦略的にテナルデイエ公爵の勢力を弱体化させて自軍を強化でき、それを援助したリュドミラはテイグルの将来への「先行投資」に成功したという意味でも大きかったが、リュドミラ自身にとっては、テイグルが打算や政治的に有利にはこぶため以上の好ましい存在になったのが何よりも嬉しいと感じるまでになっていた。
一方、ムオジネルでは、海戦の敗戦について王の判断による部分が多かったこともあり、クレイシュが兵を喪って撤退したことについては、補給がないのに戦えないと不問にされたのみならず、海戦について先見の明があったとする擁護論が大勢を占めた。そしてそんな不利な状況から敵将をよくぞ倒したということで、海戦の戦死者は英雄とされ、遺族に対してふんだんに弔慰金が支払われた。ウグリル・ベクもクレイシュの口ぞえで復帰し、王も権威をうしなわずすべてまるくおさまった。
オルメアを戦った『銀の流星軍』、――三騎士団に小貴族の私兵、オルミュッツ軍を含めた――は、ペルシュ城砦に終結していたが、エレンの率いるライトメリッツ軍本隊がそこに加わった。王女レギンの身元を証明するために、途中テナルデイエ軍にモントーヴァンで敗れたガヌロン軍の兵を加えて、ガヌロン領ルテティアの旧都アルテシウムに

向かうが、それを阻止しようとテナルディエも二万四千の兵を向ける。両軍はアルテシウムの南東のビルクレーヌ平原で激突した。最初は、竜五頭を用いたテナルディエ軍が数の差をいかしてやや優勢に押していたが、竜が二人の戦姫、エレンとミラに退治され、オーギュストに「侮っている」という心のすきを巧みに利用されて、『銀の流星軍』の挟撃を受けて崩壊した。アルテシウムの聖窟宮（サングロエル）に仕掛けられたガヌロンの罠で、有能な副官スティードを喪ったテナルディエは、メルヴィルの野でテイグル、『銀の流星軍』に最後の戦いを挑む。テナルディエの副官ソーニエール侯爵が四槍の陣というテナルディエ軍必勝の陣形で優勢に戦いを進めるが、その陣形のくせとパターンをリムとマスハスに見破られてからは形勢が逆転した。最後にテナルディエとテイグルが一騎打ちを行い、テナルディエも敵の矢によって落命することになる。

レギンを総司令官とした『銀の流星軍』は、王都ニースに凱旋し、ガヌロンとテナルディエに盛られ続けてきた毒のために廃人のような状態であったブリューヌ王ファーロンがみまかると、レギンが王位に就いたが、若すぎるためか記録上「王女」と呼称されている。このときブリューヌとジスタートの間で四項目にわたる条約が結ばれ、デイナントの敗戦から長きに渡るブリューヌの内乱も集結した。

エピローグ前編　新たなる戦いの序曲（1）

はるか南方ジスタートとムオジネルの国境付近、雑草がまばらにしか生えていない荒野である。そこには、緋色の地と言おうか、くすんだ赤色の地と言おうか、その中央に角のついた兜と剣が描かれた大きな軍旗がひるがえっている。ムオジネルの軍神ワルフラーン表す旗だった。その指揮官の幕舎には、壮年の赤ひげの男があぐらをかいていた。彼の周囲にも多くの幕舎が連なり十万の兵がいる。

「するとアスヴァールの工作は完全に失敗したわけか？」

「はい。ジャーメインもエリオットも死亡。我々が潜り込ませた者たちも五人帰ってきたのみです。」

「五人もどってきたのだからよしとしよう。興味深い話をいろいろきけたわけだしな。それにしても、遠方の国に工作するのは面倒だな。状況の変化に指示が追い付かん。だからといって事前に複数の対応策をさずけてもそれを実行できる者がいないしな。」

「状況の変化に対応といえば、ティグルヴルムド＝ヴォルンでしたか、みごとでしたな。タラード＝グラムと組んでギネヴィア王女擁立にいつのまにか加わっている。まあ、アスヴァールからの帰路の海路で海に落ちて死んだとのことですが。」

「ダーマードよ。どうして死んだと言い切れる？」

赤ひげの王弟は、報告をしていた長身で精悍な兵士ににんまりと笑って問い返す。

「どうしてとおっしゃられても・・・・ 真夜中の海で船から落ちて・・・・半日かけても死体すらみつからなかったんですよ・・・ ？」

「工作の可能性があるだろう。」

ダーマードはわからない、といいたげに首をかしげる。

「死んだことにするのだ。あれほどの男を手元に置きたければ私ならそうする。」

「・・・・ ？」

「わからぬか。あの男をジスタートはブリューヌから預かったそうだが、死んだことにしてしまえば返さなくてよくなる。あては適当な偽

名と出生を創作して、屋敷と金と女をあてがって第二の人生を歩ませてやればいい。」
「そんなことしたら、ブリューヌとの仲が最悪になりませんか。」
「そんなもの、無能な将軍や貴族の首を二つか三つ送り付けてやればいい。」
　クレイシュは果樹園で腐った実を見つけたからと、もいで捨てるかのようにこともなげに言う。ダーマードの背を冷や汗が伝う。
（この方は気さくで一見兵に対し情け深く見えるが実は容赦のない方だ・・・・。）
「つまり、閣下はティグルヴルムド＝ヴォルンは生きているかもしれないと？」
「それを調べるのがお前の仕事だ。ダーマード。われわれはこれから撤退するがお前はジスタートにもぐりこみ、心当たりがあるという者にあったら根掘り葉掘り聞け。これといった男を見つけたら素性を徹底的にあらえ。」
「そこまでする価値のある男ですか？」
　クレイシュは身体全体でうなずく。
「お前を言っていたではないか。状況の変化に対応していたと。」
「かしこまりました。それでもし、本当に生きていることが確認できた場合は？」
「やってしまえ。お前も技量を競ってみたいのだろう？」
「アニエスの戦闘記録は暗唱できるくらい読みました。三百アルシンも矢を飛ばせる人間がいる。しかも混乱した戦場で。身震いする想いでした。」
「おかげでカシムを喪ったがな。」
　そのとき報告にはいってきた兵士がいた。
「クレイシュ様、ジスタートからの使者にございます。」
「ふむ。何度目かな。」
　クレイシュは鼻で笑い、
「通してやれ。」
　と伝える。

使者は膝をついて赤ひげの王弟をみつめて口を開くと、言葉を選びながら話し始める。
「ムオジネル王の弟君であられるクレイシュ閣下には、このたびはなにゆえに兵を動かしなさったか、おうかがいしたき仕儀にございます。」
「なに、ただの兵の訓練よ。それ以外の目的はない。貴国へ足を踏み入れるようなことはないので安心めされい。」
それでも使者は納得しがたいような顔をしている。
「もう何度同じ使者をジスタートは送ってくるのか。来なかったことにするために貴殿を斬ろうか？こちらは戦う気がないから貴殿の死体を送り返すことはしない。ただ来なかったと伝えるだけだ。それともこちらの返事を持って帰るのか？」
使者は自分が怠慢だったことにされるうえに殺されると聞き、一礼してようやくひきさがった。
「しかし・・・・本当に一戦もせず撤退するんですか？十万の兵をここまで率いてきて？」
「言っただろう。目的はすべて達成したと。この三十日間は大きな成果があった。南の国境の戦姫と領主たちの反応や、やつらの出した兵の概数とその配置、この荒野からアニエスに至る道と地形。アニエスの街道を通らずにブリューヌへ侵入できる道。時間はかかったがすべてつかんだぞ。わっはっは。」
クレイシュは眼光鋭く、楽しそうに哄笑を幕舎にひびかせる。
「帰ったら十万の兵では足りなかったと報告する。あと五万ほど兵を増やし、遅くとも三年以内、早ければ来年に十五万の兵で動く。狙いはもちろんブリューヌだ。」
「ジスタートも南部はかなり豊かだと聞いていますが・・・・。」
「すぐ近くにブリューヌという緑にあふれ、温暖な地があるのに狙わん手はないだろう。ダーマードよ。この報告書をみろ。国境付近の者どもは守りを固めているだけだった。十五万の兵を率いてきても同じだろう。それから、この三十日間でつかえそうな者もけっこうみつけた。戦闘ひとつない退屈な状況で、見事に兵を統率した者、偵察

ですぐれた成果を上げた者たちだ。帰国したら私の配下としてとりたてる。次の戦いが楽しみだ。」
ふふん、とばかり赤ひげの王弟は不敵な笑みをうかべた。
クレイシュの考えた通り工作ではなかったがたしかにティグルは生きていた。遭難のあと、記憶喪失となり、ウルスと名乗ってルヴーシュの公宮に仕えることになった。記憶が戻ってライトメリッツに無事帰還したティグルは、ジスタートの太陽祭に招かれる。
そこでエレンとともにあいさつ回りでミラの部屋を訪れる。
扉を軽くたたいて名乗る。
「はいりなさい。」
ティグルは、思わずその場に立ち尽くす。ミラの正装は美しく、ティッタをして「雪の妖精のよう」と言わせるほどであった。
しかし青い髪の戦姫たる少女はどこか不機嫌そうだった。いや本当は大声で喜びを表し泣き付いてすがりつきたい気持ちであったのを不機嫌を装っておし隠していたのかもしれない。
「久しぶりだな。」
ティグルはミラに笑いかけたが、ミラはすぐには返事をせず、しばらく頭からつま先までじろじろと眺めてから小さく頷いてはじめて言葉を発した。
「腕がなくなるような大けがはしていないみたいね。」
「ああ。みてのとおり五体満足だ。心配させてすまなかった。」
「・・・・ 心配？べっつに心配なんてしてなかったわよ。」
ことさらにそっけなく言ってミラは赤い髪の青年から顔をそむける。
「あなたのことはよくわかっているもの。簡単に死ぬようなひとじゃないって・・・・ ただ少し気になっただけ。」
「なんだ、てっきり大声でうれし泣きしてティグルにすがりつくと思っていたのだがな。」
聞こえよがしに発言したのはエレン、銀閃の風姫、ライトメリッツの戦姫エレオノーラだった。
ミラは顔を真っ赤にして白銀の髪の戦姫をにらみつける。

「ひ、人前でそんなみっともないこと、するはずないでしょう。」
「それをみっともないと考えるのがお前の欠点だな。ん？「人前で」と言ったな？人前でなければやったのか？」
　ミラはしまった、とばかりに口をつぐんでわずかにとがらせ、視線を泳がせる。テイグルと目が合うとこれ幸いとばかりにとっさに話題を変える。
「・・・・紅茶（チャイ）」
　テイグルは一瞬意味が分からず、顔を赤くしている青い髪の少女を見つめる。
（ここは、わかってよ。）
　ミラは、不満そうに口をとがらせて言葉をつなげる。
「あなたがアスヴァールで買ったというお土産よ。悪くなかったわ（＝翻訳・とてもよかったわ）。でも（＝翻訳・だからこそ）、ああいうものは、ちゃんとあなたの手から受け取りたかったわね。」
　無茶を言うと思いながらも、目の前の青い髪の戦姫の切なる願いとても気に入っているというミラの気持ちをティグルはうれしく思った。
「次の機会にはそうするよ。気に入ってもらえたようでよかった。」
　青い髪の少女は、かすかな笑みをうかべたすまし顔で赤い髪の青年を見つめて
「ええ。今度オルミュッツに来たらわたしの淹れたものをご馳走してあげるわ。」
　と言った。その後ソフィーの部屋に向かうことになるが、このときミラが、わたしもついていくと言い、それから戦姫たちがぞろぞろとティグルについてあるいて行列のようになったという逸話が伝えられている。
　さて、ジスタート王ヴィクトールのすすめでバルドゥ伯爵ユージェン＝シルヴァーリンとティグルが会っていたころ、ジスタートの王宮に急報がもたらされた。
　老王ヴィクトールは、顔色を変えずに食事をすませると侍従とともに大広間に向かう。

またティグルや諸貴族たちも大広間に集まっていた。
突然王が姿を見せたことに貴族たちは驚き、料理を口に運ぶ手をとめ、談笑するのをやめて、大広間は静まり返る。
ヴィクトールは、大広間を見渡し、視線を巡らせ、ティグルを一瞬見つめるがすぐに視線をはずす。
ティグルは自分が見られたと一瞬思ったが、名だたる大貴族もいるし、老王が自分を見つめる必然性などないと思い直す。
「楽しいひと時を邪魔することになってすまぬが、皆に聞いてもらいたいことがある。」
間をおいて老王は続ける。
「我が国にとって親しき隣人であるブリューヌ王国にザクスタンが攻め入った。」
大広間に緊張がはしり、どよめきが起こる。そして、ざわざわとざわついた。
ティグルは老王を見上げる。
一刻もブリューヌに帰りたいという気持ちが若者をして貴族たちをかきわけさせ、王の面前にすすませた。
「ヴォルン伯爵、そなたの発言を許す。国元が平安をとりもどすまで我が国にとどまるというのならばそれもよし。喜んでそなたをうけいれよう。どう考える？」
ティグルはためらいはないどころか、ブリューヌに戻らなければという気持ちがはやるのを抑えながらひざをついた。
「陛下のご厚情に感謝いたしますが、恐れながらわたしに退出をお許し下さいますようお願いいたします。」
「退出してどうするのか？」
「ブリューヌへ戻ります。ザクスタンと戦うために。」
くすんだ赤い髪の青年の瞳が、強い決意を訴えているのを見てとり、老王は感心して満足げにうなづく。
「さすがブリューヌの若き英雄よ。そなたの勇気に敬意を表し、余からも贈り物をさせてもらおう。」
戦姫たちは、思わず老王に視線を向けたが、老王の視線は白銀の髪

の戦姫に向けられる。
　ヴィクトールは、厳かな口調で白銀の髪の戦姫エレンに命じる。
「エレオノーラ＝ヴィルターリア、そなたは、ヴォルン伯爵に協力し、二千の兵を率いてブリューヌへ向かえ。さて、エレオノーラよ。」
「はい、陛下？」
「ライトメリッツは、一昨年のディナント以来、出兵が続くが如何？」
「いえ、全くかまいません。微力を尽くします。」
　エレンは、正装していたが、かまわず膝をつき頭をたれ、心の中でつぶやく。
（う～ん、二千か・・・・　三千くらいは率いたかったな。まあ、なにもおっしゃらなければわたしから頼んでいたところだが・・・。）
　青い髪の戦姫はそれを聞きながら考える。
（わたしも行きたい。エレンだけにいい顔させたくないということもあるけど、ティグルを助けたい。）
　次の瞬間ミラの想いが口をついて出る。
「陛下、謹んで申し上げます。親しき隣人の危機にあって二千の兵しか送れぬとあっては我が国の名折れでございます。何卒私にも出兵をお命じ下さい。」
　それは、いてもたまらずといった語気をまとっていた。しかし、老王は、
「ならぬ。」
　と一言のもとに毅然とした語気でその発言を拒む。
「昨今からムオジネルが怪しげな動きを見せている。南部国境に近いオルミュッツとポリーシャの両戦姫は、ムオジネルの動きに警戒し、備えよ。ブレストの戦姫には両戦姫の後詰めを命じる。」
（正論だわ。たしかにムオジネル、とくにクレイシュは油断ならない・・・。）
　ミラは内心忸怩たる思いであったが、ムオジネルという国名を出されて、赤ひげの王弟の顔が脳裏に浮かんでは、引き下がらざるを得なかった。
　ソフィーとオルガは名指しされ、その表情に緊張の色を浮かべて硬

くする。ミラを含めた三人の戦姫は内心に苛立ちと歯がゆさをかかえつつ、膝をつき、頭をたれ、拝命を受ける態度を示した。結局ヴィクトールは、オステローデを治める黒髪の戦姫ヴァレンティナにライトメリッツとともにヴォルン伯爵に協力し、三千の兵を率いてブリューヌへ向かえと命じた。

エピローグ後編　新たなる戦いの序曲（2）

ソフィーが立ち上がり、王の前に進み出る。緑柱石の瞳には不安をただよわせ、その表情はやや青ざめていた。それはミラなどエレン以外の直接ティグルを助けられない戦姫たちの想いでもあった。

「陛下、恐れながらオステローデからブリューヌへ向かうには相当の距離がございます。もちろん陛下には何かお考えあってのことと存じますが、その深慮のご一端だけでもお聞かせ願えないでしょうか？」

「オステローデの周囲にわが国を脅かすような深刻な脅威はない。それで充分ではないか。ヴァレンティナよ。そなたはどう思う？」

「わたしも陛下と同じ想いにございます。」

「陛下のご温情まことに感謝いたします。」

ティグルは、老王ヴィクトールに礼を述べるが、感謝の念に堪えないとは言えなかった。膝をついているヴァレンティナに一瞥しつつも、赤い髪の青年貴族の胸中には不安がよぎる。

（なぜミラやソフィーでなく、彼女なんだ？）

マスハスやオージェの顔が浮かぶ。ミラやソフィーの名を聞いた場合との落差が容易に想像できる。ヴァレンティナの名前を聞いたことがないだけではない、しかもブリューヌから遠いオステローデからだという。ティグルには老王が何を考えているのか全く理解できなかった。

「それでは、失礼させていただきます。」

ティグルは大広間を後にした。白銀の髪の戦姫、つやのない金髪の副官、ツインテールの侍女があとに続く。戦姫たちも足早に出ていき、老王は何もなかったかのように大広間から歩き去った。

しばらくすると大広間は何もなかったように貴族たちの談笑の場にもどった。

ティグルは廊下で戦姫たちに別れを告げる。ミラの耳にティグルの口から

「ここでお別れになるけどまた会おう。」

という言葉が発せられ、手が差し出される。
「そうね。いい土産話を期待しているわ。」
青い髪の戦姫は、赤い髪の青年貴族の手を握り返した。
「クレイシュ様、ザクスタンがブリューヌに攻め込みました。」
「ほう?」
金銀、宝石で飾った彼の豪奢な天幕のなかで、精悍な若者があぐらをかいた赤ひげの壮年の男にひざまずいて報告をしている。
「西方から五万、南方から海を渡って二万が攻め込んだようです。」
「はっはっは。まさかとは思ったが小うるさい白鷲どもに先を越されるとはな。」
赤ひげの男はムオジネルの王弟クレイシュ＝シャーヒーン＝バラミールという。十年前そのザクスタンの艦隊千隻をたった二百隻で沈め、数々の戦功をムオジネルにもたらしてきた。オルメア会戦では引き返すことになったが、それはティグルとそれを援助したミラの善戦もあったものの、決定的にしたのはレパティウムの海戦でムオジネル艦隊が敗れたことだった。その赤ひげの王弟は、天幕の中で笑い声を響かせる。
「いかがいたしましょうか?先んじたとはいえザクスタンがそう簡単にブリューヌを滅ぼせるとは思えませんが。」
「ふむ。そもそも滅ぼす気があるかな。やつらの目的が何なのかだ。私の計算では、倍の兵力が必要だ。ほしいだけ領土を削り取って引き上げるかもしれんぞ。」
赤ひげの王弟はすこし考えてからつけ加える。
「それともそんな数で征服が可能になる手があるのか。そうなると、いつブリューヌを攻めるべきか考えものだな。」
赤ひげの王弟はいくつかのシュミレーションを脳内で行うと、若い有能な側近に話しかける。
「ダーマードよ。」
「はっ。」
「ティグルヴルムド＝ヴォルンは生きていたのだろう?やつはどう動くと考える?」

「彼は間違いなくブリューヌに戻ってくると考えます。」
「ほう、その根拠は？」
　クレイシュ眼をらんらんとかがやかせる。
（この英傑にして、ティグルヴルムド＝ヴォルンは意識せざるを得ないらしい。）
　ダーマードはかすかな嫉妬を覚えたが、なにくわぬ顔で、赤ひげの上官に、アニエスからオルメア会戦の戦績について述べ、
「これを考えるに、やつは、我が軍が北上する可能性があっても自領にもどって様子をみるべきでした。わずか二千足らずで、命がけで無駄、無謀な戦いをわが軍に挑んだのです。それから・・・」
　アスヴァールでのティグルの行動をクレイシュに説明した。
「こういったことから、やつは民を見捨てられない、と考えればすべて行動に説明がつきます。無類の善人というわけではないにしても・・・。」
「ふむ。それでは、民を人質にすれば降伏するかな。」
「それはしません。それは閣下もアニエスの戦いでご存じのはずです。」
「基本的には善人だが、そのことばかりにとらわれないということか。」
「そういうことです。たとえ単騎でも戻ってくるでしょう。」
「そうか。じゃあとりあえずザクスタンに使者を送ろう。」
　クレイシュは愉快そうに指示を出す。
「われらと手をくんでブリューヌを切り分けようとな。それまでは様子見だ。」
「？では、兵を動かさないのですか？」
「全く動かさないのも考えものだな。二万ほどをジスタートのオルミュッツに向かわせるとするか。」
「陽動ですか？」
　クレイシュはダーマードに笑みをうかべてみせる。
「わかったか。だが、本気（笑）で行くぞ。ブリューヌを攻める陽動だと思わせない。ジスタートを攻めるために探りを入れていると思わ

せる。わっはっは。」
（リュドミラ＝ルリエよ。こんどこそ封じ込めてやる。ティグルヴルムド＝ヴォルンを助けたくても助けさせない。オルメアの意表返しだw）
「オルミュッツと軽く戦った後にアニエスに二部隊ほど偵察を送り込む。ダーマード、その意味がわかるか？」
　クレイシュは楽しそうだ。ふんふんと鼻歌交じりに若い部下に問いかける。
　ダーマードは少し考えて、上官が何を考えているか、あるいは成果があげられる方法は何か考えてそれを口に出してみる。
「二つの部隊のうち一つはオルミュッツを攻めるための地形を調べ、もう一つの部隊はブリューヌへ抜ける間道を調べる、ということでしょうか？」
　クレイシュは、よくできた、という表情を若い部下に見せる。
「その通りだ。ぎりぎりまでオルミュッツを攻めるという姿勢に徹する。ブリューヌは、アニエスをジスタートにくれてやって盾代わりにするつもりだったのだろうがそれならそれでやりようがある。」
　赤ひげ王弟の頭脳はフル回転し、想定する未来図を実現するための次の数手がその脳裏にえがかれていた。
　さて、オルミュッツ公国のミラの執務室である。
（ふう。これで今日の政務は終りだわ。）
「戦姫様」
「何？」（えw何かあったのかしら・・・　もう休みたいのに・・・）
「フォドニー城砦からの報告です。ムオジネル軍約五千がモラーヴ河付近に現れたそうです。」
（!!容易ならざる事態ね。）
　ミラは報告にきた兵をねぎらう。
「お疲れさま。今日は休んでいきなさい。」
　青い髪の戦姫は執務机の上にある鈴をならし、文官を呼んだ。
「リュドミラ様、どのようなご用で？」
　ミラは偵察兵のほうを見て

「彼が休む部屋を用意して。それから国境地帯が描かれている地図をもってきて。」
「はっ。」
（どうする気かしらね。本気で攻めてくるのか？ただの様子見か？あれほどの男がいつまでも成果なしに様子見ばかりしているとは思えないけど・・・）
「お求めの地図でございます。」
「ありがとう。」
　地図を執務机の上に広げる。
（フォドニーを守る兵は二千足らず、相手は五千・・・ 北と西に山が連なっていて、普通であれば五倍の兵でも落とすのは困難。けれど相手が相手だから油断ならないわね。）
「軍議を開きます。部隊長を呼んで。」
「はっ。」
　半刻後、ミラは状況を部下たちに説明すると
「私は、二千を率いてフォドニーへ向かうわ。あなたたちもいつでも出撃できるよう準備しておきなさい。」と告げた。
　公主であり戦姫であるミラがフォドニーに赴けば士気はあがり、有利になる部分はある。しかし何が起こるかわからないのが戦場だ。歴史上勝利した指揮官が死亡した戦いもある。最近ではレパティウムの海戦で負けたムオジネルのみならず勝ったはずのブリューヌの総指揮官が死亡している。だからこそ部下たちはミラの身を案じていっせいに難色を示した。
「戦姫様、このような戦になにもご自身で出陣なさらずとも・・・。」
「ここは、我々に武勲をたてる機会をお与えいただけないでしょうか。戦姫様は、公宮にて勝利の報告をお待ちになってください。」
　しかし、部下たちの言葉に青い髪の戦姫は首を横に振って応える。
「あなたたちの忠誠と勇気はありがたく思うけど、まだムオジネルと戦うと決まったわけじゃないわ。だから行くのよ。現地へ行って見極めるためにね。」
「それからポリーシャのソフィーにこの状況を伝えて。それか

ら・・・。」
　ミラはいくつか影響が見込まれる近隣の貴族の名前をあげて使者を送ること、街道沿いの都市に伝令を走らせるよう文官たちに指示する。食糧、燃料、兵を駐屯、宿泊させる場所の手配だった。
　報告があった翌朝、ミラは二千の兵を率いて出撃する。行軍中ミラは考える。
（フォドニーを攻めるにも標高が高く寒い。ムオジネル兵は寒さが苦手なはずだからやはり陽動かしら・・・。）
　四日後、フォドニー城砦が築かれた山のふもとに達する。
「ついたわ。皆を休憩させて。」
　山のふもとのジスタートとオルミュッツの軍旗をみて、フォドニーの守将レザノフは、部隊長に百ほど率いさせて山をくだらせる。
「まさか戦姫様自らがおいでになられるとは・・・。」
　フォドニーの部隊長たちは、ミラの前に膝をつき頭を垂れる。
　ミラはうなずいて、
「待っていたわ。それでは城砦まで登るわよ。」
　半刻ほどで城砦に達すると守将レザノフが出迎えに現れる。
「戦姫様、よくおいでくださいました。」
「あなたも、兵たちも元気そうで安心したわ。で、ムオジネル軍の動きは？」
　青い髪の戦姫は部下たちの無事を確認できたうれしさを一瞬の笑顔で示すものの、事態の深刻さに気持ちを切り替えて真剣な表情になってたずねる。
「いまのところ、ムオジネル軍は、モラーヴ河の近くにとどまっています。数名ほど河を渡った者がいましたが、すぐにもどっていきました。」
「こちらからは何かしたの？」
「一度だけ兵を向かわせ、事情をききました。行軍の訓練との返事でした。」
　ミラはレザノフとともに城砦の南側の城壁の上に出る。冷たい風で彼女の青い髪とリボンがそよぐ。眼下の平地に５ベルスタ離れた

モラーヴ河の流れが一望できる。
春の日差しで河の水面がきらきらと輝いている。その対岸にはムオジネル軍五千がアリのように終結し、黒々と見える。緋色地の中央には牡牛の角をつけた金色の兜が描かれた軍旗がいくつもひるがえっている。
「ここから見えるのはあれだけですが、それがすべてとは思えませぬ。」
レザノフが話しながら、はく息が白く見える。ミラもムオジネル軍をにらみながらうなづき、
「そうね。」
とつぶやく。
（このままにらみあうのか？むこうから仕掛けてくるのか？）
「レザノフ、いま偵察は出している？」
「はい。」
「どのくらいで戻る？」
「あと一刻ほどかと。」
「ちょうどいいわね、相手は一刻や二刻では仕掛けてこない。軍議を招集するわ。いくつか想定できる事態を考えておくように伝えて。」
「はっ。」
青い髪の戦姫と白髪と白髭を生やした守将は城内へ入っていった。